
例えば勇者の模造品

零月零日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

例えば勇者の模造品

【Nコード】

N73530

【作者名】

零月零日

【あらすじ】

魔力の存在が認められ、しかし魔法は表舞台に立てない世界。試験で不正行為を働き停学、定職は無い、絶賛NEET生活中のナイン。彼は『RPG』と呼ばれるHPとMPを生み出すスキル保持者であった。＜勇者の模造品＞と呼ばれるナインの意味は？ 国を変える程の力を持った物達の結果であり、魔力の存在が認められてから、たった四年後の世界のお話。

プロローグ（前書き）

4 / 19、思う所があり、入れ替えました。

ブローグ

少年は落日を見ながら公園のブランコに腰掛け、缶コーヒーを飲んでいた。学校帰りの解放感、残業開けの達成感とは違った感情を抱いて。

「仕事、か……」

項垂れるナイン（十八歳）は、今日を持ってNEET二周年記念である。

真つ赤な夕日を見ながら、何とも言えない敗北感と一緒にコーヒを飲み込み、寂寥感を溜息と共に吐き出す。リストラされたお父さん、そう表現するのが相応しい雰囲気だった。

何が悪かったんだろう。

今日までに一体何度繰り返したであろう問答を、ナインはこのNEET二周年記念日にもしてみた。

「やっぱ、学校を停学になった事かな……。それっきり一度も行っていない事もあるだろうし、意外とその状態で生きられた事が一番かも」

ナインは自分の財布を見る。

クシャクシャに丸められた一万円札が二枚程、五百円玉と百円玉それに十円玉だけで構成された小銭の集合。小銭がお札を入れる方に、お札が小銭を入れる方に分けている。それはただ単に小銭を探すのが大変だから広い方に入れようと思っただけのことなのだが、おかげで紙幣は常にヨレヨレである。

NEETのくせに金持ちだ、と言われた事が数回あるが、しかしこれが彼の全財産だという事を考慮すると、多いのか少ないのかよ

く分からない。へそくりなど持ち合わせていないのだ。

収入はバイトのみで、それも不定期かつ危険極まり無いものだった。しかしその反面、誰もやりたがらないという理由で高収入。彼の自堕落な生活を成り立たせる金額で、それが彼のN E E T生活を長引かせていた。

「……結局悪いのは俺で、自業自得かよ」

最終的に行き着くところはいつもこれだった。

他の皆がちゃんと社会に適応して行く中、自分だけが仕事も学校も無いのは、自分が何か悪い事をしたからだろう、と。

はああ、と大きな溜息を吐き、彼は何となくこんな事を言っていた。

「俺って、これでも勇者なんだよな」

そう言ってみた。言ってみただけで、その真偽はかなり怪しいが。最近巷で売られている『寿命が延びる浄水器』とか、『天才の脳みそを食べると天才になれる』という噂並みに怪しい。

信じる者は救われる、と言うが、この場合信じてみても救われる者はいないだろう話だ。

誰にも信じられはしないし俺自身信じてない、とサインは思っていた。

ただ、こうは思っていた。

「仮にもし本当に俺が勇者なら、家宅に侵入して壺やら樽をぶち壊し、壁の小物袋やタンスの中身を漁り、上は金銀財宝、中は薬や武器、下は下着やペットのお召し物までをありがたく頂くんだけだな

あ。勇者は治外法権アリですかつて話だな」

最低の野郎だった。

だが、彼はちゃんと解っていた。

「しっかし、この世界に魔王なんていないじゃん。魔王がいなければ勇者の需要も無い。当然『家宅侵入罪』や『窃盗罪』が適応され、俺は見事に檻の中つか？」

俺は囚われの姫様を助け出す人間だろうそれじゃ逆だろ、などと呟いていた。

危ない人間だった。

NEET二周年のため若干ハイテンションなのかもしれない。本人も、そろそろ何かしないとヤバいんじゃない？ と思っている。思っているだけで、行動は特にしていない。一応、バイトはしている。

「よし、決めた！ 明日から頑張ろう！」

それは……結局しないフラグじゃないのか？ ナインは心の中で自分に問うてみたが、その答えは二文字で、肯定の意味の言葉だった。ちなみに、一年前と同じ答えだったとか。

コーヒーを飲みきり、律儀にリングプルを取り外し財布の中に入れる。そして空き缶は、自動販売機横のゴミ箱に入れた。ついでにそこらに散らばっていたゴミを拾い、きちんと分別し公園内のゴミ箱に入れる。

エコに協力する俺に、神様なんかのお礼を下さい。現金で一万円、空から降らせてくれると嬉しいな。出来れば仕事も一緒に欲しいな、そうナインは思った。

現金な野郎だが、彼は彼で一日を生きるのにかなり厳しい生活を

送っているので、そこを察してもらえると彼は救われるだろう。因果応報、という言葉で何かを察してほしい。

そして願い叶わず、彼の一日は終わる??はずだった。

本当に現金でも降ってこないかと上を向いて歩いていたナインは、それをしっかりとその目に焼き付けた。

このタイミングで、それは起こった。

だから、それはもしかすると、神様が彼にくれたエコ活動のお礼だったのかもしれない。

それは――。

空から少女が降って来た。

まあ、だからと言って驚く事は無いのだが。

今の時代、空からUFOが落ちて来ても可笑しくないのだ。実際、数年前には侵略者が宇宙船で襲来したのだから。

その際、侵略者を撃退するのに『魔法』が用いられ、現在では魔力を使うことが当たり前となりつつある。第二次世界大戦時に日本で敵の兵士を倒すため竹槍の訓練をしたような、そんな意味合いで魔力を使うようになってるのが、今現在のこの世界の現状だ。最も、竹槍と魔力では、その訓練の結果は大きく変わるだろうが。魔法と言えば、空を飛ぶ。

だから、少女が空から降って来ても、何も可笑しくないのだ。

「ぎゃん!」「きゃっ」

だからと言って、降って来た少女を受け止めるくらいしないと、押しつぶされるのは目に見えているが。

それがナインと少女、朝井愛葉との出会いだった。

「ごめんなさい。大丈夫ですか？」

「……いいから、さっさと降りてくれ」

押しつぶしたまま問いかける少女に、呆れながらナインは答えた。
あ、すみません、と少女は謝りながら少年から離れた。
と。

「ハッ！　なんだよ、逃げる事は無いんじゃないか？　生徒会長さんよおー？」

妙に変な口調の青年が、そこにはいた。突然現れたというように……いや、男の背後には十人以上の男がいる。どうやら、少女を追っていたらしい。

（あんまり穏やかな雰囲気じゃないな……）
立ち上がったナインは服に付いた埃を落としながら、男達を観察する。

だいたい自分と同じくらいの年の男達は、柄の悪い人相を醜く歪め、近寄りがたい雰囲気醸し出していた。

その中でも、先頭の妙な口調の青年だけは、他と違い明らかな憎悪を溢れさせていた。

「ん？　なんだよ、その男。ハッ！　まさか生徒会長さんよおー、そこの一般人に助け求めんの？　ふん！　さすがは人間兵器だな！」

「失敗作品が調子にのるな！」

と、隣にいた少女が怒声を上げた。

先ほどの落ち着いた感じの、丁寧な言葉遣いは一変していた。ど

うやらコチラが素のようだった。

ナインは目紛しく変わる現状に混乱して来た。ナインは訳も解らず自分を攻撃した。

痛い！ どうやら現実のようだ。

「失敗作品だあ？ 誰が好きでそんなモンやってるかよ！」

「アンタ達の行動は、不良行為よ！ 評価されたいなら、それなりの行動をしなさい！」

一触即発の雰囲気、巻き込まれそうなナインは面倒になった。
ナインの悪い癖が出てしまった。

「ちよつといいか？」

ナインは隣の少女の肩に手を置く。セクシャルハラスメントは性的嫌がらせ。もしも彼女がセクハラで訴えを起こした場合、少女は肩が性感帯でなければおかしい気がする。

「何？ さっきのは謝るから、あなたはさっさと逃げなさい」

こちらを見ようとせず、臨戦態勢な少女。血の気が多い事である。

ナインは溜息をついて、言った。

「いや、見て見ぬ振りは出来ないから。ごめん」

「は？」

ナインは少女の怪訝そうに振り返る顔が見えた。

ナインは人差し指を小さく動かした。

その瞬間、ナインと少女は青年達の前から消え去った。
文字通り、跡形も無く消え去ったのだ。

「……はん？」

男達は呆然と立ち尽くした。ぽつんと取り残された彼らは、酷く
虚しい気分になっていた。

「ああいう奴らとはあんまり関わらない方が良いと思うぞ。じゃあ
な」

先ほどの公園から一キロ程離れた広場で、ナインは目を瞬く少女
を置いて踵を返した。

若干、俺って優しいなあ、なんて思いながら。

「ちょ、ちよっと待ちなさいよ！」

ナインは立ち去ろうとした……、しかし手を捕まれてしまった！
少女の柔らかなで温もりのある手が触れ、ナインは精神的ダメージを受けた！

ナインはどきまぎしている！

「な、何？ お礼は要らないけど」

とは言いつつも、チラリと視線を向けるナイン。若干期待に胸が弾んでいる。

勿論、脳内であらぬ妄想を抱いて、だ。

（一体いくらくれるかな、お嬢様っぽいし……）
現金な野郎である。

「あつ、と、とりあえずありがとう？？じゃなくて！ 今の何？」

少女の反応を見て、ああ、まずったかな、とナインは顔をしかめた。それから、少女の不思議そうに自分を見つめる視線から逃れるように、明後日の方角を見る。

「……なんだ、えっと……瞬間移動？」

「……………あなたのランクと学校、教えてくれない？」

ああ、嫌な予感がする。明らかに見せてはいけないレベルの魔法を見せてしまったな……。

ナインの後悔は遅く、少女はしっかりとナインの服を掴んでいた。どうやら見す見す離してはくれなさそうだった。

魔力が使われるようになって、瞬間移動は珍しい力である。

「えっと、ランクは『9^{ナイン}』。学校は通ってない」

「通ってないって、もしかして社会人？ 何歳？」

その質問の仕方だと、大人に対する聞き方としてはなっていない。明らかに自分と対して年が変わらないと意識している聞き方だ。事実ナインはそうだったが。

「十八。」

……ちなみに、NEETだ」

答えるのにかなりの沈黙を要した辺り、最後の台詞は言うかどうか悩んだようだった。

その割には、凄く爽やかな笑顔で言ったが。

まるで、その事を自慢しているような、そんな錯覚を覚えさせる程の笑顔だ。

「NEET！？ 瞬間移動なんてハイスペックなスキルを持つてるのに！？ 働けっ！！」

瞬間、怒鳴られた。罵倒された。全然ご褒美とかではなかった。(だから言いたくなかったんだよね……。言うからには自信を持って言うけど)

初対面の少女に責められる自分を情けなく思いながら、しかしそれは自分の勝手だろうとナインは思った。

「お前には関係ないだろ？ 俺が働いていようといまいと。それと、学校は停学中なだけだ！」

「関係ある！ 有能な人間がNEETなんて、見過ごせないわよ！そして、学校は停学中だなんて自慢げに言うな！」

理不尽だな、とナインは思ったが、それ以上に理不尽なのはこの後だった。

「私が勝つたら、アンタをNEETから脱却させる！」

「どうしてそうなった!？」

思わず本音が口から出てしまったナインだが、本当にその通りだった。

勝つたらって何？ 勝負するの？ なんだって初対面の女と？

俺は女の子が苦手なんだけど？

クエスチョンマークのオンパレードだった。

「アンタの所為で、私が逃げたなんて噂が立つたら、どうしてくれるのかしら？ アンタを連中の前に引き出して、こいつが勝手にしたことですって説明するにも、それなりの立場がいるのよ。NEETに連れていかれたなんて、説明できないでしょ？」

どうやら八つ当たりしたかったらしい。

先ほどの奴らから無理矢理逃がしたのがまずかったようである。

本当に、先ほどのお礼はとりあえずの感謝だったようだ。

幸運か不幸か、空から降って来たのは、仕事をくれる少女だったのだが、仕事を手に入れるには、ボコボコにされなければならないらしい。

勝負ではなく、「ウチの学校に入らない？」とか、「仕事紹介しようか？」などと言った優しい誘いがなかったのは、憂さ晴らしのためだろう。

それと、ナインのちゃらんぼらんな態度が原因と思われる。

(こんな奴の世話になって仕事に就いたら、一生こき使われるっ！)

危険信号を受信したナインは、目の前にある脱NEETを蹴り飛ばした。

元々、結構今の生活が気に入っているようでもあった。

「……わかったよ、勝ったら俺の好きにしていんだろ？」

勝つ気は無いが、負ける気もないナインは、かなり真面目に戦いに臨んでいた。

自分の自由のために。

そして、結果は彼の逃亡だった。

プロローグ（後書き）

十万語目指して頑張ります

第一章 R P G ・ 1 (前書き)

4 / 19、入れ替えました。

第一章 R P G ・ 1

そこでは、引きつった笑みの少年と、不敵な笑みを浮かべた少女が対峙していた。

二人が対峙しているのは、街の中心部にある広場。広場の目的が目的であるため、周囲は樹木で囲まれ、広く大地が剥き出しとなっている。

少年の方は黒髪で平凡なルックス、それにこれまた普通……という着古しの服。

少女の方は月夜でも輝く金髪に、思わず息を飲んでしまいそうな程の美しい顔立ち。黒を基調とした制服姿。

少年、ナインは、夜の帳が降りた空で、儚くも輝く星に疑問を投げかける。

なぜ俺は女子高生に殺されなければならないのだろう……と。

「逃がさないわ。そして、勝たせてもらうわよ」

「いや、だからさ、俺は別にお前に勝ってないし、勝とうとも思わない。俺にはお前と戦う理由も無い。大人しく帰らせてくれませんか？」

「何度言ったら解る訳？ 私には生徒会長としての意地があるの。小さな噂でも、アンタみたいな得体の知れない奴に負けたと知られ

れば、学校全体の評価に響くのよ！ だから、大人しく死ねっ！」

死ねって酷いな。でもまあ、その噂が生まれたのは俺の所為かもしれないし……。

ナインは面倒そうに頭を掻き、それでも仕方の無い結末だと内心思った。

ナインと少女が出会ったのは二日前。

ナインは少女に馬鹿にされ、売られた喧嘩を買った所、たった一撃で敗北……しなかった。だが、数秒対峙しただけで戦闘を放棄、全力で逃げ出したのだった。それは、少女のスキルが異常であったが故である。戦えば命が危ういと判断し、生存本能に従ったまでであつた。

だがそれは、『空全絶護』^{くうぜんぜつご}と呼ばれる少女、名門黒嶺学園生徒会長様にとつては驚愕の展開。ナインはナインで眼に涙を浮かべて逃走、しかし少女に取って倒せなかったという結果は、その役職に汚点を残す事。少女はナインを追いかけた。

第三者目線から見ても、『もう、待つてよ』『はははは、捕まえてご覧』といった桃色の追いかっこではないのが解る、片方が血眼、片方が涙目と言う嫌な鬼ごっこが数日に渡って繰り広げられた。

そして日時は変わり、現在に至った訳である。勿論、ずっとその追走劇が続いていた訳ではない。

「……解った解った。相手をすれば良いんだろ？ そんで俺が負ければ良いんだな？」

諦めたようにナインは少女の瞳を見据え、近くに落ちていた木の棒を拾い上げる。おおよそこの店に出しても売り物にはなりそうもない、本当になんの変哲も無い木の棒だった。ひのきではない。

もしかすると、どこかの世界では買い取ってくれたかもしれないが、この世界では無理な話である。

「それじゃ駄目。やらせじゃ意味無いの。むしろ、そんなやらせをした事で咎められるわよ。アンタは本気で私に掛かって来なさい。それを私が叩きのめすから」

「……本気、ね」

本気出しても、俺じゃ勝てないだろうな。てか、なんで俺がこんなことに関わらなきゃ何ねーんだ？ 何が悲しくて負けるための戦いに身を投じなきゃならないんだよ。オカシイな、目から涙が出ないよ。そっか、もう使い切ったんだ。

ナインは涙の流れない目を擦る。

「で、アンタはその木の棒だけでいいの？」

「あ？ どういう意味だよ、そりゃ」

少女は舐めきった視線でナインを見る。余裕が見え隠れどころの話ではない、ただ漏れた。

笑みを浮かべ、ナインの手に握られた棒を指差す。

「そんなショボイ武器で本当に私に勝てるのかと思ってるの？ ま、どんな武器でも私に傷一つ付ける事なんて出来ないだろうけど」

「おおっと、そんな事言つてると足下掬ってやるぞ」

武器は木の棒、防具は布の服。なんて最強装備だ。負ける気はない。魔王だって倒せそうだ。

というナインの装備の貧相さは、確かに最強レベルであった。

ナインの着ている服は、どこでも売っていきそうな普通の布の服……ではない。

その服は……古着屋でも買ってくれないだろうボロボロの物であった。特殊な効果もない普通の使い古した服、値打ちは付けられない。恐らく、売ろうとしても手数料を取られる一品だ。

対する少女の服装は、明らかにオーダーメイドの荘厳な制服。金の刺繍が見られ、恐らく特殊効果を持った一品。売れば高値で売れるだろう。どこかの世界では、買値の半額もしくは十分の一でしか売れないが、この世界では中古の品が高く売れる場合が多々ある。

美少女の着ていた服とか、オークションでは値段がうなぎ上りになるだろう。

「どんなスキルか知らないけど、逃げ出すようじゃ勝ち目が無いの解ってるんじゃない？」

ナインは苦笑いをし、少女は不敵な笑みを浮かべ、そして戦いの火蓋は落とされた。

少女は右手を前に突き出し、何も無い空間を刀でも掴むように握る。

瞬間、右手に目視が可能な程明白に渦巻く風の刀が握られていた。少女がそれを地面に向けて軽く振ると、風の刀はいとも簡単に地面を深く削った。

少女は見せつけるような笑みを浮かべると、ナインの間合いに入り、切り込む！

「それって生身の人間が喰らっていい物じゃねえだろ！」

ナインは握った木の棒でそれを受け止めようと、木の棒を風の刀の軌道に合わせて振る。

「解つてて木の棒で受け止めようとするアンタは、やっぱり馬鹿ね！」

風の刀が木の棒とぶつかり合い、木の棒はあっさりと、ナインの体はざっくりと切断され??なかった。

木の棒は、しっかりその攻撃を受け止めていた。

「なっ!?!」

見る者が見れば、ナインの持っている木の棒に大量の魔力が絡み付き、その強度を上げている事が解つただろうが、そのスキルの無い少女は驚きを隠せなかった。

「甘いんだよ！ 木の棒だろうと、使い手が強けりゃ最終兵器にもなんだよ！」

木の棒で風の刀を押し返し少女との距離を取るナインは、ひくついた笑みを浮かべていた。内心冷や汗ダラダラだろう。

少女の手にある風の刀は、先ほどの攻撃で巻き上げた木の葉に触れた瞬間、細切れにしていた。

人の体だろうと、きっとその結果は同じだろう。

「調子に乗るな！」

ナインの軽口に少女は怒号を上げた。それと共に、風の刀は四方に弾け飛ぶ真空刃となり、ナインを切り刻もうとする。

ナインに迫る真空刃はその過程で、地面に厚さ十センチ程の溝をつける。殺傷能力は高い。

それをナインは避ける事も出来ず、それをモロに腕で受けた。

だが、風の刃はナインに傷一つ付けることも、ナインのボロボロの服を裂く事さえも出来なかった。

(……な、なによこいつ！ あの攻撃を受けて何ともないのっ！？
どんなスキルよっ！？)

心中でかなり混乱している少女。はつきり言って、結構本気で焦っていた。

初めて、負けを意識したかもしれない。

しかし、ナインも焦ったように言葉を吐き出した。

「おいおい。『守備力強化魔法』から『吐息系軽減魔法』、『魔力吸収』に『防御』を重ねて358ダメージかよっ！ 特殊防御高めなはずなのに……何なんだよお前っ！」

意味の分からない台詞を並べられ、攻撃を受けても無傷でいるナインに少女はキレた。

「それはこっちの台詞よ！ そんなボロボロ一枚で、なんでアンタは

無事なのよ?」

「無事? めっちゃダメージ受けたよ!? 死ぬかと思った!」

「……私は殺すつもりだったんだけどね」

怖っ、と小さく呟くナインの心の中では、逃走という選択肢に再び票が集まり始める。

男に二言は無い、そんな時代は俺にはありませんでした……、と後に彼は語る。命より大切なプライドは持ち合わせていないらしい。ナインは少女をじっと見つめた。少女は何よと睨み返す。そして、

「ネーム『朝井愛葉』……ね」
あさいあい は

少女の名前をよんだ。それは、呼んだ、というよりも、読んだと言った方が適切な雰囲気だった。

「ちよっ!? なんで私の名前知ってるの!?!」

ナインは面倒臭そうに少女、愛葉を見つめる。

見つめられた愛葉は、名前を言い当てられた事の当惑とナインの観察するような視線に困惑の表情を見せた。

愛葉は自分の格好を見直して台詞を思い出せば、もう少し冷静でいられただろう。

ナインは見つめて……、愛葉の質問は無視した。

「気絶させるのが簡単だと思ったんだけどなあ。俺は攻撃魔法あまり

得意じゃないし、傷つけないし、何より死にたくない。……逃げるか」

「ちよっ！ 逃がさないって言ってるでしょ！」

にやりとナインは笑った。その笑みは、ここ数十分で見せたどんな笑みより自信に満ちていた。

いや、結局引きつっていたが。

「生憎、この世界ではイベントバトルでも逃げ出せるんだ。俺は無駄な争いは好まない質だし」

ナインの意味不明な言動に内心顔をしかめつつ、しかし愛葉は微笑を浮かべる。

逃走宣言が、愛葉の闘志に火をつけた。

「へえ、この『空全絶護』から逃げ切る自信があるんだ。さっきは諦めたみたいだけど」

自信に満ち溢れた顔で、愛葉は少年を睨む。けれど少年はそれを嘲笑うような笑みを浮かべ続けて言った。

「まあな。それじゃあな、『騒然節子』さんっ！」

「誰が節子だ！」

瞬間、轟！ と暴風が吹いた。

見れば、軽自動車をも巻き込まんばかりの竜巻が少女の周りに出来上がっていた。一トンもの重量を持つ物体を軽く渦巻かせる風力

に、当然人間は地に脚をつけている事は出来ない。

ナインは消えてしまった。

「嘘……ほんとに逃げられた」

愛葉は笑えなかった。

先ほど作り出した渦は捕獲用の物で、ナインを捕えた感触は確かに合った。けれど、渦に捕えたはずのナインはどこにも見当たらない。それどころか、無理矢理渦を突破された感触さえ合った。

愛葉は体が震えるのを感じていた。

夜の闇が深まり、肌寒く感じる気温となっているのでそれは当然とも思えるが、『空全絶護』にそれは無い。

空気に干渉する現象全てを操るスキル保持者、『空全絶護』は気温を常に自分にちょうど良いように合わせているのだ。

だから、その体の震えは、戦慄だったのかもしれない。

「危なかった。まさかあの竜巻、真空刃やら石片を含んでいるとは思わなかった。しかも若干捕われたし。生身だったらピンチでミンチだな。今度会ったら注意しとくか？ いやいや、会いたくないな。あの手のタイプは負けず嫌いだからな。どうなるかは目に見えてる」

ナインは心の底から溜息を吐き、床に座り込む。非常に虚しい独り言を呟いて。

そこは都心から少し離れた住宅街の一角にある、付近を林に囲まれた洋館だった。

池がある広い敷地内に、三階建ての古めかしい洋館。それを守るような立派な門と周囲を囲む柵が特徴だ。

少年は『RPG』を解き、『ステータスアイ算出眼』で自分の状態を視る。

「あゝ、HPが残り312、MPに至っては7かよ。冗談じゃねえな。俺の特殊防御は687あるけど、比較対称が無いから解らないだが、きつと高い方だ。と言う事は、あの女の攻撃が強すぎるってことか。今度参考にステータス見せてもらうか……って、出会った瞬間バトルになっちまえば意味が無いか」

世知辛い世の中だな……、とナインは呟いた。

第一章 R P G ・ 2 (前書き)

11 / 20、書き換え。

第一章 R P G ・ 2

「ほら、俺逃げたじゃん。あれは負けだからさ、もう止めようぜ？」

黒髪の少年、ナインは面倒そうに頭を掻いていた。

「逃げた？　なんで逃げられるのよ！　おまけに無傷とか、冗談じゃないわ！　アンタをボコボコにするまで私のプライドが許さないのよ！」

金髪の少女、朝井愛葉は憤っていた。

腰まで伸びた綺麗な金髪にピヨコつと立った毛が特徴の少女である。大人しく座っていれば高嶺の花になるうだろうが、今の彼女はさながらライオン。

予想以上に面倒だ、ナインは遠くを見ながらそう思った。

場所は少女、愛葉と出会った公園だが、時刻はいつもよりだいぶ早い一時となっていた。いつもは三時、学校が終わった頃である。ちなみに、いつもと言えるくらい頻繁に遭遇するようになってしまっていた。

「そう言えばさ、なんでお前今ここにいるんだよ？　学校じゃ……、もしかして一般人相手に魔力使ったのがバレて、停学とか？」

「例えそうだとしても、アンタにだけは笑われたくないわ。人として最低限のルールを守れないアンタにはね」

むっ、と感慨深く悩んでしまうナイン。

ちなみに、この話題が原因で彼は少女と喧嘩、その後の逃走劇、

そして戦闘という過去がある。

「そうですね、試験で不正行為するような俺はお前を笑っちゃ駄目なんでしょうね。社会の底辺の俺は、社会の頂点のあなたに何一つ敵いませんからね。ごめんなさい、無事に帰してください。もう声かけませんから」

そこはかたなく馬鹿にしている気がする、と愛葉は怒りに体を震わせていた。

ちなみに、その様子を食い入るようにナインは見ていた。いや、凝視していた。

「その社会の底辺に傷一つ付けられないなんて、社会の頂点として恥だわ……。ランク『9』のアンタをみすみす放っておくなんてね」

「……ネーム、朝井愛葉。クラス、魔兵専門学校黒嶺学園生徒会長。ランク『S』。特性、物理特殊攻撃無効化。……まじか」

ナインは愛葉を見続けている。

「……………何言ってるの？　なんでこっち見てるの？」

「スキル『空全絶護』、空気に関する森羅万象を操作する能力。……スペック高いな。さすが生徒会長」

ナインは愛葉を観察するように見ている。

「ステータス。攻撃380、防御445、特殊攻撃1083！？
特殊防御514、素早さ812……ね。けど、『空全絶護』のスキルが大抵のステータスを増加させるな」

「何こつち見てんだ、この変態っ!!」

よく今まで怒らなかったと思える程、ナインは愛葉を凝視していた。愛葉の叫びは当然である。

瞬間、風の刃がナインを切り裂こうと放たれた。喰らえば四肢が切断されるのは必至である。

「危なっ!」

それを転がるように避け、ナインはキッと愛葉を睨みつけた。

「危ねえだろ! 避けなきゃ死んでたぞ」

「どうせ無傷なんですよ!」

そう言っつて無数の風の刃を生み出し、次々と放ってくる愛葉。対して本当に無傷のナインは、

「ああくっそ! 解った! ちょっとタンマ! 一回落ち着こっぜ朝井!」

「だからなんで私の名前を知ってんのよ!」

火に油を注いで必死に逃げ回るナイン。

照れ隠しと言うよりは、機密保持の抹殺と取れるような攻撃をしかける愛葉。

平和とはいいがたい状況だった。

しばらくそんな調子だったが、不意に立ち止まりナインは高らかに吠えた。

「解った、相手してやる！ そのかわり俺が勝ったら飯をおごってもらおう！」

一時攻撃の手を止め、愛葉も同じように叫んだ。

「上等！ 私が勝ったら、アンタを血祭りに上げて曝し首にしてあげる！」

昼間だったが、走り回って以前に戦った広場に来ていたため、二人の発言は彼ら以外に聞こえていなかった。

ナインは人目を気にして広場まで走ったのだが、愛葉はどうにもそんな事は考えていないようである。

きつと、人がいても先ほどの発言をしたらろう。

（あれ、条件酷くね？ ってか負けたら俺死ぬじゃん。死に花散らしても良いけど、死に恥咲かせたくないぞ俺）

ナインのやる気が、死ぬ気変わった。

が、時既に遅し、ナインは風の渦に包囲されていた。

以前に見せた竜巻の改造版だろうか。その渦の範囲はとても狭く、ナインを中心に目紛しく回転している。渦の中には小石などが巻き込まれており、無理矢理突破しよう物なら、たちまちミンチになる所は以前と同じだった。

「チェックメイト、かしら？」

不敵に笑みを浮かべる愛葉に対して、ナインは動けなくなっていた。

勝負するなどと宣言する以前から、戦いは始まっていたのだった。

宣言したのも戦いの最中、宣言するため止まったのも停戦中でない。この時代、重要なのは勝利と言う結果だった。

「正々堂々の戦いとかしないんだ。黒嶺学園生徒会長としての誇りとか無いの？」

苦笑いを浮かべながらナインは計算、そして指を立てていた。

（『守備力強化魔法』、『吐息系軽減魔法』発動）

「さつきからアンタ、どうしてそんなに私の個人情報知ってるのかしら？ その情報の出所を聞きたいな。教えてくれたら、曝し首は止めてあげる」

「血祭りは避けられないんだな（ナインだけに）」

ナインは自分のシャレに小さく笑いながら指折りを、愛葉は話すのを続けた。

（『魔力障壁』発動、『加速魔法』発動）

「勝てばランクが上がって、負ければランクが下がる。ランクは就職に大きく関わってるって解ってるの？ アンタが無職で学校に通えないのも、その『9』なんてランクだからじゃないの？ 仕事付きたかったら、手段を選ばず勝ちに來なさいよ」

学校に通えないのではなく、停学後に通っていないのだが、対して差がないのでナインは無視する。

「本当に酷い格差社会だよな、今の世界。それで、お前はそれに納

得してるのか？」

「良いんじゃないの？ 才能があれば過ごしやすい世界よ？」

そっか、とナインは辛そうに呟き、指折りはもう止めており、そして。

「俺はさ、そんな世界が嫌なんだよ。ランクだとか、無理矢理戦う理由を作ってる気がするし。魔法は争いのためにある物じゃないと、俺はそう考えてる」

「……魔法？」

愛葉はナインの言動を訝しむ。

魔法。

それは何百年も前に忘れられた力。発展可能な科学と違い、魔法はその原理の解明が不可能であり、扱える人間を選んだためだ。

侵略戦争以後、魔力の存在を世界は認めたが、魔法の存在は埋もれたままだ。

現に、魔力を使う者を能力者と呼び、魔法を使える者を魔法使いと呼んで差別している。

（もしこいつが魔法を使えるのなら、私とやりあつて無傷でいられる理由も解る。『9』なんて巫山戯たランクも理解できる）

目の前に現れた好敵手に、愛葉は獰猛な笑みを浮かべた。

（私は勝たなきゃ駄目。絶対に引けない。負ける訳にも行かない。勝たなきゃ??）

決意を新たにした愛葉の思考を読んだように、ナインは言った。

「お前にどれほどの理由があろうとも、俺には関係ない。悪いけど、創られた感情は見飽きたんだ。負けてもランクは変わらないから、安心して負けな」

はっ、と愛葉はそれを笑い飛ばす。思考を読まれたことを隠すように。

創られた感情、その一言に揺さぶられた心を隠すように。

「調子に乗っていいのかしら？ アンタ、私の竜巻の中にいるのよ」

その台詞を無視して、ナインは自分の言いたい事を最後に言った。

「ちゃんと飯奢れよ？」

ナイン、今日の収入はゼロ。

晩ご飯の当ては……無かった。

食べるために戦う。

なんというか、生物としては間違っていないが、人間としては最低な理由で、ナインは愛葉との戦いを認めたようだった。

理由が無ければ戦えない、逆に言えば、理由さえあれば戦うようだった。

第一章 R P G ・ 2 (後書き)

第一章 R P G ・ 3 (前書き)

1 2 / 2 若干付け足しました

第一章 R P G ・ 3

俺に戦う覚悟はあるのか？

誰かを傷つけてまで求める結果を、俺は持ち得ているのか？

答えは……。

ナインは愛葉に向けて駆け出した。竜巻など関係ない。

「え？」

ズタズタの血祭りになる、そんな愛葉の予測を裏切った結果になり、思わず声が漏れた。

ナインが竜巻に脚を踏み入れた途端、竜巻は弾け飛んだ。否、それは言うならば、無理矢理消し飛ばされた？、そんな表現が正しいだろう。

竜巻を破壊し、ナインは愛葉との距離を縮めるべく脚に力を込めた。

瞬間、踏みしめた足下から土煙が舞い、弾丸の如く加速させる。

「????????????????ツ!!」

ゴッ！ と空気が爆ぜる音がして、二人の間で大きな土煙が起った。

迫るナインと自分の間に真空を作り出し、その真空に流れ込む空気の流れに身を任せ、愛葉は無理矢理ナインとの距離を取った。

『空全絶護』の自動衝撃吸収機能を使い、愛葉は自分の背後にクッション用のエアを生み出し、地面に叩き付けられるのを回避する。

（真空刃でどうにかダメージを与えられたと思うけど……、それにしてもちよつと強引な避け方よね。空に逃げた方が良かった？）

体勢を立て直しつつ、先ほどの自分の行動を反省する愛葉。

真空を生み出し、そこに流れ込む空気を利用して攻撃する真空刃だが、攻撃回避にはあまり向いていないのだと再認識する。

本来の彼女ならする事の無い失態。だが、本来の自分でいられなくなる程、愛葉は動揺していた。
そして、

「１１ダメージ。完全に防げたと思ったんだが……」

動揺させた人物、ナインは埃を叩き落としながら、平然と立っていた。爆発から１メートル程しか離れていない。

「……だから、なんでそんな布切れすらも無事なのよ！」

愛葉の指摘通り、ナインの服にはかすり傷一つない。完全に無傷だった。

……まあ、服の方はもともとボロく、一昔前のファッションに似ていたが。

「理解できないだろうから教えない」

「あつそ！」

愛葉の周囲を、彼女を守るように風が渦巻き始める。

それを見ていたナインは、一瞬だけ、右手の小指だけを折った。

瞬間、ナインの周囲にも同様の風の渦が出来上がっていた。

「……へえ、アンタも風使い？」

「まさか。『風護魔法』って感じかな」

だが、それは一瞬で弾けるように消え去った。

「残念。空気は私の味方よ？」

空気を掌握する能力『空全絶護』相手に、風を使って何かするのは間違いだった。

ナインは肩をすくめ、ひっそりと次の魔法を発動させた。

「けど魔法……ね。それなら、これはどう！」

愛葉の声と共に、空間が歪んだ。

それはよく見ると、空気の槍がナインを囲むように展開しているためだった。

1メートルを超える何百本もの風の槍が、隙間無くナインを取り囲んでいた。

「一歩でも動けば串刺しよ」

「……そりゃ怖いな」

だが、それでもナインは動いた。

瞬間、なんの躊躇も無く、槍はナインに全て直撃した。

だが、ナインの体に変化は見られない。

逆に、それを見た愛葉に変化が見られた。恐怖と驚愕に顔が強張っていた。

「……総計500ダメージ、か。『魔法反射壁』で相殺したと思っ
てたらこれか」

ナインは面倒そうに言い、はあ、と溜息をついた。

「……やっぱり無理かな」

その弱気な発言に勝機を見出した愛葉は、ひっそりと能力を最大解放。

大気中に霧散している魔力をフルに活用する。

「……アンタさ、正直すごいと思うわよ。私の攻撃で無傷なんてね」

「そりゃどうも。無傷じゃないんだけどな」

「アンタのスキルがどんな物か知らないけど、絶対に弱点はある。
アンタに勝つには、それを付けば良い話。そうでしょ？」

「そうだけど、解ってんのか？ 今日まで何度俺がお前の攻撃受けて来たか。そして、その結果が無傷なのを」

愛葉は憎々しげに頷きつつも、自分の出せる最高の力を放つ準備をする。

空に暗雲が立ちこめる。

「そうね。でも、アンタも解ってるんでしょ？ 私のスキル『空全絶護』の前では、どんな攻撃も無意味だってこと」

「ああ解ってる。……だからって、引き分けに終われない事もな解った、受け止めてやるよ。お前の最高の力って奴を」

愛葉のしようとしている事を見透かし、ナインは笑みを浮かべた。

「アンタが立っていたら、アンタの勝ち。解りやすいでしょ？」

獰猛な笑みを浮かべ、愛葉言った。
そして。

大地を震撼させる程の落雷がナインを直撃した。

『空全絶護』のスキルの最大能力は、天候すらも支配する事。天候・気温・湿度・気圧など、そのスキルの影響範囲は非常に多い。風を操るだけのスキルではないのだ。

攻撃という観点に関しては、例を挙げるならば気温調整・気圧変

化・酸素濃度調整などの特殊攻撃の方が優れているスキルだ。最も、物理攻撃に置いて、真空刃・竜巻・雷などがあり、十分な火力を持つ。リスクとしては、処理魔力が大きい事か。

だが、真空を生み出せる能力者である彼女が、大量の魔力を処理する物理攻撃をし、様子をみる必要性は無い。したがって、ナインには特殊攻撃が何一つ効かなかったと言う事である。

愛葉は先の戦闘で口にこそしていないが、既に特殊攻撃は仕掛けていた。

特殊攻撃を見透して防ぐ事は不可能に近い。気温、気圧、酸素濃度などは、眼に見える現象ではないからだ。

しかし、結果から言ってしまうえば、それらの特殊攻撃はナインに防がれていた。

どんなトリックを用いたか定かではないが、ナインは汗一つ掻く事も、気圧減少によって（大げさだが）爆発をすることも無く、酸素皆無の状態でも息苦しい様子を一つも見せなかった。

そして、

「俺の勝ちだ、生徒会長」

「……嘘でしょ」

大地を削る程の雷を受けても、ナインはその服を焦がす事も無かった。

愛葉のスキルで最高の威力を持つ雷をまともに受け、それでもナインは立っていた。

愛葉の持つありとあらゆる能力を全て無効化した、そう言える結末だった。

「飯、奢ってもらっぜ」

ナインはにっと笑みを浮かべた。

第一章 R P G ・ 4 (前書き)

今回は用語が多いです。

1 1 / 3 0、感想で指摘を受け、若干変えました。

2 / 5、一点変更。

第一章 R P G ・ 4

「意外と律儀だな。俺は何を奢れとは言わなかっただろ？ そこのジューズ一本でも良かったんだけど」

「そういう訳にはいかないわよ……。負けは負けだもの。安心してちゃんと私の奢りだから」

愛葉の意外に素直な一面を見ながら、ほっと安心したように溜息を吐くナイン。

夕方、彼らがいるのは普通の家族向けのレストランだ。先ほどの勝負の結果、愛葉がナインに食事を奢るために来た場所である。幸いかどうかは定かではないが、客は家族連れが多く、彼女達が浮く事はなかった。

価格は家族向けと言う事も有り、無難にワンコイン、もしくは一枚で頂ける料理ばかりだ。

しかし、このナインと言う少年に取って、ファーストフードと呼ばれる価格以上の料理は、実は食べた事が無かった。食べたいと思わなかったが。

そして、もしも奢りではなかった場合、臨時皿洗いのバイト君になってしまうような手持ちでもあった。

「ありがとう！」

「……………そんなにお金がなかったの？」

先ほど自分を殺そうとした相手に感謝するナイン。それを複雑そうに眺める愛葉。

ナインの前には、ハンバーグ定食。愛葉の前にはシーフードパス

タが並んでいる。

二つ合わせて税込み千円（内訳、ハンバーグ480円、シーフードパスタ520円）、それで殺人未遂事件は穏便に、平和的に解決を迎えていた。

「アンタ、本当に大丈夫なの？」

「……………実際はそんなに大丈夫ではない」

愛葉は、ナインの財布と先ほどの戦闘を気遣っており、ナインは、自分の先ほどのダメージを語っていた。

「そうなの？」

きつと財布の中身の話だろう、と愛葉思う。なんだかんだ言っただけで結局自分はこの少年に傷一つ付ける事は出来なかったのだから。

しかし、ナインは若干とがめるように愛葉を見て言った。

「あの攻撃が魔力で創られた雷だったら、ノーダメージだっただろうけどな。『魔法反射壁』で完璧に抑えられた。が、あれは天然物の雷撃……………っていう表現は変か。そんな事はどうでもいいが、アレは正直まずかった。アレを受けて死なない奴なんてほとんどいないと思う。だから、使う相手を選んだ方が良くと忠告させてもらうかな」

「……………へえ。そう、今度から気をつけるわ」

愛葉はさらりと言われたノーダメージ発言に若干むかつて来たが、しかし負けは負けだと諦める。そして、逆に自分がこの少年を追いつ込んだ事に驚いていた。

これまでの戦い、確かに少年はダメージを受けたと言い続けて来たが、それはどこか余裕のある台詞だった。しかし、今回ばかりは本当に危なかったらしく、茶化したような台詞が戦闘後には見られなかったからだ。

まあ、本気を出したのだから、それくらいの反応が無いと困る、というのが本音だったが。

「でも結局、アンタ無事なのよね」

「まあな」

ナインは忠告をほとんど聞いていない愛葉に若干危機感を覚えるが、それ以降は何も言わなかった。

時代は、勝つ事を求めている。

相手の生存に関わらず。

この世界に魔力が満ちている事の証明は、奇しくも戦争中だった。戦争、数年前でありながら今とはまるで違う世界、世界がまだ科学だけを発展させていた時代。

宇宙からの侵略者に地球の科学は乗っ取られた。科学兵器は齒が立たず、情報は筒抜け、地球人の滅亡が眼に見えた、その時だった。その人物達は、たった七人で侵略を止め、そして侵略者を滅ぼした。

放たれた銃弾は空中で止まり、天候は指を鳴らすだけで変わる。爆発は時空の彼方に消え去り、死者は傷を治され甦る。

いくらか誇張されているが、それはまぎれも無くその当時起きた事。

世界の法則を丸ごと変えてしまうような出来事。

それは奇跡としか形容できないような事件。

まさしく、魔法。

七人の一人、現日本首相、あきやまゆきのひ秋山雪日は言った。

『世界には魔力が満ちている』

そして現在、世界は魔力の存在を認め、それを用いた技術開発に当たっている。

魔力の証明から数年、まだ魔力については解らない事が多いのは事実だ。

だが、高々数年で世界がここまで変わったのも、事実だった。

「ところで、アンタ。魔法ってどういう事？ 私の聞き間違いならいいんだけど」

「……魔法は、魔法だ」

「ってことは、アンタ魔法使い！？ でも、ランクがあるし、スキルを持つてるのよね？」

「そう。だから、魔法使いとは違う」

魔力の存在が世界的に認められ、侵略者には扱えない特殊なエネルギーとして開発が進む中、その問題は生まれた。

特殊な体質、血統を持つ者でしか魔力は扱えないという問題。

生まれながらにして魔力を扱える者……彼らを、魔法使いと呼ぶ。ただの一般人が念じては、指先に火が灯る事も、空を飛ぶ事も出来ない。

だからと言って、魔力を扱える人間だけを兵士として育成するのは、人種差別、ひいては魔法使いの独裁する世界となってしまう。なんとかして、魔力を誰でも扱える物にしなければならなくなつた。

そこで生まれたのが、『スキル』だつた。

特殊な機器を用いて、魔力をエネルギーとして変換できるように脳にプログラミングを行い、魔力変換機とする。内容、『スキル』は、人によって違う。脳の処理能力が人によって違うからだ。

例えば、魔力を炎に変換するスキル保持者は比較的多い。便利であるし処理が簡単で、ほぼ万人に使えるものだ。

例えば、空気を自在に操る『空全絶護』。この能力者は現在、朝井愛葉ただ一人である。それは彼女自身が生み出したスキルであり、脳のスペック的に彼女しか使えないためだ。

脳、そのメカニズムは未だに解明されてはいない。そのため、当初はそれを非人道的だと非難する科学者もいたが、今では全人類が受けていると言っても過言ではない。したがって、脳の性能の良さイコール強さとも言える世界である。

例外は、魔法使いだろう。彼らは『スキル』無しで、魔力を扱う事が出来る。

この技術により、魔法使いと同様に誰でも魔力を使えるようになった。

全人類が魔力を操れるようになることで、魔法使いの目立った差別は生まれなかった。

「それなら、アンタは一体何者なの？ 攻撃した私が言うのもなんだけど、普通のスキル保持者じゃあの攻撃を捌けないと思うんだけど……」

それなら使うなよ、などと小さく呟きながら、ナインは水を飲む。

『RPG』

それがナインのスキル。

ありとあらゆる攻撃、森羅万象に対して干渉する万能の緩衝剤、HPを生み出すスキル。

自分が受けた攻撃を数値化し、それに応じてHPは消費される。そのかわり、自分に対する攻撃は完全に無効化するスキルだ。

ちなみに、その消費されたHPは食事、睡眠で回復される。食事、1kcalにつき、HPが1回復、睡眠で全回復するというようにプログラミングされている。

ナインは自分が受けたダメージは、奢らせて回復するという算段だったのだ。しかし。

(……本当にあの攻撃はまずかった。今日は大体1500くらいHPがあつたのに、あの攻撃で一桁にされた。……正直、ここに来るまで攻撃されなくて助かった)

HPはカロリーとも置き換えられるが、だからと言って体を動かすために使うエネルギーをHPで使っている訳ではない。カロリーは変数でしかない。

今回のハンバーグでの回復は、およそ800。ちなみに、彼がいとも飲んでいるコーヒーは、200程度回復してくれる。

ちなみに、HPが0になったからと言って、彼は死なない。

あくまで緩衝剤、彼の生命力とは一切関係ない。

戦闘以外で使っていると、小石がぶつかった程度でもHPを消費するので、『RPG』は戦闘時のみ発動させている。

「そう言えば、負けてもランクが変わらないって言ったけど、それどういう意味なの？」

「……質問ばかりだな」

「当たり前でしょ？ アンタは私の事をなんか色々知ってたけど、私はアンタのこと何も知らないんだから。不公平じゃない？」

「……………」

愛葉の台詞の裏には、次は倒す、という決意のような照れ隠しの
ような感情をサインは視た。

『ステータスアイ
算出眼』

スキルとは別に、生まれ持った特性と言すべき能力。

ネーム・特性・スキル・ステータスを視る事が出来る特殊な眼。

これにより、相手の弱点を突く事が可能になるが、『RPG』発
動中にはネームしか視えないため、戦闘中にはあまり役に立たない。
『算出眼』保持者は他にもいるようで、それぞれ視える物は違う
らしい。

「それじゃ、ごちそうさま」

「ん。どういたしまして」

食べ終え、食事中に大方話していたので、二人は外に出た。

「アンタ、私に勝てる程の腕前ならさっさと学校通うなり、仕事に
就きなさいよね？」

「……………なんだ。心配してくれてんのか？」

「ちっ、違うわよ！ アンタがNEETのままだったら、それに負けた私の立場が無いじゃない！」

「あっそ。ま、お気遣いどうも」

しれつと返事をしたナインだったが、その背後をジト目で睨む愛葉には気付いていた。

（そういえばなんだかんだ言っつて、最初に喧嘩になったのも、俺を心配してくれていたからか？ ……生徒会長を務めるだけあって、ある程度の人格者だな）

ある程度の人格者が、プライドのために自分を殺すような攻撃をするものだろうか？ という疑問をナインは抱かないようだ。

「それじゃ、ごちそうさまでした」

「ん。次は負けないからね？」

「え？ 次なんてあるのか？」

「え？ 当たり前でしょ？」

「……嫌だ。血祭りで曝し首とか、嫌すぎる」

と、引きつった笑みでコチラを見るナインに気がついたのか、しれつとした顔で愛葉は笑った。

「何言ってんのよ。あんなの冗談に決まってるでしょ？ 私が勝ったら、アンタにはNEETを止めてもらっわよ」

さすがに少し不思議に思ったのか、ナインは愛葉に尋ねた。

「なんでそこまでして、俺のN E E T生活に口出しするんだよ」

「なんでってそりゃ、有能な人材は有効活用しないと駄目じゃない？ アンタ、もう少し自分の価値を見直した方が良いわよ？」

愛葉の人を物扱いする台詞にナインは溜息を吐く。

（コレくらいで苛つくなよ、俺。まあ、そんなこと言っても無理か。だから??）

「だから俺はN E E Tなんだけどな」

誰でも魔力を扱えるのなら、他人より劣ったスキルの持ち主は必要ない。

それがこの世界の現状だ。

「じゃあな、もうこりこりだ」

ナインは自分を睨む愛葉の視線から逃れるようにして背を向け、そして人差し指を折り曲げた。

瞬間、ナインの姿は愛葉の前から消えた。

「……結局、何者よ、アイツ」

愛葉は大きな溜息を吐いた。

愛葉が黒みがかった空を見ながら、家へと向かった。

同時刻、ナインは洋館、さっさと眠りについていた。

『転移魔法』

マーキングした場所に瞬く間に移動する魔法。高速で空を駆けている。

ナインは、1024種類の魔法を操ることが出来る能力者だ。

『守備力強化魔法』、『吐息系軽減魔法』などの補助魔法が大半を占めているが、中には『雷撃魔法』やら『重力魔法』、『再生魔法』などもある。

魔法は、RPGの魔法使い同様、MPを消費する。というよりも、『RPG』のスキルがMPという制限をつけているのだ。

HPがあるから、MPがある。

HPという万能の緩衝剤を生み出すには、彼の脳ではスペックが足りなかった。そのため、本来ならば自在に扱えたはずの魔法に制限を掛けた。

MPはHP同様、飲食、睡眠で回復する。

HPは一時間ごとに500、MPも50回復する。ただし、寝ると最大値はHPが2000、MPは200に設定される。

寝ている途中にイベントが発生すると回復が中途半端だったり、回復していなかったりしてしまう設定だ。

『RPG』は言うまでもなく、ロールプレイングゲームをモデルに創られた、お遊びのスキル。

魔法の代名詞とも言える詠唱が無いのも、ゲームというショートカットキーと同じように、魔法を彼の指に連動させているからだ。

ブレイブ・オブ・イミテーション
<勇者の模造品>と呼ばれるだけの力を、ナインは有していた。

第一章 R P G ・ 4（後書き）

最後までちゃんと読んでくださった方、おつかれさまです。
次回からストーリー、ここまでがプロローグみたいな物です。

1 1 / 3 0 H Pを一時間で5 0 0、M Pを一時間で5 0 回復としました。

2 / 5 『瞬間移動魔法』 『転移魔法』に変更しました。

第二章 失敗作品・1

「本当に、やんのか？」

青年は顔に微かだが恐れを貼付け、少女に尋ねた。

黒い前髪が鬱陶しいほど伸びている、目つきの悪い青年だった。その青年に話しかけられた少女は、黒嶺学園の制服を着ており、恐らくその生徒だろう。

そうでなければ、コスプレ趣味となる。

「当たり前でしょ。今更怖じ気づいたの？ そんなんだから??」
「おっと、その台詞は禁止だ。俺達と共に行動する以上、その台詞は止めてもらうか」

少女の青年を見下した発言を、別にいた茶髪の青年が遮った。少女は露骨に嫌な顔をするが、言いかけた台詞を改めて言おうとはしなかった。

「何よ、本当の事じゃない」

「確かに本当の事だが、しかしその単語は人種差別に値する。せめて『反乱分子』とでも呼んでもらおうか。その方がまだましだ。協力関係にあるのを忘れてもらっては困る」

「……ちっ」

「それでは、今後の計画について話そう」

『イメージダウン
幻想卸し』と呼ばれる青年は、少女の態度に嫌な顔一つ見せず、その計画の全貌を明らかにした。

四月も終わる今日、ナインは久々に取り戻した日常を満喫していた。

「うん。やっぱりこうじゃ無いとな、俺の生活は」

彼がいるのは、いつもの公園のブランコ。時刻は四時過ぎ、愛葉が来るいつもの時刻は三時。

という訳で、女子高生に殺されそうになる、そんな日常は終わりを告げたようだった。

あの日の勝利以降、愛葉との戦闘行為は起こっていない。愛葉と顔を合わせる事があっても、物欲しそうに目を向けては何かを奢ってもらっているだけだ。

その度に、『捨て犬！』とか『ボロ雑巾！』、『餌付けされた家畜か！』などと罵詈雑言を浴びていたが、特に気にはしていなかった。そして愛葉も、優しさか哀れみなのか、ジュースなどを奢ってあげていた。

……やはりこの男にプライドは無いんだろう。ナインだけに。

「平和万歳！ この一杯のために俺は生きている！」

一人、缶コーヒード乾杯をしているナインは、もしかすると、とても痛い子かもしれない。仮にそうでなくても、傍目から見れば痛い子だった。

今日も今日とて、彼はNEETなのだ。

「しかし、本当にまずいな」

ナインはコーヒーを飲み終え、リングブルを回収。財布にそれを入れるため、財布の中身に目を落としながらそんな事を呟いた。空き缶を近くのゴミ箱に入れながら、彼はそれをこう締めくくった。

「このコーヒー」

「なら何故飲むの!？」

と、誰もが思った事だがきつと声に出しては言わないだろう事を、愛葉は叫んだ。

「ん？ いやね、決して嫌いという訳ではないんだ。たださ、苦い物はどちらかと言うと苦手なんだよ」

「いや、それなら別の物飲めば良いでしょ？」

「そうですね。この男は馬鹿じゃないでしょうか」

「いやいや、ちゃんと理由はあるさ。苦手な物も何度も食べてれば慣れるだろ？ 朝井との関係と同じだ」

「……何さらりと酷い事言ってるのよ」

「「ん?」「」

と。

なんだか自分を小馬鹿にしている第三者がいるのにナインが気付くのと。

その第三者が、この男が会長に対して暴言を吐いたと気付いたのは同時。

そして。

「会長を侮辱するとは何と無礼な！ 死ねっ！」

残念な事に、ナインが何かを言う前に、手（暴力）が出されていた。

手。魔力で象られた、巨大な腕。
人の体程の大きな手が。

ナインを真横からぶっ叩いた。……ビンタ、と形容しても良いだろう。

「いつ！！！？」

しかしナインは無傷（700ダメージを受けたが）、吹っ飛ばされる事も無く立っていた。

大ダメージ、しかし傍目から見れば無傷。

内心、本当に死ぬかもしれないとナインは思っていた。冷や汗が止まらない。動悸も止まらない。動機は解らなかった。

なんとか間に合ったレベルの防御だった。その証拠に、『RPG』発動後に『守備力強化魔法』が使えず、『RPG』発動が間に合わなかった場合にと、腕での防御もしていた。

「なっ！？」

「……………」

「な、ななななななななな！ いきなり何すんだよ！」

ナインに攻撃を防がれ呆然とする第三者。既に似たような経験があるがそれでも驚いている愛葉。平和な日常がものの数分で壊され困惑するナイン。

三者三様の反応、三人はお見合いよろしく立ち尽くす結果となった。

ネーム、倉崎^{くらやまき}リオ。ランク『A』。クラス・魔兵専門学校黒嶺学園副会長。特性・自動防御。
スキル『^{マジックアーム}腕打振』、魔力によって構成される巨大な腕を生み出す能力。

それがナインの『^{ステータスアイ}算出眼』で視れた第三者の詳細。

じつと見つめたのが悪かったのか、ステータスを視る事はできなかった。

代わりに非難の目を浴びる事になったのは、些細な事である。

人を観察するような目で見るな！ との事だったが、実際に観察紛いの事をしているので何とも言えない話だった。

「えっと、紹介するわね。こちらウチの学校の生徒で、私の後輩、副会長の??」

「……倉崎だ」

倉崎は黒嶺学園特有の黒色学ランのホックを留め、同色の学帽を深く被った、首筋まで伸びた黒髪と中性的な顔立ちの持ち主。

先ほど見つめていた所為か、かなり警戒したようにナインを睨んでいた。

いや、ナインが気付いていないだけで、最初から睨むような視線ではあったのだが。

「で、えつと……。」「ほん。ところでアンタの名前って、なんだっけ？」

「あゝ、そう言えば教えてなかったな」

「会長！ 名前も知らない奴だったんですか！？」

「そうね。でも、悪い奴じゃないと思うわ」

「……そりゃどうも。少なくとも、出会い頭に突然殺そうとはしないぞ。……どつかの学校の生徒会よろしく」

「貴様、死にたいのか？」

凄みを利かせサインを睨む倉崎に、愛葉は一言。

「大丈夫、気にしないでいいから。こいつの台詞には塵程も意味なんて無いから」

「わかりました会長。馬の耳に念仏、暖簾に腕押しですね」

倉崎はぱつと愛葉に笑顔を見せる。

そんな二人を見て、たった数回の会話で、サインは理解した事がある。

（俺はこいつらが苦手だ）

元々愛葉にしても苦手意識はあったものの、先ほどの缶コーヒースと同様慣れて来ていた。しかし、ここにきて事態は急展開を迎えている。

愛葉が連れて来た後輩、倉崎は明らかにサインに敵意をむき出しにしている。さらに愛葉は、後輩の前での面目を保つべく、粗忽な態度を取り始めている。

よく考えてみると、愛葉のその態度は、出会った直後以外だいたひそんな態度だったか。

「で、アンタの名前は？」

「はて、一体どうして俺はそれに答えなければならぬのだろう。」

俺と朝井は友達だっただろうか？ いや、違うだろう。言い表すなら犬猿の仲だろう」

「……思っている事がただ漏れただけ」

「明らかにわざとですね。会長、こんな奴放っておきましょう。関わるだけ人生の無駄です」

愛葉の制服の裾を引っ張り、さっさと行きましようかと急かす倉崎。対して愛葉は、どうにもそれでは駄目だと思っているようで、なかなか動こうとしない。

「なんか用でもあったのか？」

悪ふざけも行き過ぎれば憎悪の対称でしかない。そして、この展開は……。

ナインの働いていない現実とは別に、悪知恵は働いた。

「奢ってくれたら、それに見合った話はしよう」

一体NEETの俺に何の用だろう、などと考えているナインだが、特に気にしなかった。

とりあえず、弱みに付け込み晩飯を御呼ばれしようと企んでいた。

「現金な奴ね……。名前くらい教えてくれるんでしょうね？」

「料理次第かな」

「……現金な奴だな」

「いいのよ、リオ。言ってたでしょ、こういう奴だつて」

その台詞は、事前にこのようなやり取りになることを打ち合わせしていた、という台詞だった。

どうやら愛葉が最近戦闘行為をしなかったのは、この布石のよう

だ。

く々のご馳走（五百円程度の料理）に胸を高鳴らせているナインには気付けないようだ。

「……わかったわ。じゃあ、前に行ったファミレスで話をしましよ
う」

「会長！ こんな奴と会食したんですか！？ 危険です！」

「あら？ 今回はあなたが一緒だから、大丈夫でしょ？」

「はい！ お任せください！」

倉崎の異常な愛葉への忠誠心というか、憧れにも似た感情を垣間みて、若干暑苦しいと思うナイン。ほんの少しだけ二人との距離を取った。

倉崎の態度が、愛葉とナインで違いすぎだった。

ナインに暑苦しいと思われた二人は小声で話し合っており。

「ほら、簡単に買収できた」

「……腕はそこそこあっても、頭の方は駄目みたいですね」

まるでこの展開が全て筋書き通り、と言った風に二人は笑みを浮かべていたりした。

そして、先に行く二人の話を聞こえなかったふりをしながら、自分の名誉と命の危機に気付かないふりもして、それでもこの胸に溜まる鬱憤をどうにも出来なくなったナインは、暗さが増して来ている天を仰ぎ、心の中で叫んだ。

（やっぱり……苦手だあああ！）

今なら逃げ出せる、それでも逃げ出さない。

生命の危機と食欲の間で葛藤しているナイン。

(……奢りなんて正直断ると思っただけ、しゅしゅを装いながら承諾した所を見れば、あんまり穏やかな話じゃなさそうだな。普通の荒事なら朝井一人で片付けられるだろうし、あの性格ならそうするだろ。その実力もある。が、副会長まで一緒、それに俺に声をかける……ね)

「これはどうやら、名前を聞き出すための口実だけじゃないみたいだな。……はあ」

「なんか言った、フリーター」

「会長、こいつはホームレスでしょう?」

「……NEETだ」

威張れる事ではないがあえて訂正し、ナインは思った。

(いつか……、ここで勇者だと言える人間になりたい)

その台詞を言えるのは、本当の勇者だけだろう。愚か者という意味の、勇者だけだろう。

第二章 失敗作品・2

「……ほら、奢ってあげたんだから自己紹介くらいしなさいよ。しなきゃ支払いはアンタ持ち」

「え？ それ何？ 恐喝ですか。うわぁ……最低な野郎だ」

「殺すぞ……底辺」

「……えつとごめんなさい」

殺意の籠った凍えるような視線を受け、初っ端からやる気を削がれたナイン。

舞台はファミレス。テーブルには奮発したのか（といっても合計で5000円程度。黒嶺学園生徒会長にとっては端金）、高力ロリの料理がたくさん並んでいる。

十二種類の野菜のグラタン、魚介のミックスピザ、皮付きフライドポテト、醤油ラーメン、和風ハンバーグ定食、メンチカツセット、シーザースサラダ、水×3である。

料理のチョイスはほとんどがナイン。その選択は、明らかに先ほどの襲撃で受けたダメージを回復するという意味があるが、彼のスキルを知らない愛葉にしてみれば、ダイエットに響きそうなメニュー、という意見だった。

ちなみに、愛葉は和風ハンバーグ定食、倉崎は十二種類の野菜のグラタンを頼んだ。

「名前？ 好きなように呼んでくれていいけど」

「貴様、巫山戯ているのか？ ゴキブリとでも呼ぶぞ？」

「リオ、食事中よ。言葉は選びなさい。悪いのはこいつだけだ」

「すいません会長。……さつさと真面目に答えろ、社会の底辺」

巫山戯ていたつもりは全くなかったナインだが、事情を知らない二人には詰まらない冗談にしか聞こえなかったようだ。

「……俺の名前は無いんだよ。これで解っただろ？」

ナインは食事の手を言ったん止め、水を飲む。

こちらの方が冗談にしか聞こえないが、真実だった。

ナインという名は、昔とある組織にいた時付けられていたコードネーム。

それが本名であるはずは無いが、それ以外に彼は名前を持っていない。

組織から投げ出された今、その名前を名乗るのは適当でないとの判断だった。

が。

「そう。ナイン、ね。アンタ、ランクはそれに合わせて付けられたの？」

「変な名前だな。言っておくが、僕はお前を名前で呼ぶ気は一切無い」

勘違いはするし、その名前を呼ぶ気はないという、すばらしく無意味な結果が帰って来た。

「……もうどうでもいいや」

別にこの名前を嫌ってはいないし、実際に学校にはこの名前で通ったのだから別に問題ないか、とナインはスルー。

「で、まさか俺に名前を聞くだけが目的ではないんだろ？」

フライドポテトを食べながら、至極どうでも良さそうにナインは核心を突いた。否、興味なさそうな態度を装って尋ねた。

二人はしばし顔を見合わせ、

「あら、バレてた？」

「さすがにバレますよ、会長」

軽く肩を竦めてみせた。どうやら隠す気はあまりなかったらしい。そして言葉を続ける。

「で、そんな事を聞いちゃう辺り、話だけは聞いてくれるのね？」

「まあな。これだけ前金代わりの料理を食べさせてもらって逃げる

のは、さすがに俺の良心が許さないさ」

「……貴様、こうなると解っていて大量に注文したのか？」

「そりゃ違う。それはまた、別の理由がある」

「理由？ 空腹だからじゃないんだ」

HPとMP回復のためさ、と頭の中で答え言葉には出さなかった。で、話って何だよ。仕事に就けとか、ウチの学校に入れとかは止めろよな」

「……アンタ、どこまでNEETにこだわるの？ というか、なんでNEETなのか詳しく聞きたいかも」

「それは同感ですね。こんな奴でも、僕の『腕打振』を受けて無傷。腕はある様ですから」

話の矛先を変更させられているのに気付きつつ、それでも場の雰囲気では話を先に進めるには語らなければならぬだろうと悟るサイン。

しかし、本当は語りたくない話である。

「あゝ、えっと……笑うなよ？」

無言で頷く二人を見て、これで退路を確保などと思う。

まあ、それはフラグなのだけだ。

「……実は二年前、試験で不正行為を働かまして、その処置として停学処分になりました。その後は、たまに高額アルバイトをして生き延びてきた……という話??」

「最低」「屑が!」

笑われなかったが、暴言を吐かれた。

早速のフラグ回収、お疲れ様です。

「思った以上に屑ですね、この男。こんな男に協力を頼むのは間違っています!」

「解ってるさ、俺が悪いってことは! はいはい、俺が悪いんですよ! 真摯に非難を受けますよ」

「開き直るな！ この社会のゴミが！」

「……そこまで言わなくても」

「本当に最低限のルールも守れないのね。……………呆れた」

落胆を隠しきれない二人に対して、もう罵倒は聞き飽きているナインはさらっと話を戻す。

「で、そんな俺に一体何の用だったんだ？ 聞くだけ聞かせてもらおう」

とりあえず、用件だけでも聞いておこうと言うナイン。

ここまで来たら引き下がる気はない。

「……会長、僕はもうこれで失礼します。こんな奴と一緒にする事はないので」

そう言って倉崎は席を立ち、ファミレスから出て行った。

愛葉はそれを咎めることはなく逆に、気をつけてね、と声をかけていた。

「あれ？ あいつお前を守るためにいたんじゃないのか？ いいのかよ、屑の俺とお前を二人きりにしても」

今となっては痛くも痒くもない自虐ネタを使いながら、白々しい台詞を述べるナイン。

「問題ないわ。アンタが私を傷つける事なんて無理でしょ？」

若干、感づかれたかもしれないと冷や汗を垂らしている愛葉だが、気丈に振る舞い誤摩化す。

「そりゃそうだな」

だがナインは特に疑う素振りも見せず、納得したように肩を竦めた。

以前の勝負、ナインの勝利で結末を迎えてはいたが、ナインは愛葉に攻撃を喰らわせることは出来ていないのだ。

『空全絶護』は伊達じゃない。

「で、散々話をはぐらかしてくれたが、何の用だ？」

「……正直、アンタの碌でもない経歴を聞いて、逆に安心して話せ

るわね。アンタが、関わったばかりに死んだ、とか言っても気にならないもの」

「そりゃどうも」

散々な評価だが、そんなものはもう気にしていないナイン。

説教なら、試験での不正行為直後に散々受けているのだ。聞き飽きている。

愛葉は少し辺りを見渡して、傍目から見れば気に障る程ナインに近づき、小さく呟いた。

「……アンタ、人喰いジョーズって知ってる？」

「セカンド移動開始。ドーすんだ？」

ナイン達と同じファミレスにいた青年は、倉崎がファミレスを出た直後、怪しまれない程度の時間を空けてファミレスを出ていた。ちょうど用件を話し始めた愛葉は、それに気付く事は無かった。

『セカンドの行動を捕捉しておけ。襲撃のタイミングは自分で決める』

「りょーかい」

『一応忠告しておくが、奴はセカンド。お前の命とは代えられない。まずいと思ったら、すぐに逃げ出せ。死ぬ事は許さないからな』

「……りょーかい。アンタの方も氣ー付けんだな」

『解っている。俺達に守るべき過去は無いが、生きてみたい未来はあるのだからな』

青年は通信終了後、耳に入れるだけで相互通信が出来る最新型の

無線機を取り外した。

時刻は五時半過ぎ、空には微かに星が見える時間だ。

目の高さまである鬱陶しいくらいの高さの前髪。その狭間から微かに見える青年の目は、前を走っている倉崎に注がれていた。

彼は、数日前に愛葉を追いかけていた青年だった。

「さーて、謝肉祭の開幕だ」

第二章 失敗作品・3

人喰いジョーズは、数年前にも噂になった都市伝説だ。

数年前、それでも随分と昔に感じるのは、この数年の間に世界が大きく変わったためだろう。

科学を用いた技術が主流だった数年前、その噂は街を埋め尽くした。

『喰われた者には二度と出会えない。なぜなら人喰いジョーズはその荒々しい性格から、血も肉も涙も、全て喰らい尽くしてしまうのだから』

骨だけ残す殺人鬼。

行方不明者を三十人以上生み出した人喰いジョーズ。

その結末は、犯人逮捕……とはいかず、ちょうど侵略者戦争前にその活動が止まったこと。

人喰いジョーズは宇宙人でスパイだった、という噂が戦争直後はされていたが、今となっては遠い昔の話である。

「……人喰いジョーズ、ねえ。で、それがどうしたんだ？」

「それが復活した、という噂があるの知ってる？　そして、その噂と同時期に何人も行方不明者が出ているのも事実。都市伝説なんて言ってる場合じゃないのよね」

愛葉は神妙な顔でそれを言うと、近づけていた顔を離した。

若干、顔が赤くなっていたが、ナインは気付かなかったようだ。

「なるほど。その話からすると、お前の学校の生徒で犠牲者がいるのか。で、生徒会長のお前は、事の真相を突き止めたいと」

そうなんだよね、と頷く愛葉を見て、しかしナインは首を傾げた。

「んで、なんで俺にそれを話すんだ？」

愛葉は遠慮する事無く（ナインを碌でもない奴だと解っているの
で）言った。

「アンタが人喰いジョーズじゃないの？」

ナインの動きが止まった。

「……………は？ いや、無い無い。あり得ない」

ナインは冷や汗一つ流さず首を振る。

「いくら食い扶持に困ったとしても、人を食うような真似はしない
ぞ。俺を馬鹿にしてるのか？」

「馬鹿。その人喰いジョーズだって、本当に人を喰ってる訳無いで
しょ？ 殺してる、って意味よ。で、やっぱり違うか」

「……………穏やかじゃないな」

粗方食事を終えているとはいえ、食事中にする話じゃない事は確
かだろう。

「アンタ、日中から街中うろついてんでしょ？ なんか手がかりに
なりそうな話とか無いの？」

「無いな。普通そういう奴は夜中に行動してるんじゃないか？ ……

…けど、それは人喰いジョーズの噂を使った、何らかの陰謀だとは
思うな」

「……………どういうことよ」

話の内容が内容だけに、二人の声は小さくなる。従って、二人の
距離も近くなる。

「今噂になっている人喰いジョーズと、昔噂になった人喰いジョー
ズは別物だと俺は思う」

「……………理由は？」

ナインは少し辺りを見回して、誰かが聞き耳を立てていないか伺
う。

店内は賑やかで、盗み聞きされる心配はないとナインは判断し、

少し迷ってから小声で愛葉に教えた。

「……………前の人喰いジョーズは死んだからだ。その人喰いジョーズは、本当に人を喰えたらしいがな」

真面目な顔でナインが語っているため、本当だと悟りながら、愛葉は尋ねる。

「アンタがなんでそんなに昔の事に詳しいのかは置いておいてあげるわ。じゃあ、アンタは今の行方不明者は一体どういう事だと思うの？」

「それは解らないな。でも少なくとも、昔との関連性はないと思うぞ」

「……………あつそ」

少し考えて、愛葉は席を立ち上がった。ナインもそれに続くのだが、それに愛葉は怪訝そうな顔をした。

「……………何？」

「いや、心配だから」

「っ！？」

急に赤面し、ナインに指を向ける愛葉。向けた指が震えている。

「ちよつ、な、何いきなりそんなこと言ってるのよ！」

怪訝そうに首を傾げるナイン。

「いや、俺はお金持っていないからさ。もう話は済んだんだろ？ 食べ終えたし」

財布を振ってお金がない事を示すナイン。料理の方も綺麗に食べ終わっている。

「あつ……………」

瞬間、自分が何か勘違いしていた事に気付く愛葉。顔の赤みが引いて行く。

「ん？」

何が何だかさっぱり解らないという顔のナイン。

「……………何でも無い」

ぷいとそっぽを向き、会計を済ませる愛葉。まだ若干顔が赤かつ

た。

「何だよ、変な奴だな」

二人は気付かなかった事だが、このファミレスの気温が急激に上がった下がつたりしていたりする。それが都市伝説になってしまったりするのも、二人は知らない。

愛葉のスキル『空全絶護』は、空気に関する全てを操る。気温も、例外ではない。

同時刻。

魔兵専門学校黒嶺学園内部、図書館。

黒嶺学園は日本で最高の魔兵専門学校である。魔兵、魔力を扱う兵士、それを育成するのがこの黒嶺学園だ。設立から四年とまだ歴史は浅いが（といっても、魔力の証明から最も早くに設立された学校だが）、その分施設は新しい。

敷地面積、教員数、生徒数、設備、その全てが日本一、魔力研究の最先端の学校。

その内部にある図書館も、膨大な量の情報を抱え込んでいる。

魔導書こそ無いが、日本の学生の情報は全てそこに集められている。許可無く侵入しようものなら、それに使用した機器本体及び周辺電子機器全てを破壊するプロテクトが掛かっている。もはやそこまでいくとウイルスにも思えるが。

逆に、許可さえもらえばある程度の情報は手に入るということだ。

生徒会副会長、倉崎リオは、閲覧用のパソコンを前に震えていた。
「……そんな。アイツは??」

倉崎の前のディスプレイには、とある生徒の名前とその在籍する学校、その成績が映し出されていた。

スキルや個人情報に関しては、さすがに生徒会でも簡単に閲覧する事は出来ない。まして、気になったから、という理由では当たり前だ。

「ちょっと気になる奴がいてね、そいつの情報を調べてほしいんだけど」

倉崎が愛葉にそう言われたのは数日前の事だ。

情報閲覧の許可を取るのに数日が経ち、そう言えば名前を聞いていなかった、怪しいから自分も付いて行きます、それじゃあ名前を聞いたらすぐ調べてくれない、わかりました、という経緯で今日の事件に至っている。

愛葉から事前にどんな奴か聞いてはいたが、会ってみれば恐ろしい程おかしい男だった。

倉崎のスキル『腕打振^{マシクアム}』を真つ正面から受けても無傷、すごい腕があるのかと思えば、その経歴は酷いものだった。

経歴は酷かったが、その腕は確かであったが。

学校側が情報規制を敷いているのでニュースになっていないが、黒嶺学園の生徒ばかり狙った殺人（行方不明なだけでまだ殺人だとは決まっていないが、倉崎は既に行方不明者は生きていないと思っている）を起こす腕はある、というのが倉崎の評価だった。

黒嶺学園の生徒だからランクが高いという訳ではないのだが、実力に関しては日本トップクラスなのは公然の事実だ。

行方不明が次々とでている事から、大きな手傷を負う事も無く生徒を殺害、もしくは誘拐しているのだらう。

副会長の自分でさえ傷つける事ができなかったのだ。一般の生徒では手も脚も出ないだらう。

ナインに対し、倉崎はそう判断していた。

もし愛葉がナインに一度負けを認めたと倉崎に話していれば、倉

崎は決して愛葉を一人にはしなかっただろう。それくらい、警戒すべき相手だと倉崎は思っていた。どんな結果であってもおかしくない、と思っていた。

そう思っていたにも関わらず、倉崎は声に出さずにはいられなかった。

ディスプレイに表示されていたのは、ナインの情報だった。

登録に偽名を使うのは違法ではない。そのため、ナインという名前でも調べる事が出来るだろうと踏んでいた倉崎だったが、本当に登録名もナインだった。

倉崎はすぐにパソコンを終了させ、図書館から駆け出した。

夜の帳が下りた街が見える。時刻は六時半。

「早く会長に知らせないと……」

倉崎が学校から出て大通り、路地に入り、先ほどのファミレスへ近道をしようとした時だった。

倉崎の体が、突如壁に打ち付けられた。

「っ！？」

それはまるで、サイコキネシスで操られ壁に打ち付けられたような、見えない腕で攻撃を受けたような、不自然な動き。

倉崎はまともに壁に打ち付けられた。しかし、背後にクッションでもあったかのように、壁とは直接ぶつかっていない。それでも、地面に崩れ落ちた。

「はっ！　　おいおい、副会長つてのも意外と大したことねーんだなあ？」

と、突如目の前に青年が現れた。

まるでレポートで現れた、そう言わんばかりに、青年は突然、倉崎の前に現れた。

「んん？ 随分弱えな、こりゃ酷え。よく俺達を馬鹿にできたもんじゃねーかよ」

青年は地面に崩れ落ちた倉崎を蹴りつけた。

否、その蹴りはリオの軽く手を振り払う動作で弾かれた。

「！？」

青年が驚き距離を取るのと、倉崎が立ち上がるのは同時だったが、青年の顔には焦り。倉崎の顔には薄らと笑みが見えた。

「馬鹿にしないでほしいな。僕にたてついた事を後悔させてあげるよ」

「ふう……」

青年は焦りを落ち着かせるために息を吸う。

「まっ、こんなもんじゃ気絶しねーか。やっぱり生徒会は簡単にはいかねえか」

「……まさか、お前が人喰いジョーズなのか？」

「人喰いジョーズ？ なんだよ、そんな噂になつてんのか？ そりゃなんてーか、皮肉な話じゃねーか。噂なんて形が変わるもんだけどよー、よりにもよってそーなるか」

青年の瞳に狂気を垣間見た倉崎は、体が震えるのが解った。

これ以上雰囲気飲まれてはならない？、そう判断した倉崎はスキル『腕打振』を発動する。

倉崎をすっぱりと隠せる程の大きさの手が、そこに魔力で具現化される。目を凝らせば薄らと見える、そんなレベルである。

倉崎の背後から生えているように見えるそれは、巨大な魔力で創られた右手である。

「はっ」

倉崎の腕の動きに連動して、魔力で創られた手が動く。倉崎が軽

く手を振っただけで、土煙が青年を襲った。

「……んだよ。反則じゃねーのか、コレ」

そう言いながら、逃げる素振りは全く見せず、土煙を避け青年はさらに倉崎と距離を空ける。

「手間が省けて良かった。どうやら、ここ最近ウチの生徒が行方不明になっているのは、お前が原因のようだな」

「んだよ、今頃気付いたのか？」

「では、お前を捕まえて洗いざらい吐いてもらおう」

「……これだから強者の台詞って奴は嫌いなんだ」

青年は詰まらない物でも見るかのように倉崎を見て、大きく長い溜息を吐いて。

消えた。

（テレポートか？ 超能力者、みたいなスキルを持っていたな）

青年が消えたが警戒態勢を怠らず、倉崎は周囲を見回す。

数秒後だった。

「はっ！」

青年は倉崎の真横に現れた。現れた瞬間には既に拳は振り上げられており、拳は倉崎の脇腹を狙って打ち込まれた。

受け止める事も避ける事もできないタイミングだった。

だが、

「……ちっ、やっぱり届かねえか」

青年は目の前で自身の拳が魔力の右手で受け止められているのを見て、当然の結果と思ったようだ。

「愚か者め」

倉崎が右手を払い、魔力の右手によって青年は吹っ飛ばされる。地べたに叩き付けられた青年だったが、すぐに立ち上がった。

「自動防御、か。反応出来てなくても、反射で防御されんのか。さすがは天下の黒嶺学園、ってか？」

最初の奇襲こそ成功したが、それ以降の攻撃はまるで成功しないと言っのに、青年は笑みを浮かべた。それは決して自虐の笑みではない。

「……お前、何が目的だ？」
くくくと青年は笑い、そして言った。

「知ってるか？ 天才の脳みそを喰えば、天才になれるって噂」

そう言っつと、青年は再び消えた。

不意に、突然、瞬間移動テレポートでもしたかのように。

「っ！ まずい！」
倉崎の表情が強張り、愛葉のいるはずであるファミレスの方を向き、そして。

「しっつもーん。黒嶺学園に通う生徒の何人が天才でしょう？」

倉崎の目の前に青年がいた。そして、腹部に拳銃を押し当ててている。

その質問に答えようとするかのように、元気に銃が吠えた。

「てめーも天才だろ？ 副会長さんよ」

倉崎は倒れた。

第二章 失敗作品・3（後書き）

遅くなりましたが、感想ありがとうございます。
楽しんでいただければ幸いです。

第二章 失敗作品・4

時計の針は七時を指していた。

「こっちは上手くいったぞ。後は、本命だけだ」

青年は倉崎をアジトの奥に閉じ込め、今は外で『イメージダウン幻想卸し』と呼ばれる仲間と連絡を取っていた。

『よくやった。』インビシブル『不可視力』、怪我は無いか？』

青年、『不可視力』は笑みを浮かべる。

「正直、ラッキーパンチだったぜ。あいつが冷静になってれば、俺は今頃ミンチだな」

『黒嶺学園副会長、倉崎リオ。奴はその精神面からランク『A』判定を受けているようなものらしいからな。スキルとしては『S』だろう。だから、精神を揺さぶれば勝機は見えると踏んだ』

「まあ、済んだ事はどうでもいい。んで、アンタはちゃんとやれんのか？」

一度言葉を切り、青年は重みを持たせて言う。

「『空全絶護』、朝井愛葉を倒すなんて」

「当たり前だ。俺を誰だと思っている？」

無線機越しでも解る、自信を持った声で『幻想卸し』は『不可視力』へと言葉を送った。

「朝井のスキルは恐ろしい。だが、恐ろしいのは朝井のスキルだけだ。朝井自身ではない」

『そーかよ。んじゃ、俺もすぐそっちに行くわ』
「待っているぞ」

通信の切れる音を聞き、『幻想卸し』は無線機を外した。

彼の前にはスクリーンがあり、そこには二人の人影が映っている。その映像を撮っているのは、黒嶺学園の制服を着た一人の少女。そして、写っているのも黒嶺学園の制服を着た少女、それと黒髪の少年。

「ファーストには犠牲に、本命には礎になってもらおう」

「うーん、結局大したことわからなかったわね」

愛葉は背伸びをし、長い金髪が夜の闇に舞った。

「どうもすいませんね。俺は生憎誰にも求められない人間でしてね」
皮肉気に言ったナインは首の後ろで手を組んでいる。

時刻は七時。すっかり夜となった街は、街灯のイルミネーションで綺麗に彩られている。

「……………」

「……………」

そんな中、二人は無言で歩いていた。愛葉がナインの少し前を歩いていると言うか、ナインがそれに付いて歩いているというか。

「……………あー、えっと、ちょっと聞いて良い？」

沈黙に耐え兼ねたのか、愛葉は振り返り、ナインを指す。

「ん？ 別にいいけど？」

特にこの状態に居心地の悪さを感じなかったナインは、どうでもよさそうに返事をした。

一人真面目になっている自分がなんだか恥ずかしくなってしまう

愛葉。

「……………えっと、なんでアンタは私に付いて来るの？ いつもはこの時間帯になったら瞬間移動かなんかで消えてるでしょ？ なんで今

日はいるの？」

「あれ？ 本当に言いたい事とか無いのか？ それなら俺、帰るけど」

てつきりまだ何かあると思ってたけど、とナインは言う。

「うっ……、何にも無いわよ！」

何ともコメントしにくい呻き声を上げた愛葉は、最後は怒鳴るように言った。

「本当か？ そりゃありがたい。ちょっと用事を思い出したからさ、俺はこれで帰らせてもらうわ。ごちそうさん！」

そう言つと、ナインはくるりと踵を返して走り出した。

「えっ！ ちょっ？？」

用事はないと言つのに、愛葉はどうしてかナインを呼び止めようとしてしまった。いや、本当は言うべき事があったのだ。

愛葉の声に合わせるように、走り出していたナインが止まった。

「???あ」

しかし、落ちていた木の棒を拾うとナインは再び走り出してしまった。

結局、愛葉は何も言えなかった。

愛葉とナインがいたファミレスから少し離れた木陰に、その少女はいた。

「ファーストと本命、別行動を始めたけどどうするのよ？」

黒嶺学園の制服を着た少女、『写撮許可』^{プロジェクター}は無線機越しに『幻想卸し』^{イメー}に尋ねる。

『本命の方を追え。ファーストの方は別に構わん』

「了解、ってあの女追うの疲れるんだけど」

『準備が整い次第、こちらから接触を仕掛ける。それまでの辛抱だ』
「はいはい、解りました」

『写撮許可』はにんまりと笑みを浮かべ、風に流すように言葉を呟いた。

「謝肉祭はもう始まっているのよ、朝井愛葉」

時刻は八時。

ナインがいるのは、もはや廃屋と言っても差し支えないような建物だ。二階建ての一般家屋だが、壁は黒く煤けており、扉は開けようとすれば軋む。

ナインは当然のように土足で入り込み、そして奥へと進む。

「なんだ、君か」

家の一番奥にあるドアを開けると、そこには大きな部屋が広がっており、いつものように一人の男が椅子に座っていた。

その部屋は膨大な数のパソコンで埋め尽くされている。

機種、サイズ、スペック、必ずどこかが違う様々なパソコンを起動させ、そのディスプレイだけで照らされたこの部屋は、さながら潜水艦の中のようなだった。

「俺以外にも客人なんて来るのか？」

ナインは驚く事もせず、その男に話しかける。

男は黒くボロボロになった年代物のローブに身を包み、ファンシィな髑髏の面を顔の横に付けていた。病的なまでに白い肌、濃いグレーの髪が特徴的だ。一見すれば女の子にも見えなくもない顔立ちだが、本人はそれを酷く嫌っている。

しかし相変わらず趣味が悪い、とナインは思った。

「人喰いジョーズの亡霊さん」

同時刻。

愛葉は夜の街を歩き回っていた。

「……リオ、遅いわね」

ナインの情報を調べに行かせた倉崎を気にしながら、愛葉は人気の無い場所を選んで歩いていた。誘拐か殺人が行なわれるならば、人気の無い路地だろうという思考が働いたためだ。

何度かチャライ男達に声を掛けられたが、愛葉が『空全絶護』だと知ると男達はさっさと逃げ出した。命を危険に曝してまで獲たいと言う程の魅力が無いのかもしれないし、相手が単に賢いだけかもしれないかった。

しかし、それでも花の乙女、少々傷ついていたりする。

（私ってそんなに魅力が無いのかしら？ 暴力的、って言われたことはあるけど？？ いかんいかん、今は行方不明になった生徒の捜索兼犯人逮捕に集中すべきだ）

緩みかけていた気を張り直し、今日こそ犯人を逮捕しようと意気込んだ愛葉だったが。

「会長！ 朝井会長！」

不意に背後から呼び止められ、愛葉は気構えて振り返った。

「た、大変です！ 副会長が！」

そこにいたのは、同じ黒嶺学園の女生徒だった。

白河しらかわという二年の生徒に連れられて来たのは、カラオケだった。

白河は数日前から行方不明になっていた生徒の一人だった。彼女が言うには、数日前、突然一人の男に襲われて気絶し、どこかに監禁されていたという。

倉崎も同様に襲われたらしく、監禁されたらしい。

そして、自分を助け出してくれた人が、自分ではこれ以上助ける事が無理なので、相談したいと言う。

その話し合いの場がこのカラオケだといった。

ここなら学生がどれほど集まろうが怪しまれにくい、との話だった。

「ああ、君が朝井会長か。初めまして、俺は霧道鏡介^{むつぎょうすけ}という」

霧道と名乗った男は、ナインと同年くらいの好青年だった。

「さっそくだけど、彼女も君の学校の生徒だよな？」

そう言つて霧道が扉の外にいた少女を招き入れた。

^{かすが}「春日さん！？」

春日と呼ばれた少女は、全身に小さなかすり傷を負ってはいたが大きな怪我は無く、はい、と力強く答えた。

しかし、彼女は行方不明になっていないはずであった。

「彼女はちょうど俺がそのアジトの近くを歩いている時連行されていたんだ。で、俺が助けて、中に突入して近くに捕われていたこの子を助けたのは良かったんだが……」

次第に声が小さくなる霧道。その後を白河が引き継いだ。

「どうやらこの行方不明事件、複数犯、もしくは組織が動いてるみたいなんです。まだ何人が捕まっているみたいなので、そいつらが動く前に助けられませんか？」

「……大体理解したわ」

愛葉は頷き、霧道に向かって頭を下げる。

「我が校の生徒を助けていただき、本当にありがとうございます」

「いやいや、……俺が不用意に突っ込んだりしなければ、ちゃんと

全員助け出せた。すまない」

霧道は申し訳ないと頭を下げる。

「いえ、あなたのおかげで犯人達のアジトは突き止めているも同然でしょう。今からでもまだ間に合うと思います」

と、二人の会話に春日が割り込んだ。

「あの……会長。私のスキル『プロジェクター写撮許可』で犯人が記録されているので、……見てください」

「本当？ 助かるわ。ありがとうね」

いえ、その……、と春日は俯く。言いにくそうに春日は付け足した。

「ただ、その、酷い暴力だったので……」

「あつ、ごめんなさい。無理はしなくていいから、ね？」

はい……と気弱に春日は呟いた。

『写撮許可』

それは自分の見た物を他の物に投影する能力。黒嶺学園では珍しい（というのも、戦闘向けのスキルとその能力の開発が盛んなため）、非戦闘員用スキルの一つだ。

春日は部屋の壁に、その映像を投影した。

一人の男が、倉崎を殴りつけていた。

地下室のような場所で、その暴行は働かれていた。

倉崎は両手を天井から伸びた鎖で繋がれていた。

また腹部に血が滲んでいる事から見て、『マジックアーム腕打振』は発動出来ていないのだろう。

基本的にどんなスキルを発動するにも、脳を酷使する必要がある。意識の朦朧とした中ではスキルを使う事は出来ないという事だ。

目の焦点が合っておらず、口から血が滴り落ちている。

男が蹴って、倉崎が身を仰け反らせて、男が殴りつけて、倉崎は呻いて。

今にも呻き声が聞こえてきそうな映像だった。幸いと言うか、『写撮許可』は音声を再現出来ない。しかし、その暴力映像は、目を背けたくなるような物だった。

魔力による攻撃を軽減する黒嶺学園の制服は、度重なる暴力であちこちが擦り切れてはいるが、大きな欠損は見えない。

しかし、顔面に刻まれた青黒い内出血から、その服の下が見えないだけで酷い事になっているのは理解出来た。

見えない分だけ、躊躇無く攻撃を加えられているようにも見えた。一方的に片方が傷つけられる。抵抗する事は出来ない。自分を守ることも出来ない。

映像は、男が倉崎の腹を強く蹴りつけ、倉崎の体が鎖を張ったところで、倉崎が気絶した時点で途切れた。

映像が途切れたとき、しっかりとそれを目を向けていたのは愛葉一人だった。その愛葉も、体が震えていた。

霧道は愛葉の横顔を見ていたし、春日はスキル発動の集中をするために目を閉じていた。白河はその映像から目を背けていた。

「……………どうする？」

霧道は愛葉に尋ねた。

「警察に連絡、は出来ないんだっただか？ 黒嶺学園が情報操作しているからな。そんな事をすれば、君は退学では済まないだろう」

「……………」

面目を何よりも重んじている黒嶺学園。それははっきり言って異常なレベルだった。

しばし沈黙が流れ、そして愛葉は言った。

その声は、酷く冷静だった。

「霧道さん。…………このアジトの場所を教えてくださいませんか？」

「良いが、もしかして一人で行くつもりか？ 危険だ…………とは言わないが、大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です。これは、私一人で決着をつけたいんです」

霧道はしばし愛葉の顔を見つめていたが、了解だと頷いた。

「白河さん。ちょっといい？」

「……なんでしょうか、会長」

不意に白河に話しかけた愛葉は、白河を部屋の外へ連れ出し、こう聞いた。

「あの映像の男、本当にあなたを襲った男だった？」

白河はビクツと体を震えさせ、恐る恐る答えた。

「……そうです。間違えようも無いです」

「………。そっか。変なこと聞いて御免ね」

そして二人は再び部屋に戻った。

その後、白河は気分が優れないと言い、この事件の口止めを約束してから自宅へと帰った。春日と霧道はアジト突入で疲れたのでしばらく休んでから帰ると言った。勿論、口止めを了承した。

そして愛葉は、一人霧道に教えられたアジトへと向かっていた。

映像で倉崎に暴行をしていた男に復讐するために。

映像で倉崎に暴行をしていた男、ナインに復讐するために。

「あの女、簡単に騙されたね」

春日は小さく笑みを受けべていた。

「簡単ではないさ。一人は真実を語っていたのだからな。俺達だけでこの話をすれば信じられなかったかもしれないが、本当の被害者がいたのでは話は違う」

霧道は無表情でそれに答えた。

「おまけに証言は本当の事を言ってるからね。私達の事は少し疑ってみたいけど、あの白河って子は信じてみたいだし」

無言で頷き、霧道は言った。

「暴行を行なったのをファーストだと誤解させる。

イメージダウン
『幻想卸し』の名は轟かない。故に意味がある」

「あの子には『不可視力』インビジブルがやってるように見えて、本命にはファーストがやってるように見える」

「犯人が自分の知り合いであるなら、それを知られないように尋ねるだろう。間違ってアイツなどと馴れ馴れしく呼べば、自分の信頼性も疑われるだろうからな」

「結果として、違いに気付かなかった。……でも、もしバレた場合はどうするつもりだったの？」

「それはそれとして策はある。出来れば披露する機会を訪れない事を願うがな」

霧道は立ち上がり、カラオケを出す。

「準備はいいか？」

カラオケの外で待っていた『不可視力』に声をかける。

「ああー。アンタこそ、本当に大丈夫か？ 『幻想卸し』」

無論だ、そう言って霧道、『幻想卸し』は決戦の地へと向かった。

ナインは単刀直入に話を切り出した。

「ジョーズ。いま巷では、人喰いジョーズの噂がされてるんだが、知ってたか？」

「勿論。俺を殺した奴も焦って情報収集していたよ。復活なんてあ

り得ない、だが奴ならしかねない??そんな台詞が聞こえそうだった」

亡霊のジョークに、笑えば良いのかどうなのか解らないナインはスルーする事にした。

「で、当然どういう事なのか知ってるだろ?」

「勿論。俺の過去以上に血生臭い話だが、聞くか?」

そりゃ遠慮するとナインは断り、ジョーズは当然だろうな、とパソコンの一つを操作した。

「それなら真相は教えない事にしよう。求めている情報はコレだろう?」

そう言つて、パソコンのディスプレイに表示されている情報を印刷し、ナインに手渡す。

「今回は俺の目的とは関係ないんでな、悪いが行動けない。俺もしかるべき時まで、ひっそりと根を伸ばしていたんだ」

「この地図だけで十分だ。感謝する、ジョーズ」

「そんな感謝、要らないな。本当なら俺も一緒に行く話だからな。罵倒してくれて結構だ」

「じゃあ、たまには家の掃除くらいしろ」

「そうだな。そうするよ」

ナインの冗談半分の台詞を本気で気にしたのか、ジョーズは掃除機を探し出す。

呆れた顔でそれを見ながら、ナインはその廃屋から出た。

『人喰いジョーズは死んだ』

そう愛葉には伝えていたが、それはある意味本当のことで、別の意味では嘘。

しかしそれは彼女達には関係ない話である。

「……さて、どうすっかな」

地図には二つの場所が記されていた。

第二章 失敗作品・4（後書き）

しばらくシリアス回になりそうです。

第二章 失敗作品・5

時刻は九時。

霧道に教えてもらったアジトは、十年位前に潰れた工場跡だった。
不景気で潰れた訳ではなく、それほど荒れてはいない。ちなみに、
以前この工場で作られていたのは、人肉の缶詰だ。

愛葉が風を操り、工場を囲っていた柵を飛び越え工場内に入ると、
ソイツはすぐに出迎えた。

「意外と遅かったな、朝井」

ボロい服を着た黒髪の少年、ナインはそう言った。

その顔には、今まで見た事も無い歪な笑顔が張り付いていた。

「……アンタ」

「いや、俺が早すぎるだけか？ そつかそつか、お前には瞬間移動
なんて出来ないもんな。悪かったわ。社会の頂点さん」

「………アンタ、やけに饒舌じゃない？」

「そつか？ まあ、そつかもな。しょうがないだろ？ せつかく捕
まえておいた奴には逃げられるし、新たに捕まえた奴にも逃げられ
るしな。全部バレちまったんだから、しょうがないだろ？」

ナインは肩を竦めてみせる。

愛葉の周りで風が渦巻いていた。

「しつかし、黒嶺学園つてのも案外しょぼいよな？ まさか副会長
まで簡単に捕まえられるとは思わなかったよ。イレギュラーさえな
ければ、もう少し集められたな」

「……集める？」

怪訝そうに尋ねる愛葉に、ナインは上機嫌で答えた。

「そうだ。収集、って奴だ」

「……何が目的よ」

ナインは笑って答えた。

「何って、そりゃ喰うためだよ」

何のためらいも無く出たその台詞に、愛葉は顔が強張るのを隠せなかった。

「知ってるか？ 天才の脳みそを喰えば天才になれるって噂」

ナインは愛葉との間合いを計るように歩き出し、それでも喋る事を止めなかった。

「お前さ、なんで俺が強いかわかるか？」

ナインは笑っていた。

その笑みは、狂気としか言い表せない笑みだった。

「結構美味かったぞ、人間の脳みそは」

愛葉は自分の周りで風が唸りを上げているのに気付かない。

「喰えば喰う程強くなってる実感があった。んでさ、朝井」

ナインが愛葉を見た。

その目は、獰猛な捕食者の物だった。

「お前の脳みそはどんな味だ？」

舌なめずりするナイン。そして、その手を愛葉に伸ばした。

「っ！！」

瞬間、愛葉の体が見えない力で吹き飛ばされた。

それは偶然。

プロジェクター

『写撮許可』、春日が『不可視力』が見逃した愛葉を探していた

時だった。春日が街の中央にある広場付近を歩いていると、怒鳴り

声と唸る風の音が聞こえてきた。

聞き覚えのある声だったのでその様子を見てみると、案の定、會長が。そして、一人の少年が戦っていた。

戦いは一方的に會長が責め立てているようだったが、しかしその光景を春日は訝しんだ。

愛葉のスキル、『空全絶護』の前では何人たりとも満足に行動する事は出来ない??それはもはや常識だった。酸素濃度から気温、さらには気圧などを変えられては、十分な生命活動をする事だった。難しい。

それなのにその少年は平然と動き、そして攻撃を交わしていた。

「面白いな。どうやら、この少年には『空全絶護』が誇る特殊攻撃は効かないようだ。そして、それを理解している朝井も特殊攻撃は使っていないみたいだな」

その戦闘を見た『幻想卸し』はそう言い、計画を大きく変更させた。

『イメージダウン
幻想卸し』

自分が直接見ている相手に幻術を掛ける能力。その幻術は、相手の過去の記憶から引き出された映像と術者の思考から生まれる。相手に見せる幻術が、相手の記憶とリンクすればする程その幻術のクオリティーは増す。まるつきり術者の想像でも、ある程度は騙す事の出来るスキルだ。

幻想は、幻術は、イメージを下げる。

その幻術は、本当のイメージをダウンさせる。

故にその名は、イメージダウン。

『幻想卸し』が計画した作戦は大まかにはこうだった。

この少年の幻想を見せ、『空全絶護』の特殊攻撃を使わせない。

『不可視力』がこつそりと近づき、魔力を散弾として発射する実験段階の兵器、『魔砲』を至近距離から放ち、正体不明の攻撃を演ずる。

通常攻撃も元々避けている、もしくは受け止めている少年だから、幻想相手に攻撃して無意味でも、それがいつもみたいに少年には効いてないと勘違いする。

適度にいたぶった後??、最後の締めは以前の計画通りに。

『不可視力』

自分に触れている物体と自身を透明にする能力。日頃から使用に気をつけていれば、レポートやサイコネシスのように誤摩化す事もできる。

彼らにとって計画の成功は、自分の未来の可能性を得る事だった。この『不可視力』と『幻想卸し』は一部の人間に、失敗作品と呼ばれる人間だ。

『写撮許可』にしても、今のままでは自分の未来が暗い事が解っていた。

彼らのこの行動は、社会に捨てられた人間達に再び希望を与える事だった。

失敗作品

それはスキルに重大な欠陥を持った者達に付けられるあだ名。自分の脳のスペックにまるで合っていないスキルを得て、それを無理矢理使おうとした結果、重大な欠陥が生まれた者。

彼らは欲した。

自分達のスキルを失わずに、脳のスペックを上げる手段を。

世界が認めたのは、欠陥を持たないスキル。認められない彼らは、

認められたかった。

そして、彼らは人喰いになる事を選んだ。

天才の脳を喰えば天才になれる、それが本当かどうかわからない。だが、試しもせずに、なれないなど言えはしなかった。

例えなれなかったとしても、天才の脳を解析し、それに近づける事は可能だと思い、彼らは誘拐を始めた。

狂っていると言われようとも、失敗作品と呼ばれるよりはマシだと彼らは思った。

失敗作品にランクは無い。

能力者として約束される未来が、彼らには無い。

失う物は、何も無かった。

「けほっ！ げほっ！」

「おいおい、どうしたんだ朝井？ いつもより元気ないんじゃないか？」

ナインは笑みを浮かべながら愛葉を見ていた。

（??? おかしい！ いつものアイツとは比べ物にならないくらい強い！）

数分程、一方的に愛葉が撈られていた。

勿論、その攻撃は全て『空全絶護』の自動防御でガードしているが、それでも衝撃全てを殺す事は出来ていない。

それに愛葉は体力があまり無かった。元々あまり体力があるタイプではなかったのは、戦いを長期化させない『空全絶護』のスキルがそれを補ってくれていたからだ。

しかし、今回はそれが裏目に出た。

こちらの攻撃をどんなに放とうがまるで効かず、対してあちらの

攻撃は不規則かつ見えない。これほどまでに一方的に攻撃されるのは初めてだった。

（いつもなら、アイツは逃げ回ってるだけで碌に攻撃に転じてこないのに??）

「おいおい、まさか今までのお遊びを俺の本気だとか思ってたんじゃないだろうな？」

愛葉のその思考を読み取ったかのように、ナインは嘲笑う。

「まさか、そんなはず無いだろ？ 裏では人攫いしてたからな」
声も、姿も、まるで同じ奴なのに。

決定的にそれは違っていた。

だが、それを愛葉は認められなかった。

今までの全て演技で、これがこの男の本質なのではないのか??

『悪い奴じゃないと思うけど』

自分で言った言葉を、愛葉は信じられなかった。

いや、信じたかったが、信じられなかったのだ。

映像に映っていたのは確かにナインで、暴行を働いていたのもそうだという証言を得た。

だから、愛葉には信じられなかった。

自分の学校の生徒の証言と、自分の今までの記憶を天秤にかけた時、傾いたのは生徒の方だったのだ。

もしここで気付いていれば、この事件の結末はまるっきり違うものになっただろう。

だが、そうはならなかった。

「いい感じに疲れてきたみたいだから、お休みがてらちょっとくらムービーでも見せてやるよ」

そう言ってナインは指を鳴らした。

瞬間、工場になんらかの映像が映し出された。

「……これは、『写撮許可』？」

「その通り。あれ？ まさかお前、俺がみすみす逃がしたとか思ってたのか？ そりゃなんて言うか、残念な頭だな。ちゃんと回収してきた」

舌なめずりするナイン。呆然として動けない愛葉。

「んで、まあそんな事はどうでも良いんだ。ビクシヨ―はこつからだから」

その台詞に合わせたかのように、工場に映し出された映像が動き出した。

――――

そこは地下室のような場所だった。

まるで、人体実験でも行なわれていたような部屋だった。

そこには一人の人間がいた。

その人物は台の上に乗せられており、鎖が両手両足に繋がれていた。

まるで、これから行なう事に抵抗されないようにするために。

その人物の顔には恐怖が張り付き、今にも気絶しそうな表情を浮かべている。

まるで、これから人外の行為に身を差し出さねばならないと知っているかのように。

その人物の上に影が被さり、瞳にはその人影の正体が映った。

そして、その瞳に映った人影、ナインはニツといやらしい笑みを浮かべ。

その人物の頭に噛り付いた。

映像が全面、朱で染められた。

まるで夥しい量の血液を浴びたように。

少し離れ、噛み付かれた人間がビクビクと痙攣しているのが映った。

死を間近に控えた生き物にしか見えない。

音声があれば、耳を覆いたくなるような絶叫が聞こえてきそうな口の開き方。

しばらくして、その人物は動かなくなった。

生気を抜かれたように、腕も、脚も、肌も、全てから色と力が失われて行く。

その生命活動が停止したのは、一目流涎だった。

対照的に、床はなおも真っ赤に染まって行く。

そして、その首が切り取られた。

一際大きな赤い花が咲いた。

映像はそこで終わりを迎えた。

もしも愛葉に冷静な分析力が残っていれば、いくつものおかしい点に気付いただろう。

この映像が、過去に見た映画のワンシーンに非常に似ていた事。

映像が流れている間、ナインの姿がどこにも無かった事。

だが、追いつけるように次々と起こった事件、そして展開が、愛葉の正常な判断力を奪っていた。

もしも『幻想卸し』がこの映像を愛葉に見せなければ、この事件

の結末は変わっただろう。

だが、この映像は最初から作戦に仕組まれていたことで、ナインの存在があるうがなかるうが、愛葉に見せられた映像だった。

逆に言えば、この映像さえ真に迫る物であれば、この計画は成功だったのだ。

そのために何度も何度も参考となる映像を見て、脳内で再生した。全てが幻術でありながら、本当に見て来た事件のように出来るように。

もしも愛葉が『幻想卸し』の作戦を見抜けていれば、この事件の結末は変わっただろう。

だが、それはあまりにも望みすぎな話であった。

もしも『幻想卸し』が、ランク『S』の意味をしっかりと理解しておけば？。

この事件は起きなかったかもしれない。

喰われていたその人物の正体は、倉崎リオだった。

「おい！　しっかりしろ！　『不可視力』！！」

『幻想卸し』は叫んでいた。

場所は工場から数百メートルほど離れた、工場を囲っていた柵の外？？そこを『幻想卸し』は走っていた。

隣には顔面蒼白、歯をガチガチ言わせた『写撮許可』もいる。

そして、全身が血だらけになった『不可視力』が力なく、『幻想卸し』の肩に寄り掛かっていた。

それはまぎれも無く、敗走だった。

いや、それは得体の知らない絶対的な力からの逃走だろう。

「くそっ！ 巫山戯るな！！」

『幻想卸し』は叫ばずにいられなかった。

一瞬、だった。

最も近くにいた『不可視力』は一瞬で切り刻まれ、そして吹き飛ばされた。

そこにあるもの全てを壊さんばかりに、その力は振るわれた。

工場と呼ばれた建物は灼熱の風に溶かされ、冷涼の息吹で再び固められ、鋭利な風刃によって切り刻まれ、峻烈な轟風によって吹き飛ばされ、かつての形は失われ、鉄屑と化しその敷地内の隅へと押しやられている。

大地は削り取られ、灼熱と冷涼の風が渦巻き、石片と風刃が飛び交う。更地に変えられ、空気が死んだ。酸素は霧散し、気圧は定まらない。

ランクが危険度を指しているものだと知っていれば、こんな事にはならなかったかもしれない。

ランク『S』、それは災害レベルという意味。

「このっ……化物め！」

ランク『S』、『空全絶護』。

朝井愛葉が暴走した。

第二章 失敗作品・6（前書き）

2 / 5 一力所変更。

第二章 失敗作品・6

自分のしている事が正しいのか解らない。

彼が言う事ならば間違いは無いだろう、そう思っていた。

だが、本当にこれで良いのだろうか？

そう思う事は、魔兵としては失格な思考だ。兵士が個人の意志で動けば、勝てる戦いも勝てなくなってしまう。兵士であるならば、上官の命令を疑う事はいけないことだ。

だが、今回ばかりは、疑わずにいられない。

本当に、これで良いのだろうか？

草薙慎也くさなぎしんやの思考は、彼がいる建物の最下層にまで響く轟音で中断させられた。

都心から離れた場所にある、潰れた研究所。何十年も前に潰れたそこが彼らのアジトで、草薙がいるのはその最深部だった。

「何だ？」

草薙は自身のスキル、『壁格子』ハインドランスが正常に作動している事を確認した。

『壁格子』は、自分の設定した範囲を魔力の壁で覆う、結界もどきのスキル。その壁は結界と呼べる程耐久性が無いが、破壊されてもすぐに修復できるという物だった。

「……部屋の壁はどこも壊されていない。と言う事は、外で何かあったか」

草薙は現在、誘拐して来た生徒の監視を任されていた。

『壁格子』で生徒のいる部屋を覆っておき、破壊された場合はその部屋を仲間に教えるといった、看守のような役割を担っている。

現在、どの部屋の『壁格子』も正常に作動しており、どの部屋の

『壁格子』も壊されていない。

となると、何者かがこの研究所に襲撃して来た、というのが妥当だろう。

「……始まったな」

仲間が侵入者と接触し交戦が始まったのを、仲間の発砲音を聞いて草薙は悟った。

「……念のため、各部屋の『壁格子』を硬くしておくか」

目を閉じ、草薙は集中し、各部屋に展開している『壁格子』を二重にする。それでどれほど強度が上がるかと言えば微妙だが、何もせずに一人ぼうつとしているよりは良いと思った。

だがこのとき、草薙は何か嫌な予感を感じていた。

侵入者との戦闘が、嫌に長いと思いながら。

元有機生物化学研究所。

皮肉にも、その研究所、現在は人喰いジョーズなどと噂されている奴らのアジトは、人体実験を行っていた研究所だった。

それを知ってか知らずか、彼らはその場所をアジトに、天才の脳みそ集めをしているという。

実際にそんな事をしているのか、それとも裏で違う目的があるのか定かではないが、とにかくその場所に最近行方不明となった黒嶺学園の生徒は捕われていた。

「俺の名を彷彿とさせる事件を起こしたのは、何の因果かな。運がない……、いや、運が悪いな」

自らを人喰いジョーズの亡霊と呼ぶ男は、部屋を埋め尽くすパソコンの淡い光に照らされていた。

現在その大量のパソコンは、とある場所のカメラをハッキング、その映像を映している。

言うまでもなく、それは元有機生物化学研究所だ。

そして、一台のパソコンには一人の黒髪の少年が写っていた。

主な武器は木の棒。

主な防具は布の服。

それは、勇者の模造品と呼ばれる一人の少年。

「さあて、人喰いジョーズの偽物達。勇者の模造品を止められるかな？」

時刻は八時半。

「あんま遅くなって夜寝れなくなったら困るだろうから、さっさと終わらせようか」

ナインの眩きと同時に、元有機生物化学研究所は揺れた。それは、研究所のドアに張られていた結界が壊れる衝撃だった。

『強制開閉魔法』

どんな扉でも問答無用で開けられる、閉められる魔法。そう、例えば扉に結界や鍵がかかっていたとしても、だ。しかし、閉める用途が窺えない。昔からこの手の魔法は、開けるためだけに使われるし、なんちゃらの鍵にその地位を取られているのだが、そのなんちゃらの鍵を持っていないナインには便利であった。

ナインが研究所の中に入ると、結界が破壊された振動で気付いたのだろう、男達が銃を構えていた。

『磁力魔法』

特定の金属器を引き寄せる磁力に似ているためこう名称されているが、金属器でなくても引き寄せることができる、吸引魔法。ブラツクホールもどき。簡単にまとめて片付けたいあなたに。

当初、球体に引きつけられて宙に浮いていた銃器だったが、時間と共に落下。それでもまだ効果が残っているのか、銃器同士はくっついて離れない。それは、一つの鉄の塊と化していた。

「貴様……魔法使いか！」

男の一人が叫び、腰からサバイバルナイフを取り出し切り掛かった。

「違うな。俺はスキル持ちだ。魔法使いじゃない」

拾い上げた木の棒でサバイバルナイフを弾き、ナインは男の鳩尾へと突き立てる。男が埋めき声を上げ倒れた。

それに感化されたのか、残っていた二人のうち一人がナイフを抜き、一人が応援を呼びに奥へと向かった。

「応援呼びに行かれた所為で、敗北フラグが立つちまったな」

残った一人にナイフを振らせる事も無く気絶させ、ナインは奥へと向かった。

「どうなっているんだ？」

草薙は焦っていた。

いつまで経っても戦いの音が止まない。いや、断続的に続いていると言った方が適切だろう。

先ほどから銃声が鳴ったと思えば止まり、またしばらく経って鳴り響くということの繰り返しだ。

今このアジトには三十人程の仲間がいる。その中には戦闘用のスキルを持った奴らも何人もいるのだ。それにも関わらず、戦闘が止まる気配はなかった。

「……くっそ」

草薙は駆け出した。

ハインドランス

どうせ『壁格子』は自分が気絶するか死ぬまで発動しているのだ。どこに自分が居ようと関係ない。上で何が起きているのか調べに行っても、管理体制には問題ないのだ。

自分一人だけが残っても、なんの役に立たない。少しでも助けになればいい。

そう思い、草薙は上へと向かった。

何度か戦闘、そのたびに気絶させて、一階を全部見回り何も無いとナインは判断した。二階は廃れており、ナインは地下へと向かう。監禁するならば地下だろう、と言う偏見もあったが。

「撃て！」

非常階段で地下一階へ下り、防火扉を開けて脚を踏み出した瞬間、集中砲火を受けた。

「危なっ」

慌てて非常階段の方へと戻ると、銃撃音は去った。

作戦としては、待ち伏せして攻撃だとナインは思った。

「……『守備力強化魔法』と『加速魔法』は展開中。だがゴリ押ししてこの後HP切れなんて嫌な展開だな。MPは使い切っても良いから、スマートなやり方で行くか」

スマートなやり方って何だろう？ 駄目だ、俺ってNEETだから解らないや??、となんでもNEETの所為になっているナイン。

マッチポンプな思考である。

「ま、ゆっくりやるのは性に合わないな」

左手の小指を立て、それからナインは飛び出した。

銃撃は始まらない。男達の動作は非常に緩やかで、スローのような動きだった。

その間にナインは状況を確認。左側は行き止まりで、右には五人の男がいずれもサブマシンガンを持ち陣取っていた。どうやら『磁力魔法』展開も間に合わず蜂の巣に出来ると踏んでいたようだ。

まあ、HPなんて持っていない普通の魔法使いならばそうだろう。現に、先ほどの攻撃は少し被弾していた。

ナインは再び『磁力魔法』を発動し、自身は壁を蹴って五人の後ろに回り込む。

そこで男達の動きが戻ったが、銃器は『磁力魔法』によって奪い取られた後。

そちらの方へまとめて蹴り飛ばされた。

『磁力魔法』の球体ごと壁に打ち付けられ、五人は動かなくなつた。

『緩急魔法』で相手の動きを遅くし、『攻撃力強化魔法』を用いた蹴りでまとめて一掃。

スマートかどうかは無視して、本当に『磁力魔法』を使う必要はあったのかが疑問だった。

「安全第一、かな」

強化系統の魔法に関しては持続性があるが、他の魔法は時間的制約があるため、本来なら多用するべきではないのだが、今現在の彼のステータスはとても高いので問題ないとも言える。

HP3450、MP235。

HPは最大値という概念が無く、食べた分だけ増え、寝ればデフォルトの2000になるという設定。MPも同様で、寝ればデフォルトの200になる。

MPに関しては魔法を乱用しているためあまり多くないが、HPは非常に高くなっている。数刻前に奢ってもらったため、ここまで高ステータスなのである。

非常階段からは一本道で、左右に部屋がちらほらあったがどれも藻抜けの空だった。

「……さて、残存戦力はどのくらいかな？」

「このくらいだ！」

ナインの独り言とも思える言葉に律儀に答え、十人程度の武装した男達が前後に現れた。

どうやら二階から上にも何人が潜伏しており、非常階段から背後を取ったようだ。

「少しでも動いてみる。撃つぞ？」

そう言ったのは、草薙だった。自分のスキルでは戦闘に向かないと理解して、武装している。

「貴様、何が目的だ？ 只者じゃないようだが」

ナインはちらりと後ろの様子を見ようとしたが、威嚇射撃でそれを止めさせられた。

「……目的、ね。強いて言うなら、囚われのお姫様を助けに来た、とかか？」

「巫山戯ているのか？」

「いやいや、こつちとしては結構真面目なんだよ。なんせ??」

ナインはそこで言葉を切り、右手を上げた。

だが、実際に使う魔法は、左手中指一つだけを折り曲げた時に発動する魔法。

「撃て！」

ナインの動作に草薙達は発砲、しかしその銃弾がナインを動かす事は無い。

『RPG』が生み出すHPは、万物に干渉する緩衝剤。銃弾も例外ではない。

銃弾が保存していたエネルギーを完全に無くし、銃弾は床に転がり、そして。

全てを押しつぶすような圧力が、草薙達を襲った。

『重力魔法』

文字通り、重力を操る魔法。考え方によっては圧力魔法とも取れる。対象に立っている事すら儘ならぬ程の力をかける魔法。ゲーム内では補助キャラが好き好んで使ったりする。主人公クラスになるとあまり使わない印象がある魔法。

ナインを除いた全員は倒れ伏し、指一本動かす事が出来なくなっていた。

あまりの力に嗚咽を漏らし、息苦しさから気を失いそうな草薙は、それでも確かに聞いた。

「俺は勇者……その模造品だからな」

それは『不可視力^{インビジブル}』と呼ばれる男のアジト。そこに倉崎は監禁されていた。

倉崎の捕われている部屋には一切の光が入ってこなかった。鉄の扉がその部屋の唯一の出入り口で、今は鍵が掛けられ、固く

閉ざされている。

倉崎は衰弱していた。

『不可視力』との戦闘で打ち込まれた銃弾には薬が仕込まれていたのか、頭が朦朧としていた。

決して微量とは言えない血が傷口から溢れ、体力は酷く消費されていた。

元々体力はあまりない倉崎に、それは酷な状態だった。呼吸は荒く、目の焦点はおぼつかない。

掛けられた手錠が重く感じる程、倉崎は弱っていた。

スキルを使えなくする手錠、ではないのだが、今の倉崎にはこの手錠を外す体力も残っていない。ここに連れ込まれてから、『不可視力』によって暴力を受け、今まで気を失っていたのだ。

「……すいません……会長。僕は……」

倉崎が弱々しく何かを呟こうとしたその時、地響きが聞こえた。

衰弱しきった倉崎の意識でも確認できる、大きな魔力の動きがあった。

次いで、男達の罵声。扉越し、ここからそう遠くない場所で戦闘が起きているのが解った。

数秒程でその音は止まり、足音が倉崎のいる部屋へと近づいて来た。その足音は全ての部屋を開けているようだった。まるで何かを探してるような、誰かを探しているような足音。

そして、ピタリとこの部屋の前でそれは止まった。

数秒後、扉が無理矢理、とでも表現できそうな不自然な動きで開いた。

光が部屋を照らす。

数時間ぶりの光は眩しく、倉崎にはその足音の人物が誰だか解らなかった。

「……………朝井会長？」

助けを望んでいた、きっと心配してくれているだろう人物の名を、思わず声に出して呼んでしまった。

そして、その人物は答える。

「悪いな、会長じゃなくて。えっと、リオ、だったか？ 大丈夫か？」

相も変わらずボロい布の服を着た、黒髪の少年がそこにはいた。

ビクツと倉崎の体が震え、手錠と足枷が音を上げた。
刺すような視線がナインに注がれていた。

「……悪い、名前で呼ばれるの嫌いか？」

自分を睨む倉崎に対し、そんな事を言ってみるナイン。
そう言えば、最初に会った時にもこんな反応されたな。いや、アレは俺がじつと見てた所為か。

などともうでも良い事を考えていたが、弱々しい声でその思考は遮られた。

「ち、違う。あ、アレはそういう訳じゃないんだ。……いや、そうじゃなくて、お前、どうしてここに……」

警戒するようにナインを伺う倉崎。

「……ええと、弁解するのも面倒だし、何より時間がないので、自分の無罪は行動で示そうと思います」

ナインは手ぶらで倉崎の元に近寄り、そして手錠に指を当て、
『強制開閉魔法』を発動。

重々しい音を上げ、手錠が床へと転がった。

(……しかし、酷い)

倉崎の顔には殴られた時に出来たであろう痣、手には擦りむき傷、学ランには血が滲んでいる。恐らく、その学ランの下はもっと酷い

事になっているだろう。深く被っていた学帽も部屋の隅に転がっている。

「あ、……ありがとう」

手錠を外した段階でナインは感謝されてしまった。

「……どういたしまして」

と素直に言いたいところだが、しかしこの状況、ここで感謝されるべき事は何も無い。まだ何も終わってはいないのだから。

本当ならここで帰ろうと思っていたが（ナインは倉崎が苦手だし、正直嫌いだった）、感謝された分は働く事にしようとなインは考えを改めた。

「歩けるか？」

倉崎は手について立ち上がろうとしたが、すぐに崩れ落ちてしまった。

（……俺がおぶって行くと言う案はないだろうし（恐らく全力で拒否してくるだろう）、悠長に体力が戻るのを待っている暇もない……

か）

非常にどうしようもなくなっていた。

「……お前、なぜここに来た」

どこか馬鹿にした口調で言う倉崎。ナインは自分が引きつった笑みを浮かべているのが解った。

（やっぱり、俺はこいつが苦手だ）

だからなのだろうが、ナインはちよつと意地悪したくなった。

「ああ、どうせ説明しても解らないよ。お前等みたいな社会の頂点の人間にはな」

「……………それは」

倉崎は俯き、目を泳がせる。

助けてくれた人を馬鹿にした過去を少し悔やんでいるのだろうか。

（……ま、本当に解ないだろうな。魔兵として育てられれば、感情なんて必要ないからな。誰かを助けたい、なんて気持ちも忘れるだろうさ）

自分が停学になった事件を少し思い出し、あの頃と自分が少しも変わっていない事を再認識するナイン。

そして、本当にどうしようもないと思った。

自分はどうしようもなく、馬鹿なのだと。

「……どうせ俺の能力は説明したって解らないから、お前は黙って感じてろ」

「はあ？」

若干『何を言っているんだこいつ』という視線を浴びたが、それくらいでナインの決心は鈍らない。ナインは倉崎のすぐそばで膝をつき、頭に手を乗せた。

（この魔法は、本当に魔法だろう）

螢火のような淡い光が倉崎を包み込んだ。

「これは……」

「系統的には『治癒魔法』っていうのかな？ まあ、詳しい事は知らんけど。どうだ？　なんか変化あったか？」

「……………」

何も答えない倉崎だったが、その変化は一目瞭然だった。

先ほどまであった目に見える傷は全て綺麗に消えている。不思議そうに手を動かす倉崎だったが、先ほどまで感じていた痛みすらも消え去っている事を知った。

「……………」

「ん。その様子じゃ全快みたいだな。良かった良かった」

じっと見つめてくる倉崎の視線から逃れるように、ナインは顔を背ける。

「……さてと、後はお前が助け出せよ？　俺はもう疲れた。武器とかは使い物にならなくしておいたし、ほとんど気絶させておいた。」

また不覚をとられる事も無いだろ？」

そう言ってふらりと立ち上がるナイン。どこか不自然な動きであった。

というのも、『治癒魔法』はMPの消費が激しいからだった。残っていたMPの大半を使ってしまったている。

「ちよつと待て！ お前には聞きたい事がたくさんあるんだ！」

そんなナインを倉崎は呼び止めた。ナインは目線だけ倉崎の方にやる。

「お前は一体どうして、ここまで来たんだ？ お前に僕を助ける理由なんて無いだろう？ ？？いや！ それよりもこれはどういう事だ？ 治癒魔法、とか言ったか？ それ以外にも何かのスキルを持っているんだろ？ お前は一体、何者なんだ！？」

一気にまくしたてる倉崎の台詞を全て聞き、ナインは答えた。

「悪いな。俺にも隠しておきたい事があるんだよ」

そして、さらっと倉崎の顔を見ながらそれを口にした。

「お前が女なのに男の格好をしているのと同じでさ」

瞬間、倉崎リオは体を震えさせた。

今、深く被っていた学帽は床に転がっている。

倉崎の、リオの顔はよく見れば、それは間違い無く、女性のものだとわかるだろう。

格好と深く被った学帽、それに中性的な顔立ちが彼女の性別を曖昧に、そして男だと勘違いさせていた。

「……知って、いたんですか？」

不意に口調が代わり、先ほどまでの口調は演技だとナインは悟ったが、しかしそんな事はどうでも良かった。

「まあな。最初に会った時から気付いてはいいたけど、あえて言わ

なかった。お前だって知られたくない過去があるんじゃないのか？」

「それは……」

口籠るリオに畳み掛けるようにナインは言った。

「悪いな、今は話せない。この事件が片付いて、もしも興味があるなら話しても良いぜ？　ただし条件があるがな」

そして、ナインはリオの目を見て、ニツと笑みを浮かべてこう言った。

「ご馳走してくれたら、話してやるよ」

小さな笑みを浮かべるリオを見て、ナインは人差し指を上げた。

「じゃ、俺は行く所があるからな」

そして、ナインの姿は消えた。

「いつっ！……！」

が、次の瞬間には頭を抑えて床に転がっていた。

『転移魔法』は建物内でも使用出来るが、使用しても無意味である。

天井に頭をぶつける結末しかないのだから。

第二章 失敗作品・6（後書き）

思っ所があり、『瞬間移動魔法』 『転移魔法』にしました。

第二章 失敗作品・7

「あれ？」

『脱出魔法』（建物、洞窟内からその入り口へとワープする魔法。魔法が解析されていない現代、例えば牢屋だろうが密室だろうが無視出来る。完全犯罪、脱獄のお供）を使って元研究所から出たナインは、目の前にいる人物の意外性に声を上げてしまった。

「ジョーズ。お前、来れないんじゃないのか？」

「そのつもりだったんだが、思ったより自体が深刻化したんでな」

その人物、人喰いジョーズの亡霊と名乗る男は、軽く会釈してナインの前に立った。

「……なんか嫌な予感薄々してたけど、まずいのか？」

「まずいな。黒嶺学園が情報規制をしているから、今はそれほど騒ぎが起こっていないがな」

「……………」

「さて、時間が無いので手短かに言うぞ？ 俺には出来ないことだから、お前がやれ。一度しか使えないぞ」

そう言って、ジョーズはナインにそれを渡した。

それは、鋭い銀色の光を放つ小さな鎌だった。

「お前の瞬間移動なら、まだ間に合うだろう。救ってこい」

それだけ言うと、ジョーズは踵を返し、その場から立ち去った。
急いでいるように見えないのに、その姿はすぐにナインの視界から消えた。

「……………」

残されたのは、鎌を持ったナインだけだった。
溜息を吐き、神妙な顔でナインは天を仰いだ。

「世界が何も変わってないのか、それとも、俺が何も変わってないのか……………」

空はナインの重苦しい心情を嘲笑うかのような、綺麗な月夜だった。

「……………あの頃と、何も変わってない」

「初めまして、と言った方がいいか？」
『イメージダウン 幻想卸し』霧道鏡介むでうきやうすけ

霧道達はその声で立ち止まるのを余儀なくされた。

ジョーズは霧道の行く手を遮るように、ふらっと小道から現れた。

「……………誰だ、お前は？」

霧道は睨むようにジョーズを見る。今は一刻も早く『不可視力』
を治療しなければならないのだ。

こんな怪しい（黒いローブにファンシーな髑髏面）の男に止められている時間はないのだった。

「……直接会ったのはこれが初めてだろうが、『精霊』と言えば解るだろう？」

ジョーズの放った言葉で霧道の体が、まるで自分の全てを見透かされたかのように、ビクツと震えた。

「……………なるほど。お前が、人喰いジョーズか」
「今はその亡霊だな」

（よりもよって、このタイミングでお前が出てくるか……）
冷や汗が頬を伝うのを肌で感じながら、強気に霧道はジョーズに問う。

「その亡霊が、一体俺に何の用だ」
「取引をしようと思っただ」
「取引？」

ジョーズは霧道に笑い掛け、頷く。

「そう。……知っての通り、俺は今自由に動けないんだ。だから、手足が欲しい」

「……それで俺達を、か」
「勿論、対価は君たちが起こしたこの事件の隠蔽。それと今後の生活の保証だ」

「随分と気前が良いな」

黒嶺学園というこの国の現最高戦力相手に喧嘩を売って、作戦が

失敗して助かるとは思っていなかった、まして失敗作品と呼ばれ蔑まれて来た霧道には、今後の生活の保証程欲しい物など無い。

「お前だつて知つただろ。この世界には救いなんて本当に少ない。だから、俺達がその救いになるう。それが、力を持った者のすべきことじゃないか？」『万物に憑く魂』の契約者」

霧道は黙り、そして二人の顔を見る。

『写撮許可』は先ほどの会話の意味をほとんど掴めていないが、自分たちの未来が保証されるという事に関しては、驚きと喜びの狭間の表情を浮かべている。

『不可視力』は未だに目を覚まさない。止血だけは済ませているが、しっかりとした設備で診せた方が良いのは明白だった。

『幻想卸し』の答えは、決まっていた。

「……なんだこりゃ」

ジョーズに渡された地図に記されていた場所へ来たナインの一言目だった。

人気の無い山道、その入り口。

そこは、柵に囲まれた異世界だった。

呼吸する事もできない世界が、そこには広がっていた。

空気に酸素は含まれていない。熱風と吹雪が入り交じり、大地が絶え間なく削られていた。

空気は凶器。大地と工場は被害者。

「……何やってんだよ」

それでは、その全ての中心にいる少女は、一体何者だと言うのだろうか。

加害者だろうか？

それとも、被害者なのだろうか？

「愛葉！」

ナインの叫びは、愛葉には届かない。

唸る風がその声をかき消した。

「……くっそ！」

しばし握っていた鎌を見つめていたがナインは覚悟を決めて、異世界へと変わり果てた工場跡へと踏み込んだ。

瞬間、約3000あったHPが2000台前半まで減らされた。

「やば、忘れてた」

ナインは急いで『吐息系軽減魔法』を発動。

そして、愛葉の元へと駆け出した。

『吐息系軽減魔法』

攻撃性を持った熱と冷氣に強くなれる魔法。どこかの異世界にいらると言う龍族の吐く炎や吹雪に耐性が付くとか付かないとか。魔王戦などでもよく使われる。愛葉戦ではずっと使っていた。

だが、『吐息軽減魔法』でも酸素のない空間で生き抜く事を可能にするはずは無いのである。

現に、そんな魔法を彼は持ち合わせていない。

なぜ彼がこのような劣悪な環境で無事なのか。

それは、『RPG』のスキルを持っている、その時点で発揮される効果のおかげだった。

『RPG』

それはHPとMPを生み出す能力。そこに間違いは無い。

ただ、『RPG』のスキルは、発動しているかいないかに関わらず、保持者に一定の恩恵を与えている。それが、ナインを無酸素の空間で生かしているのだ。

『RPG』はお遊びの『プログラム』。ロールプレイングゲームをモデルに創られたスキル。

さて、ロールプレイングゲームに置いて、火山やら雪山などの王道のステージで、気温やら気圧、酸素の有無を気にしている作品はあるだろうか？ あったとしても、それは他の大多数に埋もれるのではないだろうか。

マグマに触れればダメージを受ける。だが、ダメージを受けるだけで済んでいる。

『RPG』のスキルは、それを再現しているのだ。

『RPG』発動中以外でもそれは作用し、気温や気圧、酸素の枯渇などの目に見えない現象の大半は無効化処理される。

『RPG』の真の能力は、これであつた。

暗く何も見えない怖い世界。

響き渡る聞こえないはずの悲鳴絶叫怨嗟の声。

繰り返される暴力の数々が再生され、幾度と無く蹴られるリオの姿が脳裏に浮かび上がる。

私の所為で、リオは死んでしまったのだから。

何もかもが、どうでもいい。

全て、壊れてしまえば良い。

壊れてしまえ。

ふと、誰かに呼ばれたような気がした。

それなのに、
酷く懐かしい声だった。

その声には、憎しみや軽蔑などなく、どこか暖かみを感じさせる声だった。

その暖かさが、全てを綺麗に拭ってくれた、そんな気がした。

けれど、力の暴走は止まらない。

「愛葉！」

熱風と凍てつく息吹、風刃と石片??それら全てを受けHPは激減したが、それでもナインは愛葉の元へと脚を止める事はしない。止める事など、出来るはずも無かった。

聞こえぬはずの声に少女は振り返り、憎悪と困惑を見せた。

少女は泣いていた。

（結局、何も変わりはいなかった。あの事件で俺が知った世界は、何も変わってはいない。この世界は犠牲があつて、初めて成り立っていると言つ事は）

HPが2000を切ったが、ナインは脚を止めない。

（世界にはたくさんの人がいて、優秀な人間は良い生活を送る。才能の無い人間は、使い捨ての穴埋め品だ。ランクなんて物がなかったとしても、それはきつと同じだろう。壊れた物は治さず、新しい物を買うように、才能が無ければ捨てられる）

HPが1000を下回ったが、愛葉との距離は近づいた。ナインはもうHPの残りを気にはしない。

（何かを得るためには、何かを失わなければならない。それは真理

だろう。だけど、ランクを上げて良い生活を送るには、誰かのランクを下げなければならない。自分が強くなるには、誰かを殺さなければならぬ。そんなのは間違っている！ 平等なんて望んじやない。ただ、誰かを犠牲にするのは間違っていると思うだけだ。…それは矛盾している、馬鹿だっと思われるだろう。だけど！

HPが0になり、ナインの体を壮絶な痛みが襲った。

自分の体から血飛沫が舞い、体が燃えるような痛み、凍えるような寒さを体感した。

だが。

愛葉の涙と、自分の血。

尊ぶべき物はどちらか、ナインには解っていた。

だから、ナインは叫ぶ。

自分の意志を通すために、自分にそれを言い聞かせるために。少女にそれを知ってもらうために。

「目の前で誰かが犠牲になるのを、黙って見過ごせるかよっ！！」

ナインは鎌を振り上げ、そして愛葉を切り裂いた。

瞬間、それは少女を喰らった。

鎌は碎け散り、壮絶な痛みがナインの意識を奪った。

第二章 失敗作品・7（後書き）

予定より一日早く更新出来ました。

あれ？ 昨日まで週別ユニークが100未満だったのに、あれ？

次回は金曜日を予定しています。

第二章 失敗作品・8

につこりと笑みを浮かべた人間が目の前にいると、どうしてだろう、怖い。

それがナインの、リオの微笑に対する感想だった。

場所は高級レストランの個室。そこには二人しかいない。

「ここは私の親戚が経営しているレストランなので、どうぞ遠慮せず」

目の前には豪華な皿に乘せられた料理がたくさん並んでいる。恐らく、値段に換算すれば万の桁は軽く超えるだろうフルコースだった。

「……倉崎リオさん？　なんか悪い物食べたの？　何なの？　俺に一体何を求めているの？」

「別にそんな事はないですよ？」

リオは小首を傾げ、真っ直ぐな瞳でナインを見つめた。

その仕草が妖艶で、ぐっとナインは息を飲んだ。

「いやいや、明らかに態度がオカシイ！　何この待遇！　一人称が僕から私に変わってるし！」

事件翌日、五月の朝の日差しで微睡みながら公園のベンチで空を見ていたナインは、リオに食事を誘われ、現在に至っている。時刻はちょうど昼となっていた。

「もうバレているのなら演技をする必要は無いと思ひまして。……似合ってますんか？」

「いや、そんな事は無いんだけど……」

「それとも、罵倒されるのが好きですか？」

「それは無い！」

くすくす笑うリオ。苦笑いを浮かべるナイン。

（やっぱり俺は??）

「わかった。それじゃあ遠慮なく頂きます」

「どうぞ召し上げ」

何度だって繰り返したその台詞を、ナインは声に出さなかった。

デザートまで食べ終え、食器は片付けられた。

「……で、一体何のようだ？」

「勿論、昨日のお礼だけです。他意は無いですよ？」

「あれ？ 俺の昔話とか聞かなくていいのか？ 知りたかったんじやなかったっけ」

リオは首を振り、それを否定する。

「そうでしたけど、やっぱり止めておきます。あつ、ある程度は勝手に調べちゃってますが、良いですか？」

「ん。別に気にしないよ。俺は過去よりも未来に生きる男だからな」

「頼もしいですね。では、今回みたいな事件の時はお願いしますよ？」

「……最終的にそうなるのかよ」

「冗談です？？って、そんな複雑そうな顔をしないでくださいよ。

反応に困ります」

微妙に顔をしかめるナインに、リオも表情を強張らせた。

「えっと、正直に言うとき、頼ってもらう事に悪い気はしないんだよ」

「それなら？？」

と、リオは本題に踏み込んだ。

「もう一度学校に、黒嶺学園に戻ってはどんなんですか？」

リオの真摯な態度に、しばらく迷って、ナインは曖昧な笑みを浮かべた。

「……そりゃ無理だな」

「どうしてですか？ 今も学校にあなたのIDは残っていますし、

資格を取れば卒業、年齢なんて関係ないですよ？」

黒嶺学園は入学式こそあれど、卒業式と言う物は存在しない。資格を所得、もしくは戦闘技術が認められた時点で卒業となるのだ。

最も、戦闘技術を認められるには最低でも三年と、長期に渡ってその実力を判定されなければならないのだが。

「そうじゃないんだ」

「では、なんでですか？」

ナインはリオの目を見た。リオもナインを見つめた。

二人の視線は、決して逸れる事無く真っ直ぐに絡み合い??そして。

「……駄目だな。俺には視線で納得させるのは無理か」

気恥ずかしそうにナインは目をそらした。

そのため、リオが微かに頬を赤く染めているのにナインは気付かなかった。

「俺が試験で不正行為をしたのを知ってるだろ？」

「はい」

リオは自分が調べたナインの情報を思い出す。

（実技試験で満点という破格の結果を叩き出し推薦入学。しかし直後の試験で不正行為を働き停学処分。その成績故に退学ではなく停学処分……。実技試験で問われていたのは、スキルを用いた模擬軍事任務。怪我一つ負わず、最短時間でクリア。試験での不正行為なんて関係なく、学校が捨てきれなかった逸材）

スキルこそ非公開だが、彼の能力は一時期学園に轟いた事もあるのだ。

最も、それもすぐに消え去ったが。

「俺がいた当時の黒嶺学園の試験はクラス同士の対戦だったんだが、今はどうなってる？」

「今もそのままです。個人戦とチーム戦の二つがありますね。クラスとの競争心と団結力を高めるためですが」

「そうだな。俺もそれには反対していない。で、俺のやった不正行

為つてのは」

ナインは嫌な事を思い出す、というよりは遠い過去を懐かしむように言った。

「助けに入った事だ」

「えっ？」

リオは驚きを隠そうとはせず、ナインは構わず話を続けた。

「当時の俺のクラスには、『戦国夢想』とか『糸離滅裂』ヴァルキリアって呼ばれる凄腕の奴がいて、チーム戦で他のクラスに圧勝していた。んで、その仕返しにと言わんばかりに、個人戦ではウチのクラスの奴らは過剰な攻撃を受けた訳だ。んで、あまりにも酷かったから俺が割り込んで助けた。結果は停学」

「酷いじゃないですか！ どうして張り合わなかったんですか？」

まるで自分の事のように顔を真っ赤にして起こるリオ。

「んゝ、それで知ったからかな。俺以外に割り込む奴がいなくて、負ける方が悪いって雰囲気だったから。そういうモンなんだな、と思つて。お前もそう思うだろ？」

「……それは」

黒嶺学園は魔兵を育成する学校だ。

ナインの行いは、使えない兵を助けるために作戦を無視するような行為だ。

戦場でそんな事をすれば、大勢の命が失われる事は確実だ。

「だから、俺は戻れないんだ」

非道さに目を瞑り、ルールを重んじる教育方針が気に喰わなかった。

だからナインはルールを破り、学校を後にした。

「……そうですか。まあ、最初から諦めていた事なんで、良いですけどね」

リオは仕方がなさそうに肩を竦める。

「悪いな」

「謝らないでください。きっとこれからもしつこく誘うんで」

「おいおい、また冗談か？」

「冗談??ではありませんよ？ 私は、あなたと一緒に学校に通ってみたいと思うんで」

プロポーズに思えなくもない台詞を真顔で言うリオに、ナインは焦りを感じていた。

「……なんて言うかさ、俺の事買いかぶり過ぎだろ。ほんの気まぐれで助けただけなんだぞ？」

「だからですよ。意識しなくても他人を助けられる、それがあなたの本質なんじゃ無いんですか？」

なんか恥ずかしい。

このままでは胸を焦がさんとする何かに焼かれてしまっ、そう思ったナインは話を変えてみる。

「……お前は変わったな。いや、俺は語れる程お前の事を知ってはいないんだけど。何となく、そんな気がするんだよ」

「いえ、私は変わりましたよ」

「へ？」

驚く程簡単にリオはそれを認め、素直にナインは驚いた。

「私は変わりました。勿論、一人称が僕から私に変わったただけではないですよ？」

「そりゃそうだろうけど」

「忘れていた心を取り戻せた、とでも言うんでしょうか。私も、このままでは駄目だと思うんです。このままだったら、遅かれ早かれまた今回みたいな事件が起こると思います。だから、変わらないといけないと思っただんです。自分が上に登るのに、下を見ないのは間違っている、そう思っただんです」

ナインは一人、安堵の溜息をついた。

（俺は変わってない。世界も変わってない。……けど、これから変えれば良いだけの話か）

ナインはリオに微笑む。

「頑張ってくれ。もし困った事があったら、いつでも呼んでくれよ。多分助けに行けるから」

「多分って何ですか！ ちゃんと助けに来てくださいよ！」

「いや、だってお前十分強いだろ？」

リオはむっと顔をしかめているが、ほのかに頬が赤みを帯びていた。

それを誤摩化すように、リオは言った。

「……それなら、私より強いあなたは、一体何者なんですか？」

ナインはその質問にさらっと答えた。

「歴史に真実を求めるのは間違っている。歴史の真実なんて、当事者しか知りはいないんだ」

人喰いジョーズの亡霊は椅子に腰掛け、ナインに言い聞かせた。

「歴史に意味なんて無い。過去は過去。参考程度にしかない。過去の過ちを繰り返さない、それだけさ」

「……歴史の改竄者、もしくは歴史の真実を知る者の言う事は違うな」

ナインの言葉に、ジョーズは静かに首を振った。

「俺はそんな大層な奴ではない。ただ、当事者だったただけだ。……」

まあ、真実の詐称はよくするがな」

「要するに嘘つきだろ？」

ナインは揶揄し、ジョーズは笑みを零した。

「まあ、そのおかげで助けられたから感謝はするけどさ。お前の力には敵わないよ」

「好きで手に入れた力じゃないんだがな。それに、本来なら……」

ジョーズはそこで言葉を切った。

「『人喰い』、それはお前の役目じゃないんだろ？」

ナインがそれを引き継ぎ、何度と無く経験した、あの不可思議な現象を思い出す。

『人喰い』

それは、人を喰らう力ではない。勿論、人を喰らう事も可能だが、その本質は別の所にある。

人が自分を自分だと認識するための何か、それを喰らう事が出来る力。

それを有しているから彼は『人喰いジョーズ』、その亡霊なのだ。喰われた者は、喰われる以前の自分と認識される事は無い。喰われれば、もう二度と過去の自分には戻れない。

『人喰い』の力は人の過去と現象、記憶と記録??存在という概念を喰らう事が出来る力。

その力を形に表せば、それは鎌。

歴史の改竄、真実の詐称を行なえる力。

神ならざる者にして神と形容される存在。

それが、『人喰いジョーズ』の正体。

気を失っていたのはほんの数秒だろう。

ナインはすぐに残ったMPをフルに使い、『治癒魔法』で傷を治した。

ナインが切り裂いた愛葉の体には、傷一つない。

あの鎌が喰らったのは、愛葉とこの事件の関係。

鎌は、これより以前の記録を食らいつくし、砕け散った。

愛葉本人と、この事件の当事者達しか真実には辿り着く事は出来ない。

例えば愛葉が暴走している映像が撮られていたとしても、それは今では何か別の存在に置き換えられているだろう。

それは決して解明、理解の出来るような類いの力ではない。
まるで魔法のような。
奇跡とは形容出来ない力。

「才能を否定された彼らが求めたのは、認めてくれる未来だ。その手段の一つとして、本当に脳みそを喰らうつもりだったようだが、おぞましい話だな。しばらくここには置いておけないと思って知り合いに任せたが、きっと反省しているだろう」

九州までの道は長い、とジョーズは付け足した。

「……自分たちの求めた未来は、人を捨ててまで手に入れたい物だったのかどうか」

「彼らには自分を見つめ直す期間が無かったただけだ。一度落ち着いて考えれば、答えは変わるだろう」

そうだといいな、とナインは呟いた。

直接の面識こそ無いが、彼らの気持ちをナインは理解しているつもりだった。

「しかし、『不可視力』は失敗作品だが、『幻想卸し』は真の意味での失敗作品だったな」

「『不可視力』は確か……、呼吸を止めている間しか透明になれないんだっただか？」

独特の喋り方は、その欠点を隠すための物。

「そうだ。失敗作品というのは、能力を発動するのに活動を阻害される欠点のあるスキル保持者、それを指す言葉だ。呼吸を止める、それは大きなリスクだな」

「で、『幻想卸し』は？」

「奴は元々幻術を使えた。それとは別に『幻想卸し』を手に入れたが、それは使い物にならなかった。そういう話だ」

「なるほどね」

「『写撮許可』^{プロジェクト}は、自分のスキルに不満を持っていた。というのも、黒嶺学園の生徒の中で彼女のスキルは最も低い『D』ランクだった」

「で、憂さ晴らしと自分のスキルを上げる、もしくは別のスキルを手に入れるために事件に加担したのか」
「そついう事だ」

誰かに認められなくて。

でも誰にも認められなくて。

認められるには力が必要で、その力が自分たちには無くて。
才能と言つ一言で終わらされる人生に嫌気がさしていて、それに抗つてみて。

そして、人の脳みそを喰らうような人間に成り果てる。

けれど、人間を捨ててまで手に入れるほど、他人の評価に価値はあるのだろうか？

本当に、才能は無かったのだろうか？ それしか道はなかったのだろうか？

彼らを送り出す前に、ジョーズは言った。

「誰かに認められる前に、自分を認められる自分になれ。自分を認められずに、他人から認められると思うな」

彼らが変わるのは、もう少し先の話。

「ぎゃん！」「きやつ」

ナインは押し潰されていた。愛葉がナインを押し潰していた。

場所はいつもの公園、いつもの時刻。

リオとの食事を終え、食後にコーヒーでも飲もうと思っていた矢先の出来事だった。

「痛って??? って、朝井かよ！ お前は墜落癖のある魔法少女かよ！ さっさと降りろ！」

魔法少女という表現では不適切だな、と思っているナインだったが、そこは無視せざるを得なかった。

愛葉が、上から降りてくれなかった。

「……朝井愛葉さん？ 何？ 怒ってるの？ どうして？ 怒りたいのは俺なんだけど」

「……………んで」

はい？ とナインはそれを聞き返した。

愛葉の声はとても小さく、聞き取れるような物ではなかった。

すると愛葉は、ナインの襟首を掴んで問いただした。

「なんで？ なんでアンタは、助けてくれたの？」

「は？ なんの事だ？」

「とぼけないでよ。アンタなんでしょ？ 私の能力の暴走を止めたのも、リオを助け出したのも」

キツと睨みつけられ、ナインは思わず口から出そうになった軽口を叩けなくなった。

「……こだわるな、そこん所。俺としては、お礼とか理由とかどうでもいいから、さっさと降りてほしいんだけど」

誰かに見られたらどうすんだよ、とナインは思った。

自分に馬乗りになっている少女。下にいる人間としては、まあ、別に気分としては悪くはなかったりするけど、やっぱり恥ずかしいと言つか、情けないと言つか。

「先に答えて。そしたら降りるから。……どうして、助けたの？」

どうやら降りたら逃げられると思われているようで、愛葉はナインに乗ったままだった。

もしかするとこの娘、羞恥心とか欠けちゃってる？ とナインは

疑わずにはいらなかった。

「……ただの気まぐれだよ。それ以外の何でも無い」

「……………」

しばらくナインを見つめていた愛葉だったが、諦めたように溜息をつきナインから降りた。そして手を差し出す。

「……何？」

「立つの手伝ってあげようか、と思っただけ」

「なんで？」

「……………ただの気まぐれ」

「……………あつそ」

気まぐれなら仕方ない。

ナインは素直に愛葉の手を借り、立ち上がった。

「えっと、ありがとう。アンタのおかげで色々と助かったわ。幸い、行方不明だった子は皆見つかったし」

一人、春日だけは見つからなかったが、転校したと愛葉は聞いている。

彼女の事は解ってやれなかった自分の責任だと思い、特に恨んではいなかった。

「そりゃ良かったな。まあ、連中の目的が優秀な脳みそ集めで、その最たるがお前だったんだから、もしかすると人質か誘き寄せるためでしかなかったのかもしれないな。まあ、馬鹿にされていた憂さ晴らしも混ざってはいたが」

「……………そうね」

リオに事件の真相を聞いているのか、気まずい顔をする愛葉。

「しかし、なんで暴走なんかしたんだ？ 俺にはさっぱり解らなかつただけだよ」

ナインの質問にしばし沈黙し、何故か顔を赤らめる愛葉。

「……………何でも良いじゃない。もう二度とあんな事にはならないから」

「それなら別に良いけど」

と言ったナインだったが、不意に何かを思い出したように付け足した。

「お前さ、一人で悩むなよ。お前には頼れる仲間がたくさんいるんじゃないのか？ 会長って仕事は何も背負うだけじゃない。信賴つて支えがあるから、会長は存在出来るもんだろ」

「……い、言われなくても解ってるわよ、この馬鹿」

周囲に陽炎が見え始めているが、二人は気付かない。

ついでに、じっと自分を見つめる視線があるのにもナインは気付いていない。

愛葉は自分の顔が赤くなっているのに気付き、慌てて顔を下に向けた。

「ん？ まだなんか言いたい事あるのか？」

焦った愛葉は、ポンと頭に浮かんだ質問を口にした。

「ア、アンタはさ、結局何者なの？」

ナインは本日二度目のその質問にさらっと答えた。

「NEETだよ。誰かに必要とされたい、NEEDとも言おうかな」

第二章 失敗作品・8（後書き）

第二章終わりです

次回更新は未定ですが、

大体の流れはありますので、一週間以内には更新したいです。

第三章 魔法使い・i（前書き）

今回から第三章です。

第三章と第四章は話が繋がるような気がします。
導入部なので短めです。

第三章 魔法使い・1

「実験体N o . 9、意識接続順調です」

「引き続き実験は進める。この実験に、この国の未来は掛かっているんだからな」

「解りました」

一人の人間の何かが、冒されていた。

「調子はどう？ 頭痛とかはしない？」

白衣の女性は目の前の少女に尋ねる。

「まあまあ、かな」

少女はショートの茶髪を梳き、自慢げに言う。幼さを残した顔立ちで、翡翠のような輝きを持った瞳。

少女の格好は、病院の検査服。そして場所は白い壁で覆われた、診察室。

少女は患者で、白衣の女性は医者だった。

某国の空港、その医療施設だった。

「はいはい。あなたは優秀な子ですからね」

「……馬鹿にしてるでしょ」

ジト目で少女は女医を睨み、気まずそうに女医は目をそらした。

「えーと、あつ、そうそう！ 検査の結果は、異常無しだったわ」
「って事は……」

少女の目が期待に溢れ、女性は頷いた。

「ええ、出国許可がされたわ。御免なさいね？ 規則だから検査を受けてもらったのだけど……」

「いいわよ、別に。あなたに非がある訳じゃないでしょ？ それに、これで大手を振って日本に行けるわ」

小さくガッツポーズをする少女に、女医は彼女に服を渡した。
出国に当たって健康診断が必要だったのだ。

「あなたの行き先は日本だったわね」
「ええ。数年前までは大した見所も無かったけど、今となっては別なもの」

服を受け取り、全く気にする事無く女医の前で着替える少女。同性だからだろうか、まったく恥じらう様子が見られない。

そんな少女に、女医は自分とは別次元の人間のように語りかける。

「あなたに取って数年前までの世界は、どこもそんな物じゃなかったの？ 天才魔法使いさん」

「そうね……、確かに詰まらない物だったわ。こんな事言うのは不謹慎だろうけど、その点は侵略者さんに感謝してるかも。魔法使いを表舞台に上げてくれた事に」

「昔なら魔女狩り、昨今では電波なんて呼ばれているものね。で、世界で魔法が認められて、あなたはその最先端の学校に留学するん

でしょ？ あの黒嶺^{くろりやう}学園に」

黒嶺学園、という単語を強調しながら女医は言ったが、少女はまるで気にしていなかった。

「そんなの関係ないわ。どうせ今は四魔戦とかいう武闘大会もどきの準備で忙しいから。あたしが興味あるのは、最先端の魔力を使った技術、それと対極の古代魔法だから」

「要するに、魔兵にはなる気は無いってこと？」

「その通り。人口のパーセントにも満たない魔法使いの一人が入学したい、なんて言えばどこでも入れてくれるし、多少の融通も利くわね。特に、魔兵専門学校ならね」

一通り着替え終えた少女は、くるりと回って変な所が無いか見直す。

少女の服装は、黒を基調とした制服。その胸には金の刺繍が入れている。

「スキルではどうしても魔法には届かないものね。スキルは、どちらかというと科学の延長戦上にあるもの。魔法は、理解や解釈が不可能な、不思議な力」

「奇跡、と形容するのが一番いいかもしれないわね」

「それで、結局あなたは何をしに行くの？」

少女は、クスリと微笑み女医に言った。

「ちょっと研究に。ついでに、探し物を見つけようかと思って」

第三章 魔法使い・1（後書き）

しばらく彼女がメインになると思われます。
感想よろしくお願いします。

第三章 魔法使い・2

ナインはチャラチャラと音が鳴る財布を持ち、自動販売機の前に立っていた。

「さうて、今日も一杯飲み??」

ナインは何故か苦手なコーヒーを飲む習慣がある。

毎日飲めば慣れるだろう、という発想が生んだ習慣だが、しかし謎である。

何故いちいち割高な自動販売機で購入するのか、それは謎である。毎日飲むのであれば、箱入りで買溜めしておけば安上がりになるだろう。恐らく気付いていないだけだろうが。

そして、その些細な節約が出来ないから。

彼の財布にはリングブルしか入っていないのだ。

「……あれ？」

ナインは財布をあさる。

札は無い。小銭も無い。あるのはクーポン券とお得意様カード、それと大量のリングブルだけ。

現金は持ち歩いていないんだ！ え？ カード払い？ 違つよ、貧乏なだけさ！

NEET、それ故に金がない。
働かざるもの喰うべからず。

ここ最近、バイトも無かったナインは、ついに金欠になった。

「これから一緒に食事なんてどう?」

「行く!」

「その代わりと言っては何だが、頼みたい事があるんだが、いいか?」

「……食事は?」

「高級レストラン、ちなみにもし引き受けてくれるなら、お金も出す」

「乗った!」

ここ最近のナインの食事情は、残念な事になっていた。

朝食はパンの耳、昼食は試食品、晩ご飯はコンビニで捨てられる賞味期限切れ弁当。

経済大国日本、プライドさえ捨ててしまえば飢え死になどしないのだ。

愛葉達を見かければ物欲しそうに眺めるナインに、プライドなどあるはずも無かった。

生きるためには手段を選ばない、残念な男だった。

だから、食事に釣られてはいはい付いて行ってしまうのだった。

とりあえず洗濯にだけは気をつけているナインは、おかげで着古された服装で、明らかに場違いなレストランにいた。

そこは、以前リオと一緒に食事をしたレストランの個室である。けれど、今回は二人きりという訳ではなかった。

「紹介するわね。こちら、留学生のミラ・ルーナさん。で、こつちが……」

「ナインだ。よろしく」

「……………」

ナインは会釈し、ルーナと呼ばれた少女はジト目でナインを凝視していた。

ルーナは、その個室に入った時には既にいて、黒嶺学園の制服を着ていた。肩までの茶髪、緑色の瞳である。

一食で2000kcalはあるだろう豪華絢爛の食事を終え、愛葉、リオ、ナイン、ルーナの四人は本題へと入っていた。

「先に言っておいたと思うけど、念のためにもう一度言っぞ？」

ルーナがいるためか、キャラ作り中のリオが説明を始める。

「知ってると思うが、五月は四魔戦に出場する学校を決めるため、学校対抗で試合を行なっている。で、ルーナはそれに参加しない事になっているのは良いな？」

四魔戦とは、全国にある魔兵専門学校の頂点を決める武闘大会、のようなもの。

その結果によって、設備やら教員やら生徒のスカウト優先権などが決まるものだ。

勿論、大会で好成績をあげた生徒にも、良い就職口やランクの昇格などの利益がある。

が、武闘大会もどきなので、戦闘向けのスキルでない生徒は参加しなくても良い事になっている。

チーム戦もあり、偵察スキル保持者などはそちらに参加する事もあるが、基本的に参加は生徒の自由である。

件のルーナは、というと。

「そりゃ聞いてたさ。研究目的の留学だから、戦闘には極力参加したくないんだっただか？」

「そう。それで、五月はその準備とか試合とかで私達はちょっと忙しいの。そして、ちよつと問題があつて……ね？」

愛葉チラリとルーナを見て、ルーナにこの先を促す。これから先の話はナインは聞いていない。

だが、なんとなく、嫌な予感はしていた。
そして。

「……こいつ、ほんとに役に立つの？」

ルーナは面倒臭そうに、というか露骨に訝しむ顔をして、刺々しい言葉を放った。

さらに。

「それもそうよね」「それはそうだった」

「えっ、そこ頷いちゃうの？」

思わぬ裏切りに遭い、狼狽するナイン。逆に言つたルーナが二人の態度に啞然としていた。

「えっ、いや、ほんとなの？」

「冗談。見た目は微妙だけど、腕は確かだから」

「そうだな。碌でもない奴だけど、責任感はあると思う」

愛葉が腕を、リオが信頼性を保証したが、当のナインは微妙な顔をしていた。

「……褒められた気がしない。軽く馬鹿にされている気がする。帰って良いですか？」

「食い逃げするつもりか？ ここの料理は、心折価格だぞ」

「心が折れるってどんな価格だよ！」

少なくとも、皿洗い程度の仕事で食費を返せはしない事は明白だった。

正直に言えば、『脱出魔法』と『瞬間移動魔法』を使えばいかなる犯罪行為も可能だったりして、更に言うなら十分なカロリーを摂取したナインなら、どれほどの相手でもゴリ押しで逃げ切れるのだった。

そういう魔法の使い方はしない、それがナインだが。

「……で、結局こいつは役に立つの？」

再度ルーナが愛葉とリオに尋ね、二人は答えた。

「大丈夫。なんだかんだ言っても、腕は黒嶺学園の実技試験で満点レベル、まあ、試験中に助けに入って停学中だけど。その点、丁度いいでしょ？」

「……………面白い奴ね」

試験の不正行為が丁度良いとはどういう事なのか解らないナインは、目の前で微笑を浮かべる三人を見て体を震えさせていた。特にルーナ。

心底面白そう、どこか天然記念物を見るような目だった。

「解った。二人がそこまで言うんなら、そうなんですよ」

ルーナは立ち上がり、右手を差し出し握手を求める。

「あたしの名前はミラ・ルーナ。魔法使いよ」

ナインも見習いその手を取り、答えた。

「俺の名前はナイン。仕事も収入も無いんだ」

にっこりと微笑み合う二人。

だが、ナインの右手が悲鳴を上げた。

「痛っ!!」

『RPG』を発動する間もなく、ナインの右手の骨がゴリボキと痛々しい音を奏でた。

ルーナは手を離さず、愛葉達に尋ねた。

「……こいつ大丈夫？ くだらないシャレとか、ものすごく駄目人間な匂いがする」

「……………」

さすがに、二人も答える事はできなかった。
ナインは思った。

（俺……黒嶺学園の生徒は?? 苦手だああああああああああああああああああ!!）

出会い頭に常に攻撃されれば、苦手になってもしかたないだろう。

第三章 魔法使い・2（後書き）

少々忙しいのと、もう一作も書きたくなっている私がいます。
次回更新は、火曜日以後。

感想、指摘などお待ちしています。

第三章 魔法使い・3（前書き）

微妙にスランプ気味な気がするので、差し替えるかもしれません

第三章 魔法使い・3

「……気が乗らない」

ナインは、もう二度と潜る事は無いと思っていた門の前に立っていた。

幅五メートル、高さ三メートルの巨大な門。

黒嶺学園の入り口立ったナインは、大きな溜息を吐いた。

「護衛？」

その不穏な空気を帯びた言葉を再度尋ね、ルーナは頷いた。

「そつ。あたし達魔法使いは希少な存在だから、色々な組織に様々な目的で狙われる事が多々あるの。この国に来る前から鬱陶しいくらい、ね」

「それで、護衛が必要だと？」

リオが頷き、愛葉が答えた。

「普段は私たちが周りにいて見張っているんだけど、五月はちょっと無理なの。だから、五月一杯護衛を頼めないかしら？」

「というか、食べたんだから働け」

前払いとして豪華な食事を食べてしまっているナインには、もう後戻り出来なかった。

「生徒のほとんどが、試合やら修行とやらに出歩いているみたいなのは幸いだが……」

五月は四魔戦に参加する学校を決めるため、学校対抗でトーナメントが開催される。黒嶺学園も例外でなく、そのトーナメントを勝ち上がらなければならない。

チーム戦と個人戦が行なわれるが、当然のように全員が参加出来

る訳ではない。そのため、試合に参加出来ない生徒は応援（という名の偵察）、もしくは各々で修行するように言われるのだとか。修行、という辺りが魔兵専門学校らしいと言えば、らしい。

「嫌だな……」

ナインは、会いたくない人間が一人いた。

黒嶺学園にいたのは、一ヶ月にも満たないわずかな期間。

それでも、苦手な人間の一人は出来たのだった。むしろ、一ヶ月しかいなかったからかもしれないが。

「まあ、そんな事言っても仕方ないか。ちょうど、あいつとは縁の無い場所だし」

諦めたように、ナインはその門を潜った。

「時給500円！ 三食付き！ これで今月を乗り切れる！」

金額は控えめだった。

黒嶺学園の図書館には、二人しかいなかった。

図書館は学校と渡り廊下で繋がっており、

ルーナとナインである。

現在、他の生徒は他校との試合に出向いており、校舎内には二人しかない。

「……護衛って、学園内でも本当に必要なのか？」

「あたしだって必要ないと思ったわよ。でも、愛葉が……」

「なるほどね」

黒嶺学園は境界が張られており、生半可な攻撃では揺らぐ事はない。そこに侵入するのは、ほぼ不可能と言っても過言ではなかった。

「で、あんたのその格好は何？」

「これか？ 変装、という奴だな」

ルーナに怪訝そうに見られたナインの格好は、黒嶺学園の学ランにサングラスと言った、昨日のまでのボロい格好とは一線画する格好。

制服は停学時の物をそのまま使っており、サングラスはワンコイン臭がしていた。

「変装って……、何？ 会いたくない奴でもいるの？」

「まあ、そうだな」

ふうん、とルーナはどうでも良さそうに相槌を打ち、思い出したように付け足した。

「ああそうだ。好きな事しててもいいわよ。あたしの邪魔さえしなければ」

「いいのかよ。俺の自給って、お前が払ってくれるんじゃないかったか？」

「だから、形だけ。別にあたしはあんたの事頼りにはしてないから」
先日のシャレの所為でナインの信用はがた落ちしていた。

「自分の身は自分で守る。そうやって生きて来た訳だし。魔法使い舐めんな」

本当に護衛の意味も無かった。

「………そうか。じゃっ、俺は飯喰って来るわ」

そう言っただけで普通にドアを開け、図書館から抜け出すナイン。責任感とか無いのだろうか。

「………本当に駄目な奴」

ルーナのナインに対する信用が底辺に達した！ 時給が400円に下がった！ 三食付きから二食付きに下がった！ 態度が素っ気ないから刺々しいになった！ ジト目が哀れみを帯びた！

しかし、そんな事を知らないナインはと言うと。

「さて、学食は無理だろうから、購買でなんか売ってないかな。最悪、自販機でも良いか」

と、手を擦りながら図書館を後にしていた。彼の財布には、食費として渡された五千円が入っていた。ちなみに、今日の分だとか。

「こりゃ楽な仕事だ」

自分の評価がとんでもなく酷くなっている事に気付かず、ナインは閑散とした校舎を見て回っていた。誰もいないと、何だかテンションが上がるのだった。

ルーナは調べ物をするため、学校の図書館に来ていた。

調べ物とは、この国で異常に発展した魔力を使った技術だった。

今ルーナが調べているのはスキルだった。

情報の削除しやすさを求めたのか、それは紙媒体でまとめられていた。

「スキルは……、中学二年生時に自分のスキルを考え、中学三年前までにその考えを元に脳のスペックと相談しながらプログラムする。なるほど、だから独創的なのか。あらかじめ脳のスペックを提示して、それに見合ったスキルを選ばせるあたし達の国のやり方とは全然違う」

本当なら魔導書なんかを読みたい所だが、生憎この図書館にはその類いの本が無かったため、ルーナはそれを読んだ訳だったが、それでも目的を十分に果たせそうだった。

ルーナの目的、それは??。

「……って、一体いつまでご飯食べてるのよ」

と、ルーナはサインが出て行っただけからもう二時間程度経っている事に気がついた。

いくら何でも遅いし、これではお金を払える仕事振りではない。

「……あたしもなんか食べに行こう」

時刻はちょうど昼だった。

ルーナは図書館のドアを開けようとして??、

「あれっ!？」

開かなかった。

ドアは押しても引いてもまるで動かない。いや、これは??、

「結界……いや、魔法!？」

ルーナは魔力を手に集め、図書館のドアに触れる。

瞬間、ルーナの魔力に反応し、紫色の魔法陣が浮かび上がった。

ドアには無数の複雑怪奇な魔法陣が重なられている。いや、よく見るとその魔法陣は図書館全体を覆うように展開されていた。

「これは『強制開閉魔法』に『呪縛魔法』……『魔法反射壁』を重ねてる!？ どのどいつよ、こんな王家の墓にでもするような魔法使ったの!」

『強制開閉魔法』により扉を封印並みに閉じ、『呪縛魔法』で扉を固定、『魔法反射壁』で魔法を効かなくしている。『呪縛魔法』と『強制開閉魔法』で物理を、『魔法反射壁』で魔力を完全にシャットダウンしていた。

閉じ込められていた。

「……けど、内側には『魔法反射壁』は効力を及ばない」
ルーナは魔力を指先に込め、六芒星を描く。描かれた六芒星は紫色の軌跡を残し、ルーナはそれに手を添えて、魔力をそれに籠める！
「はっ！」

刹那、ドアは掛けられた魔法ごと吹き飛ばされ、そして??。

黒嶺学園の制服を着た二人の人間が対峙しているのを見た。

「誰だ……って、ルーナか？」

制服を着た一人、ナインはサングラス越しにルーナを見るが、その目はもう一人に向けられてた。

その視線先にいるのは、取り立てて特徴の無い男だった。
その男とナインはおよそ五メートル程離れており、その間にルーナがいる形だった。

「あんた、何してんの？」

何がどうなってるのかさっぱり解らないルーナは、ナインと男を交互に見る。

そして、男が動いた。

取り出したのは、サブマシンガン。安全装置は外されており、指先が引き金にかかっている。

そして、躊躇無くルーナにそれを向け、引き金を引いた。

「あいつ？ ……いや、全然解んない！ 何がどうなってんの？
ああ、もう！」

頭を抱えて唸っているルーナにサインは言った。

「お前の予想以上に、こりゃ厄介な依頼だよ」

第三章 魔法使い・3（後書き）

異世界トリップものとか、現在更新停止中のもう一作とかも書きた
い。
どうしたものだろうか。

第三章 魔法使い・4

「とりあえず、ここをどうにかしないとな」

手榴弾によって焦げてしまった床と、ルーナによって吹き飛ばされたドアを見ながらナインが呟いた。

不審者を侵入させた学校側の責任と言えばそうだが、しかしドアに関しては適応外だろう。

「そうね。……ん」

相槌を打ち、指先に魔力を籠めるルーナ。ルーナは指先で六芒星を円で囲った、ペンタクルを空中に描き、それに魔力を籠める。

周囲を淡い蛍火のような輝きが満たし、次の瞬間には、何事も無かったかのようにドアと床は元通りになっていた。

『再生魔法』

物体の状態を一定時間前と同じ状態にする魔法。皆が使えれば、修理屋さんとか首になっちゃいそう。こういう魔法は使えない人が多いから、認められているのかもしれない。

「魔法ね。便利なこと、すばらしい??げほっ」

他人事のように呟いたナインの腹を突くルーナ。

「何言ってるの。あんたも魔法使えるんでしょ? それも、王家の墓にでも掛けるような、馬鹿みたいな魔法」

腹を抑えてルーナを見るナイン（どうやらお腹を触れられるのが

苦手のようだ」は、恨めしそうにぶつぶつと文句を言った。

「……というか、なんでいきなりドア吹っ飛ばすんだよ。聞き耳立てるよ。俺の苦勞が水の泡だろ。……あれ掛けるのに『日本の名水』三本消費したのに」

ちなみに、ナインのMPの回復は、基本的に水分である。

その回復量はかなりいい加減で、名水とか湧き水が1000mlで50回復、コーヒーやジュースなどが1000mlで20回復、青汁や栄養ドリンクが1000mlで100回復する。

どうやら、『RPG』のスキルを創ったプログラマーが、聖水とかエルフの飲み物などで回復させようと思ったみたいである。

勿論食事でも回復するが、それは大体、その時のMPの5パーセントだった。

HPと比べて、MPには厳しい制限がされていると言える。

「悪かったわね。でも、何にも言わないあんたも悪い！」

「あうっ」

ビシッとナインにチョップするルーナ。さすがにこの程度の攻撃に『RPG』を使う気はないみたいだった。

「……で、さっきの奴は何？」

逃げてしまった男を捜すように廊下を見るルーナだが、その男の姿はどこにも見当たらなかった。

「ん？ あれがお前を狙ってた奴じゃないのか？」

「知らないわよ。敵の素性をいちいち調べてたら切りがないもん」

拗ねるように言うルーナに、ナインは小言を言った。

「あゝ、それ止めといった方が良いでしょう。自分がなんで狙われてるか知らない、思いもよらない陰謀に巻き込まれたりするから」

「何？ あんたもそういう経験あるの？」

好奇心が見え隠れするルーナの視線を避けるナイン。

「いやいや、たまたま相手がどういう組織か見当ついたから。かなり厄介な組織だけど理由無く狙われる事なんてない、と言う事はその理由が無くなれば襲われないで済むだろう？」

「……まあ、そうね。努力はするわ」

それって、覚えていたらね、そのうちにね、みたいに真剣さが伝わらないよな。

と思ったナインだが、自分の忠告は対外聞き入れてもらえないと悟っていた。

というか、自分もそう言っただけで仕事をしていなかったのである。

「だから聞くが、お前、この国に喧嘩でも売ったのか？」

「はい？」

何を言ってるんだこの馬鹿、というような目で見られるが、それは気にしないナイン。

だが、どうしてだろう、既視感が……。

それを無視して、ナインは言った。

「さっきの奴は、政府特務機関ナンバーズの一人、通称『生者の蹂躞』、No. 6だ」

「まいったな、こりゃ」

そう言つて黒嶺学園から逃げるように走っていたのは、一人の男。ルーナを襲撃した男だった??男だ。

その服装は黒嶺学園の制服から白と黒を基調とした独特のコートに変わっており、その髪の色も普通の黒から銀色へと変わっていた。

「なんであいつがいんだよ。冗談じゃねえ。相性が一番悪い奴じゃねえか」

そこそこ大きな独り言だったが、幸い現在この学園には生徒はほとんどいなかったため、それが聞かれる事は無かった。

「確かにあいつが通ったことのある学校だが、過去の話だろ? なんで今、よりによつて標的の護衛なんてやってやがる」

男、No.6、ムクロは大きな溜息を付いた。

「いや、いるならいるで良いんだけどよ。幸い、あいつがいるなら最悪の条件は守れるな。が、どうやって任務をこなす? 俺の依頼は『二重螺旋』の殺害だろ? 殺せつて、そりゃ厳しくね?」

難問とぶつかったと頭を抱え込み、

「無理だわ。俺の能力あいつには効きにくいし、あいつとは仲良くしたいし。でも任務断れないし、どうすっかな」

そんな事を言っているムクロだったが。

その顔には、獰猛な笑みが浮かべられていた。

「せ、政府特務機関！？ はあ？ なんてあたしが国に狙われなきゃいけないのよ！ とうか、なんでそんな奴を知ってるの！？」
「そりゃ、俺が前いた組織だし」

さらつとんでもない機密情報を漏らすサインだったが、混乱しているルーナは気にも止めなかった。

「政府特務機関って、日本政府に狙われてるってこと？ 冗談じゃないわ！ あたしが何をしたって言うのよ！」

「だから言っただろ？ こうならないように、自分が誰になんて狙われてるか調べておいた方が良いつて」

「さっき言われたことでしょーが！ それまで気にもしてなかったのよ！？」

「あつ、悪い」

「謝るくらいならなんとかしてよ！」

かなり混乱してるな、とサインはニヤニヤ笑いながらルーナを見ていた。

他人の不幸は面白いのだろう。

それも、安心が保証された不幸なら、安心して面白がれる。

だから、

「なんとかするって、言ったらどうする？」

「え？ な、何？ なんて言った？」

ナインはニヤニヤ笑いながらルーナを見た。

ルーナは、その無責任にしか思えない台詞をもう一度尋ねる。

「だから、なんとか出来るかもしれない、と言ってる訳だ」

ナインはもう一度、笑みを消して至って真面目な顔でそれを口にした。

対してルーナは、

「馬鹿じゃないの？ あんた、自分が何言ってるのか解ってるの？ 国に喧嘩売るって意味よ？ それも魔力技術大国日本に。あたしだったら無理ね。この国のスキルは、魔法に匹敵するレベルの力を持つてるわ。いくらあんたが優秀な魔法使いでも、……無理よ」

ルーナは淡々と、真実を述べる。

魔法と呼ばれる力だって、所詮力だ。

限りはあるし、不可能だってある。

これは、その不可能な話だ。

少なくとも、ただの魔法使いには、何も出来る事は無い話だ。けれど、

「いや、なんとかなるね。真つ正面から国に喧嘩を売る訳じゃない。ただ、お前が狙われる理由が解れば、対処出来るさ」

自信満々にナインはそう言った。

勿論、その理由が解るまで襲われるのを知っていて尚、そう言っているのだった。

ただの駄目人間だと思っていたルーナは、思わず、ナインに聞いてしまった。

「……王家の墓にかけるような魔法を使って、爆発でも無傷。それで政府の組織にいた？ あんた、一体何者よ？ 有名な魔法使い？」

それに対して、ナインは答えた。

「俺は魔法を使えるけど、魔法使いじゃないな」

ナインは、さらつと答えた。

「時給五百円、三食付きで雇われた、お前の護衛だ」

第三章 魔法使い・4（後書き）

二日に一回更新したいと思っています。
相変わらず改行が安定しません。

指摘・感想などお待ちしております。

第三章 魔法使い・5

「とりあえず、あいつはしばらく襲ってこないと思う。これは、あいつの面倒くさがりの性格から言ってる事だから、あまりあてにならない情報だけだな。それと、あいつの能力は無差別極まり無い。だから、なるべく人のいない所にいたいんだが……」

「わかった。とりあえず、明日は黒嶺学園で試合があるみたいだから、調べ物は今度にして、探し物の方に行こうかな。……で、どこに連れ込もうって言うの？ ご・え・い・さ・ん？」

「……俺はお前を襲ったりしないぞ？」

「……………あつそ。（それはあたしに魅力が無いって言うてんの？）

」

「なんか言ったか？」

「何も」

放課後。

という会話から解るように、本格的に護衛を任されたナインは、最低でも寝ている時の絶対の安全を求め、とある場所にルーナを連れて行くつもりでいた。

元々寮生活でなくマンションに一人暮らしのルーナは、実に手早くそこを引き払った。その手際は手慣れているとしか言いようの無い物だったのが、彼女のこれまでの暮らしを表していた。

夕暮れ時の街を歩くナインとルーナ。ルーナの服や私物などが入ったボストンバックはナインが持っており、ルーナは小さなポーチだけを持っていた。

従者とお嬢様の関係に見えるが、本当は護衛と依頼人の関係の二人。

ナインはビルの間の暗い路地へと脚を進める。何も解らない異国の地であるため、ルーナはそれにすんなりと付いて行き、路地の奥へと二人は進んで行く。

「ここらでいいか」
「ん？」

不意にナインが立ち止まり、そしてルーナの手を握った。

「ちよつ、な、な、何？」

突然ナインに手を取られ狼狽するルーナ。
場所は路地の奥。人気は無い。
奇しくも、先ほど冗談で言った事が脳裏で再生されるルーナ。

「あんまり暴れるなよ。失敗したらどうするつもりなんだ」

微かに頬を染め、ばたばた暴れだすルーナを押さえつけ、顔を近づけるナイン。

遠くから見れば、恋人同士の馴れ合いに見えなくもない状況、目が回っているルーナ。

ナインは、その耳元で囁いた。

「（誰かにつけられているぞ）」
「っ！？」

ピクツとルーナの動きが止まり、先ほどまでのどこか抜けた表情

が一瞬で緊張したそれに変わる。体が硬くなり、自然とナインの手を強く握った。

それを見計らっていたナインは、人差し指を空へと向けた。

刹那、『転移魔法』により、二人の姿は消えた。

「なっ！」

路地の角から二人を尾行していた二人の人物が飛び出した。

二人をこっそりと付けていた二人、愛葉とリオは、目の前で消えた二人に驚き呆然と立ち尽くしていたりするのは、また別の話。

「なっ、何？ ……ここ」

ルーナの呟きは、常人のものだった。

最も、魔法使いのルーナがそんな事を呟くのだから、普通の人なら驚きで何も言えなかったかもしれない。いや、逆に魔法使いだったからここまで驚いたのかもしれないが。

ルーナの驚きは、『転移魔法』に対してだけ向けられた物ではない。い。

しかし、それに対して過剰に反応していた。

「て、『転移魔法』！？ ああ、一度行った事がある場所なら一瞬で移動出来るって魔法！？ これさえあれば大抵の移動手段は根絶するわよ！？」

「魔法なんてそんな物だろ？ 魔法は使い方を間違えれば、それこそ世界を狂わせるからな」

「お、教えて！」

未だに握られていた手をブンブンと振り、目を輝かせてナインにせがむルーナ。

子供っぽく、可愛らしい仕草だった。一部の人間ならどこかによるめてしまいそうだったが、

「断る」

手を振り払ってナインはそれを一刀両断した。実に可愛気の無い動作だった。

「うう、何でもするから」

「おいおい、何言ってるんだ。教えられるわけないだろ？ お前に教えたら、不法入国し放題になるだろ」

「じゃあっ！ 日本に永住するなら良い？」

なおも譲らないルーナ。新しい魔法を覚えたがるのは、天才魔法使いとしての性なのだろうか。

「却下。だいたい、これ、かなりリスク高いんだぞ？」

「……え？」

そんな話は聞いた事が無いルーナだったが、そもそもこの『転移魔法』自体、ただでさえ認められていない魔法の中でも、存在すらも否定されている部類の魔法なのだ。

そんな話の一つや二つ、あっても不自然ではない。

そして、ナインは神妙にそれを語った。

「建物の中で使えば、三途の川まで飛んでくぞ」

天井に頭をぶつけたナインの痛々しい体験談だった。

その後、しばし論戦が続いたが、その度にナインの痛い話が聞けるだけで、どうしても教えてくれないとルーナは諦めた。

ナインが頑なに教えるのを拒んだのは、只単純に教えられないからだったりするのだが。

「……ここ、どこ？」

ルーナは改めて周囲を見渡した。

壁で囲まれた広大な敷地に、夕焼けを映す決して小さくはない池、周囲を囲むように生い茂った樹木。そして、それらの中央にそびえ立つ古めかしい三階建ての洋館。

ルーナ達が立っているのは、門からその洋館の玄関へと向かう道の上。

様々な形の大理石が敷き詰められて形成された道である。

「……どこって、俺の今の家……かな？」

「……………」

呆れてルーナは物が言えなかった。

「言っておくが、この洋館はかなり強力な結界内にある。さっきの『転移魔法』でしか出入り出来ないから、外に用があるなら俺に言わないと出れないぞ」

「……確かに、解読不能なくらい魔法が掛けられてるわね」

ルーナはポーチから取り出した片眼鏡モノクルで周囲を見回す。
ルーナの魔力に反応し、片眼鏡の前に魔法陣が構築されていた。

「ここの敷地をドームみたいに覆うように、何重にも魔法が掛けられてる……。国会でも大統領官邸でもこんなに厳重な魔法かけられて無いわよ」

「そりゃ、そんな所より大事なもんが隠されてるからな」

とんでもない事を言うナインに、ルーナはもう溜息もつけなかった。

片眼鏡をしまい、項垂れるルーナ。

「……わかった。もうあんたがすごい奴だって色々わかった」

「いやいや、これは俺自身の所有物じゃないんだ。借りてるといなか、いらなからやると言われたと言うか」

「誰よ、こんな核シエルター並の洋館を軽々しく扱う奴は」

人喰いジョーズの亡霊さ、と心の中で答えて、声には出さないナイン。

「んー、出入りが『転移魔法』オンリーだから使い勝手悪いだろ？」

それはその通りかも、とルーナは納得する。

「おかげで中身はあんまり良くないんだが、安全性なら世界一かもしれないがな」

ナインは立ち話をしている間に置いたボストンバックを持ち上げ、玄関へと向かう。

洋館の玄関は、両開きのドア。呼び鈴の代わりにノッカーが二つ
ついている。

「おっと、ちょっと止まって」

ナインは玄関の前に立ち止まり、ルーナを足止めした。

「ん、何？　これだけ安全性を見せられたら質は求めないけど。元々研究所とかに引きこもる人間だし」

「それは多いに助かるんだが、そうじゃない」

ナインはドアを開け、ドアの向こうにボストンバックを置く。ルーナには偶々内部が見えなかったが、それは呼び止めた事と関係なかった。

「とりあえず、見せてもらうかな」

ナインの目つきが、まるで観察するようなものに代わり、ルーナをまじまじとみつめた。

「……………何？」

ナインの観察するような目に、全く恥じらいを見せないルーナ。こういった視線には慣れている、と言わんばかりだった。

「あゝ、気にしないでくれ」

と言うが、観察するような目を止めないナイン。
『ステータスアイ
算出眼』で見ているのである。

（ネーム、ミラ・ルーナ。クラス・黒嶺学園の生徒、魔法使い。特性、魔法感覚？ 魔法に対して敏感とか、魔法を覚えやすいとか、そんな感じか？ スキルは、無いのか。まあ、魔法使いだし。……ん？）

不意に、ナインの目の動きが止まった。

それがたまたまルーナの胸の位置だったのは、なんというか、両者に取って不幸な話である。

「……な、何よ」

「……………」

若干視線を泳がせるルーナ。凝視するナイン。そして。

唐突にナインは手を伸ばした。

「……………」

「ぎゃん！」

ルーナが無言で思い切りナインをビンタし、ナインはそれをモロに顔面で受け止めた。

「痛って……………」

「変態。何しようとしてんのよ、殺すわよ」

そういう割に、ルーナはキツと睨むだけで、あまり敏感に反応していないと言えた。

どこか、乙女の恥じらいを欠如しているような態度である。

「誤解だ！ 俺は決して如何わしい感情を抱いてない！」

「じゃあ何だつて言うのよ」

そう言われたナインは、学習しなかったのか、再びルーナの胸元へと手を伸ばす。

「……………」

と、しばしナインを見つめて、今度は何故か微かに頬を染め、そっぽを向くルーナ。

ルーナがもじもじとしているのに、クエスチョンマークが湧いて出るナイン。

「とりあえず、じっとしててくれ」

ナインはルーナの胸の前で手を止め、そして。

ナインの手から白い光が溢れ出し、ルーナの体を包み込んだ。

「……………これは？」

その白い光はすぐに消え去り、ナインは手を下ろした。

「ん。これでいいや。悪かったな、不快な思いさせちまったか？」

「別にもう気にしてないわよ。……………ただ、さっきのは？」

「……………まあなんと云うか、立ち話も何んだから入ろう」

はぐらかすように言ったナインに促され、ルーナはその洋館に脚を踏み入れた。

「おかえり、ナイン兄さん」「おかえりなさい、ナインさん」
「ただいま。二人とも、留守番ありがとな」

ナインはそう言って、自分を出迎えてくれた少女と少年の頭を撫でた。二人はえへへと顔を見合わせて笑い、洋館の奥へと走っていた。

「家族？」

ナインの後ろから二人を見ていたルーナがそう尋ねた。

「いやいや、違う。居候というか、知り合いというか、友達というか……、仲間かな？」
「？」

よく分からないといったルーナにスリッパを用意するナイン。

「俺の知り合いが助けた子供、というのが一番的確だな。んで、お前の依頼を受けてから、念のために来てもらったんだ」
「？」

複雑な顔をするルーナだが、元々あまり興味が無いのか、深く追求する事も無くスリッパに履き替えた。

「とりあえず、部屋に案内するか。無駄に広いから」

そう言つてナインは、目新しい物ばかりで色々と目移りしているルーナを客室へと案内した。

「掃除は二人に頼んでおいたから多分大丈夫だと思うけど、過度な期待はしないように」

「よほど酷くない限り文句は言わないわよ。研究熱心な魔法使いにはそれで十分」

生存フラグを立ててから部屋のドアを開けるナイン。

部屋は八畳一間で、絨毯が敷かれている。普通のベッドとタンスしかないものだが、ある意味建物の外見と一致していると言えた。二人もちゃんと掃除したのだらう。

「ふーん、まあ良いじゃない」

「そりゃ良かった。じゃ、他も案内しよう」

荷物を部屋に置き、ナインは洋館内を適度に案内する。

洋館の床はタイルで、その上にカーペットが敷かれている。一階には客間、食堂と風呂（何故か温泉が出る）。二階は十部屋もの部屋があり、そのほとんどが寝室、そしてリビングだった。ナインの個室は、十二畳の広い部屋だったが、内装はルーナの部屋と変わらなかった。リビングはテレビやらソファーなどがあり、ジューズ類などが入った冷蔵庫などもあった。

そして、三階には？？。

「すっごい」

目を輝かせるルーナがいた。

そこは、黒嶺学園の図書館と比べれば狭いが、所狭しと本棚がある部屋、図書室だった。

「あゝ、とりあえずここは明日にでも見てくれ。多分、色々聞きたい事があるだろうし」

なんとか誤摩化そうとするナインだが、それは少し遅い忠告だった。

「嘘！？これって……魔導書！」

部屋のドアを開けてすぐ、手近な所にあつた本を手に取り、驚くルーナ。

せめて、部屋に何かがあるのか説明するだけにして開けなければ良かったと、ナインは後悔した。

「何これ！どうなってるの!？」

「あゝ、だから明日にしような。説明も明日」

ナインは目を輝かせているルーナの襟首を掴み、引きずるように図書室から連れ出した。

「ナイン兄さんー！ご飯?！」

「ああ、今行く！」

タイミングよく少年の声がかかり、ナインは不貞腐れるルーナを引きずって食堂へと向かった。

「こら、ラギ、ナギ！ それは大事な物なの！」
「ここまでおいで」「きやははははは」

食事時にルーナと二人、ラギとナギは打ち解けていた。
十五歳のルーナに、十二歳のラギとナギ。はたから見れば姉と弟と妹、といったように見える微笑ましい光景だった。

「つ、疲れた。魔法使いに体力は無いのに……」
「その割に随分と楽しそうに見えたけど？」

風呂上がりリビングに来たルーナに、冷蔵庫からジュースを取り出して渡すナイン。ちなみに、そのジュースや夕食の食材は全てラギとナギが今日買って来たもので、ナインだけがいる時は、当然のように空っぽになっている。

ナインと違い、ラギとナギの方がお金持ちだったりする。

「……………まあ、ね」

少しだけ恥ずかしそうにルーナは頷いた。
湯上がりのためなのか、その頬も上気している。

ルーナの格好は淡い桃色のパジャマ。濡れた短めの髪をタオルでこしこし擦っていた。

この洋館にドライヤーなんてものはあるはずも無いのだった。
そもそも、あまり身だしなみに気をつけていないルーナには無用の長物かもしれないかった。

「あたしは一人っ子で、魔法使いだったから。……あんまり人と付き合う事なんてなかった。だから、こういうのは新鮮で、……楽しい」

「そりゃ良かった。あいつ等も友達とかいないから、仲良くしてやつてくれると助かる」

「……まあ、研究の邪魔にならない程度には、ね」
「ん。ありがとな」

大きな欠伸をして、目を擦りルーナは立ち上がった。

「じゃ、あたし寝る」

「おやすみ」

そしてルーナは部屋に戻り、ベッドに入った。

「………あれ？　なんか色々忘れてる気が……」

しかし、睡魔に耐えきれずルーナはすぐに眠りに落ちてしまった。不思議な事に、ここ最近寝苦しかった彼女にしてはあっさりと眠る事が出来たとか。

「……全く、これは厄介な事件だな。ナンバーズが動く理由が解らない。一度あいつとやり合わなきゃ駄目か。そうなると、二人にはルーナの護衛を頼みたいんだが、いいか？」

「任せてよ、ナイン兄さん。ナギと一緒になら、僕らに敵う奴らはいないから」

「ラギ、油断大敵。ルーナお姉ちゃんを守るんだから」

ナインは目を擦りながらも、しっかりと護衛を引き受けてくれた二人の頭を撫で、もう遅いから寝るように告げる。

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみ」「おやすみなさい」

そう言っ二人がリビングから出て行くのを見届けてから、ナインは呟いた。

「国に仇成す者を殲滅する、国のための犠牲者??それがナンバーズ
の存在。……ならば俺は、誰も犠牲にならないように戦うだけだ」

第三章 魔法使い・5（後書き）

この物語の核となる言葉が出ている章だったりします。

アドバイス・感想お待ちしております。

第三章 魔法使い・6

コンコン。

「おい、ルーナ。起きてるか？」

朝は七時、ナインはルーナのいる客室のドアをノックした。
一階ではラギとナギが朝食を作っており、そろそろ出来そうな頃
合いだった。

「ルーナ？」

「……………」

もう一度ノックしてみるが、返事は無い。

一瞬、最悪の展開が脳裏を過り、ナインはドアを開けた。

「ルーナ！？ 大丈夫？？」

「……………」

ナインの目に、ちょうど着替えているルーナの姿がぼつちり映つた。

ちょうど下着に手をかけた所で、ルーナの白い肌と下着のコントラストが艶かしい雰囲気を出していた。

「……………」

「……………」

二人の間に気まずい空気が流れ、嫌な沈黙が漂っていた。

そして、

ルーナは下着を下ろそうとした。

「いるなら返事くらいしろ！」

そう言っただけでドアを叩き付けるように閉めた。
意外と純情な少年だった。

「……………」

対して、ルーナは無表情で着替えを続けるのだった。
どうやら、寝起きは非常に弱いらしい。

「説明すると、ここは曰く付きの本？魔導書だな、それを集めた場所だ」

「きやはっ」

「……で、魔法がまだ認められてない、というか、魔法と呼ばれる力を使えるのがまだ魔法使いだけの現在、悪い魔法使いに力を与えないために、こっぴどく隠してる訳だ」

「すっごい！『異次元魔法』はこうするのか。んん、これならあたしにも出来るかも」

「……………ああ、もしもしルーナさん。俺の話聞いてます?」
「うん、聞いている聞いてる」

もう説明止めようかなと思うナインの前に、齧り付くように魔導書を読んでいるルーナがいた。

場所は、三階にある図書室。辺りは何百冊の魔導書で埋められており、そのほとんどが夜に一回つていない物ばかりだった。

研究者魂が燃え上がるシチュエーションだった。

「……………というのは俺の推測であって、真実は知らないんだけどな。借り物だから」

「そこはちゃんと知っておくべきでしょ!」

どうでもいい事にだけ相槌を打つルーナだった。ついでのようにナインの頭を叩いている。

叩かれた頭を擦りながらナインは話を続ける。

「それと、お前が狙われる理由は解らないけど、ここなら多分安全だと言っておこう。その間に、その理由とかを調べなきゃ駄目だな」
「そうね、うわっ! 意外と簡単に出来た! きゃっほー」

そんな会話の最中に、さっそく『異次元魔法』を習得しているルーナ。

さすがは天才魔法使いだろう。

しかしどこか、自分の身の安全は放っておいているように見えた。安心してゐる、もしくは信頼していると言えるのかもしれないが。

「なんか今のお前見てると、この一ヶ月ずっとここにいそつだな…」

「居ても良いの!?」

「居たいのかよ……。探し物はどうした、探し物」

「あつ、そっか」

「……忘れてたのかよ。自分の事だろ」

思い出したと言わんばかりに手を打つルーナに、ナインは呆れて溜息を吐いた。

「とりあえず、一度愛葉達に連絡取らないと駄目だから学校行って、そのついでに買い物に行こう」

「……買い物？　探し物って、買い物なのか？」

ナインが首を傾げ、ルーナは首を振った。

「違う違う。探し物はちょっと旅行しなきゃ駄目だから、買い出し」

どうやら、家に引きこもっているだけでは駄目らしかった。

ナインは、若干嫌な予感がした。

研究所内部は慌ただしくしていた。

「どうした」

白衣を着た恰幅のいい男が、プリントを読んでいる白衣の女性に尋ねた。

女性は俯き、重い口を開いた。

「……ナンバー3、5、8の死亡報告書が届きました」

男は拳を叩き付け、苦虫を噛み締めたように言った。

「くそっ！ これで全滅か。どうなっている、我々の計画は完全だったはずだ！」

「主任、落ち着いてください。まだナンバー9が残っています」

主任と呼ばれた男は、静まるように言った女性に怒鳴った。

「だが、奴の信号も昨日消えただろう！」

「ですから、落ち着いてください。ナンバー9だけは、死亡報告書が届いていません。恐らく、まだ生きているんでしょう」

途端、男は落ち着きを取り戻し、静かな口調で言った。

「……そうか。ならば、我々が直々に出向き、ナンバー9だけはなんとかしても回収する」

「はい。すぐに部下に準備するように言っておきます」

成果があがらなかった研究は取りつぶされてしまう。

九人の実験体の内、現在生き残っているのはたったの一人。それも信号が途絶している。

男が荒れるのも頷ける、と女性は思った。

「……いや、君は残れ」

「主任？」

不意に、主任はそんな事を言った。

「どうにも嫌な予感がする。まるで誘われているような、誘き寄せられているような、そんな気がする」

フラグだった。

「気のせいでしょう。我々の生み出した『二重螺旋』はスキルでないので、バレル事はありません。たまたまでしょう」

「……そうだと良いのだが、あまりにも 出来過ぎではないか？」
「それらば、腹をくくるだけでしょう。どちらに進んでも同じでしょう」

「そうだな」

「お気をつけて、主任」

主任は気付かない。

女性が、自らが生み出した『二重螺旋』に絶対の自信を持っている事に。

そして、『二重螺旋』の存在が絶対にバレル事は無いと確信していた事に。

理論だけは完璧な根拠に、何の疑いも抱かず。
現実の結果は失敗だらけだというのに。

このとき、もしも主任がその事に気がつけば。
あるいは、この実験場所にそこを選ばなければ。

物語の結末は、大きく変わっただろう。

「んで、あんたのその格好は何？」

「だから、変装。今日は黒嶺学園で試合あるだろ？　そこで会長の朝井に会ってことは、もしかすると、もしかするかもしれないかな」

「？」

怪訝そうに顔を傾げるルーナは、黒嶺学園の制服にポーチといった装い。対してナインは、同じく黒嶺学園の学ランにサングラス。

「買い物って、俺は従者じゃないんだから当てにするなよ？」

「大丈夫。試してみたい事があるから」

何やら意味ありげな笑みを浮かべるルーナに、何とも言えない曖昧な顔をするナイン。

ラギとナギは今日もお留守番。

無駄に恭しくルーナの手を取り、ナインは『転移魔法』を使った。

「そう言えば、ラギとナギはどうやって外に出るの？」

『転移魔法』で黒嶺学園から五百メートル程の所にある公園の木陰に移動した後、ルーナは疑問に思った。

「ん？　ああ、あいつらなら『転移魔法』を使わなくても自由に入り出来るから問題ない」

「いや、そっちの方が問題あるって。あの結界、少なくともあたしには手が出せないわ」

相変わらずナインはとんでもない事をさらっと言っていた。
聞き手としては驚くべき部分なのだろうが、この二日で慣れてし

まっているルーナは、呆れたように言うだけだった。

「そつだろうな。俺も『転移魔法』以外では出入り出来ないし。だからこそ、ああ言った仮説が立てられる訳だ」

魔導書を厳重に秘匿し、悪い魔法使いに力を与えない。

大統領官邸や国会など比でもない、もしかすると地球上で最も堅牢な建物かもしれない洋館なのだから、そのような仮説が立てられても不思議ではなかった。

「……その仮説についてなんだけど、あたしに魔導書読ませちゃっていいの？」

「問題ないな。もし悪事に使つなら、その時は俺がケジメをつけるだけだから」

本当になんの躊躇も無く、こういう事をいう男だった。
当然、それが気に障るのも頷ける事で。

「……ふん。あんた、この天才魔法少女ルーナ様に勝てると思ってるの？」

自分で天才魔法少女などと言うルーナ。高いプライドをお持ちのようだ。

しかし。

「勝てるな。少なくとも、あそこにある魔導書を全部読んだ程度では、俺に勝てないな。だから読んでも文句は言わない。ただし持ち出しは禁止するが」

それを一刀両断するサインも、結構プライドがあるのかもしれない

かった。

いや、生きるためには土下座をしかねない男に、そんな事は無いだろう。

だとすれば、それはただの現実なのだろうか。

「……へえ。そうやって言われるとちよっとショックかな」

「安心しろよ。見栄張っただけだからな」

項垂れたルーナに、ナインはニツと笑みを浮かべて付け足した。

「護衛の俺がお前より弱いと、俺の立場がないんでな」

第三章 魔法使い・6（後書き）

ストーリーが進むのは少し遅いかもかもしれません。

理由は、この章はやろうと思えば、一話で終わってしま……げふん
げふん。

はい、ストーリー展開の遅い章です。

感想・指摘お待ちしております。

第三章 魔法使い・7

「……で、やっぱり中入らないと駄目か？」

「何言ってるの。あんたは、ご・え・いでしょ」

「……はあ」

頭を垂れるナインを小突き、ルーナ達は黒嶺学園の門を潜った。
時刻は九時。

学園内は試合も近づいており、生徒が慌ただしく動き回っていた。

「右見て左見て……いないか。よし！」

何かに怯えるナインは、悪目立ちするサングラスの下でしきりに
目を動かす。

「……あんたがそこまで怯えるって、一体何者よ」

「いやいや、強さじゃないんだ。ただ、相性の話だ。苦手なんだよ」

そう言いながらさりげなくルーナの後ろに隠れるナイン。どこか
らどつ見ても、護衛しているようには見えなかった。

「えっと、とりあえずしばらくここに来る必要は無いから……手続
きに生徒会室かな」

ルーナは後ろのナインを気にせず進んで行く。ナインはナインで
それと気付かれないように、存在を極限に消して付いて行った。

「……えっ！？ これから一週間探し物を探しに行く？」

「そつ。だから、特別欠席扱いしてくれない？」

「……………」

「別にここに居てもやる事無いし、昨日の事件でどこにいても襲われるって解ったんだからさ。それに、愛葉の言った通り優秀な護衛が付いてるし」

「……………」わかったわ

愛葉はしぶしぶ頷き、何故かギスギスした視線を投げ掛けられるサイン。

場所は生徒会室。

試合の準備のため慌ただしく動く愛葉とリオがそこにはいた。

「……昨日は大変だったんじゃない？」

「ん？ そうでもなかったけど。少なくとも、お前に追っかけられてた時の方が大変だった」

意味ありげな質問を投げかける愛葉。しかしサインは気付かない。

「へえ……、そうなんだ。で、昨日二人はどこに行ったのかしら？」

「え？」「はい？」

何のことが解らないと言う感じに二人は顔を見合わせる。

二人は、昨日尾行していた人物が愛葉達だと知らなかったのだ。

「どこって言われても」

「図書館に居ただけ」

「……………」

二人の中が微妙に良くなっている事に何故かイライラしてしまう愛葉。

そうとは知らず、ルーナは爆弾を投下した。

「あつ、こいつの家に行った」

「はぁ！？」

愛葉がポカンと口を開け、ルーナは首を傾げ、ナインは背後に殺気を感じていた。

「……貴様、何をやっている？」

ナインの背後に居たりオが、ポンと肩を叩いた。

「別に俺はナニモシテイナイヨ？」

では何故片言になる、などとは誰も言わなかった。
ナインの頭の中では、今朝のルーナの着替えのシーンが再生されていた。

愛葉とリオの頭の中では、何やらあらぬ妄想が渦巻いていた。
ルーナはさつさと魔導書を読み漁りたいと思っていた。

「一回人生やり直してこいつ！！」

ナインは『RPG』を発動する暇も無く、生徒会室から吹っ飛ばされる。

吹っ飛ばされたナインに駆け寄るルーナの行為が、火に油を注いだのは別の話。

（こいつがいなきゃあの洋館に入れない！）

という打算塗れの行動だったのが、ナインに取って不幸な話だった。

た。

「いってて。スキルの切れが無駄に良かったな」

「それで護衛が務まるの？」

校舎から出て、グラウンドの横を通り門へ向かう二人。グラウンドでは試合の準備だろう、七メートル程の柱が立てられていた。境界を張るための柱だ。

廊下の後頭部を叩き付けられたナインは、痛そうに頭を擦っていた。

それを呆れた表情で見るルーナ。自分が事の原因だと気付いていなかった。

「あゝ、なんだ。無駄にHPは消費しなくなっただな」

「HP？」

首を傾げるルーナに、説明する気はないと言わんばかりにナインは先を歩く。

一刻も早くここを出てしまいたいナイン。心底会いたくない人物が居るようだ。

が、それを妨げるように。

「危ない！」

グラウンドの方から叫び声が聞こえた。

「あ？」「ん？」

二人がそちらを見ると、

直径三メートル程の火球が二人に迫っていた。
その距離、十メートル弱。

「あゝ、何コレ？ デモンストレーション？ デーモンストリートの間違いじゃね？」

「どうでもいいから。護衛、仕事しなさい」

ルーナに背中を押され、ナインはその火球とルーナの間に入った。火球は大きさが大きなため、ゆったりと近づいて来ているように見える。しかし、それは逆に言えば、当たればただでは済まないと言いたげだった。そして、火球の周囲が歪んで見える事から、その攻撃範囲の広さを物語っていた。

「あゝ、跳ね返したら駄目だよな」

一瞬、『魔法反射壁』を発動して事なきを得ようとしたが、それだとの火球を放った人物にコレが跳ね返ると気付き、ナインは別の魔法を発動した。そしてナインは火球に向けて手を伸ばす。

ナインに火球の攻撃範囲が被った瞬間、火球は霧散するように跡形も無く消滅した。

『魔力無効化魔法』

魔力による攻撃を一度だけ無効化する魔法。その攻撃が大きからうが小さからうが、一度で消えてしまう欠点を持つ。何でも打ち消

す、そのために消費MPが馬鹿にならない。普通の補助魔法三回分のMPを消費してしまうのだ。他人を気遣うナインだから必要な魔法で、『魔法反射壁』を覚えていれば無用の長物だろう。

ナインは火球が完全に消えたのを確認して、ルーナの元へ戻ってきた。

当然、火傷一つない。

「さ、目立たない内に出るぞ」

「……十分目立つちゃってるけど？」

ルーナの言葉に嘘は無く、グラウンドでは歓声が起こっていた。ただの事故だったのだが、これで本当にデモンストレーションになってしまった訳だ。

「あゝ、まずいな。嫌な予感がする。……悪いなルーナ」

と、ナインは唐突にルーナの手を掴み、次の瞬間には『瞬間移動魔法』で飛んでいた。

歓声に沸いていたグラウンドが、一瞬で沈黙に包まれた。

しかし次の瞬間には、再びざわめきが起こった。

「さっきのあいつは誰だ？」「黒嶺学園の制服を着てたが、あんなのが黒嶺学園に居るのか!？」「あれ？でも消えちゃったってことは、……どういう事？」等々、色々とは話は盛り上がっていた。

ナインに取って不幸な話だが、この話が黒嶺学園中に広がり、会いたくなかった人物の耳にもしっかりと入ってしまったのは、仕方が無い話だった。

「……うっわ」

ルーナとの買い物に付き合わされたナインの呟きだった。

二人が買い物に来たのは、デパート。

先ほどからルーナは怖くなるくらいに買い物をし続けている。

保存食と呼ばれる食料品、全く統一性のないお菓子の数々、ミネラルウォーターを大量に購入。それに登山用のリュック、スケッチブック、包帯から傷薬、電池と懐中電灯などなど。

「……山登りでもするか？」

「するかもね」

その大量の荷物を持ったナインは、呆れたように呟き、何故か家具売り場の方へと進んで行くルーナ。

そして。

「えっと、アレを三つとコレ、それにコレも買おう」

「……………」

ルーナが店員に頼んだのは、天蓋付きのベッド三点、種類の違う柔らかい毛布を二つ。

店員は恭しく礼をし、会計と商品の在庫を確かめるために飛んで行った。

「おいルーナ、どうやって持って帰る気だよ？ さすがに俺にもコ

レは無理だけど」

「だから、試したい事があるって言ったでしょ？」

店員が戻って来て、交渉して、クッションを二つプラスして買うことで、五万円弱安くしてもらうルーナ。そしてポンと現金でそれらを購入するその様は、ナインには恐ろしいものだった。

「では、こちらはどこに？」

若干涙目になりながら、ベッドなどを運んで来た店員。

普通なら送り届ける所だが、何故かルーナはここに運ぶように言ったのだった。

ルーナは、それらを囲むように魔法陣を展開、そして。

魔法陣から黒い光が溢れ出し、買った品を飲み込んだ。

魔法陣が消滅し、無駄にスペースの空いたベッド売り場になっていた。

『異次元魔法』

異次元を作り出す魔法。時間と奥行き、広さなどが自由な空間を生み出す魔法だろう。RPGなどにある、やたらと物が入る道具袋の正体。

「よし、成功成功。それじゃ護衛、帰る」

「……了解」

呆然とした店員を残し、颯爽と去って行く二人。

後に、この買い物がデパートの伝説として語り継がれる事を、二人は知らなかった。

昼をちよつと過ぎた頃に洋館に戻った二人をラギとナギが出迎え、少し遅めの昼食を取り、ルーナは図書室に籠り本を読みふけり、ラギとナギは買い物に出かけて行つた。

ナインも図書室に同席してはいたが、何か深く考えていた。

（魔法使いが狙われる理由は多々あるが、この国がルーナを殺そうとしている理由は、魔法使いだからなどでは無いだろうな。となると??）

「ルーナ。ちよつと良いか？」

「なに？」

本から目を逸らさずに返事をするルーナに、危機感無いと思うナイン。

「お前さ、最近体調が悪かったとかあるか？」

「……んん、そういうのは無いけど？ どうして？」

「……なら良いんだけど」

当てが外れたな、とナインは思い、再び考えようとして。

「ちよつとこれ見て！」

不意にルーナがナインの背後に現れ、肩越しから地図を見せて来た。

当然、ルーナの体が密着して、顔が近くにあり、若干ナインは焦っていたが、ルーナは気付かずに嬉々として語る。

「探し物見つかった！」

「……はい？」

ルーナが持っていた地図に記されている場所は、どこかの山奥。
その山奥の洞窟マークの所に、星印。
そして、下に注釈として書かれている文字は。

魔石。

「あゝ、探し物って、魔石？」

「そう！ はるばる日本まで来た甲斐があつたあ！！」

「その前にお前、自分が狙われてるってことに気付こう。これ、ど
うみても山だろ。遭難に見せかけて殺されても文句言えないぞ」

「あんたが守ってくれるんでしょ？」

「……………」

何も言い返せないナインだった。

第三章 魔法使い・7（後書き）

ストーリーの進み方が遅いのは、第四章以降が一気にシリアスになる予定のためです。

感想お待ちしております。

第三章 魔法使い・8

コンコン。

「おい、ルーナ？ 起きてるか？」

「……………」

昨日と同様、なかなか起きてこないルーナを起こしに来たナイン。昨日と同様、返事は返ってこなかった。

「……………。開けるぞ」

「……………」

少し躊躇したがドアを少しだけ開け、ナインは中を覗き込んだ。そして。

天蓋付きのベッドの上で、ふかふかの毛布に包まれて寝ているルーナを見つけた。

なんというか、リスみたいだった。

「………… 文句は言わないけど、不満はあったのか」

「すーすー」

可愛らしい寝顔のルーナを起こすのは、かなり気が引けるナインだった。

しかし、今日は魔石探しをする予定。

本当にあるのかどうかはさておき、とりあえず山登りの日なのだ。

起こせとは言われていないが、しかし起こさなければ怒られる気もするナインだった。

「……え〜と、起きろよルーナ」

ルーナを揺らすナインだが、ナインはその時気付かなかった。

「ん……」

目を擦りながら起きたルーナ。そしてナインは見てしまった。

毛布がずり落ち、やっぱり下着姿のルーナが眠そうに目を擦っていた。

ルーナの艶かしい白い肌が露になっている。恥じらいも無く隠す気も無く、少女の肢体がありのまま、そこにはあった。

ベッドに両膝をついて眠そうに目を擦っている、下着姿の少女。ナインの何かがどうにかなくなってしまいそうな、扇情的な光景だった。

「……………」

そして寝ぼけたまま脱ぎだそうとするルーナ。

「っー!!」

ナインは逃げ出すように部屋を飛び出した。

ルーナに取って幸か不幸か、彼女は寝起きの記憶が無くなる程、寝起きに弱かった。

「くっそ、だから言ったんだよ！ 山なんて襲撃者に取っちゃ格好の場だろう！」

「しょうがないでしょ！ なんてあたしが襲撃者相手に遠慮しなきゃいけないのよ！」

二人は山の中を走っていた。

背後からは複数、それも何十人もの足音が聞こえていた。
時たま、雷撃が飛んで来ていた。

「あゝ、これって捕獲しに来ましたよゝって感じだな。殺傷能力が無いし。これ、まるつきり別の組織に狙われてんじゃん。……ルーナ、お前何したよ？」

「知らないわよ。……でも、あれはこの国の能力者じゃないわね」
「ま、そうだろうな。単純な雷撃飛ばすなんて、この国じゃあり得ないな」

飛んでくる雷撃を『魔法反射壁』で返しながら、ナイン達は道なき道を駆け抜ける。

魔力を放った者から、自分の放った攻撃で脱落して行く。

だが、元々殺傷能力の無い攻撃のため、減ったと思えばまた戻って来るのだ。

「どうする？ とりあえず、魔力放つ奴には制裁加えているけど」
「無視無視！ さっさと洞窟入って立て籠る！」

ずんずんと進んで行くルーナを見て、本当にこいつは体力無いの

か？ とナインは思ってしまった。これも研究者魂のおかげなのだろうか？

「あつた！ 多分アレ！」

「…… 本当かよ」

不意に視界が開け、目の前に洞窟が見えた。どうにも人工的に造られた感じのする洞窟だった。

「んじゃ、襲撃者さんにはここで待っててもらいますか！」

洞窟に駆け込むルーナ。ナインもそれに続き、振り返り様に魔法を発動。

途端、洞窟の入り口を黄色の魔法陣が覆い尽くした。

『呪縛魔法』

その魔法陣内の物体は移動が出来なくなる魔法。ただし、魔法や攻撃（銃撃、投擲など）は出来る欠点あり。効果時間も短く、単なる足止め魔法だ。しかしナインは、それを何十も重ね、最低でも洞窟内に入るには三十分以上は有するようにしていたが。

勿論、それでMPは酷い事になっていたが。

魔法と攻撃が通らないように、さらにナインは『魔法反射壁』と『磁力魔法』を放ち、襲撃者の銃器の攻撃を引き寄せ無効化させた。これにより、襲撃者達は最低でも三十分は何も出来なくなる。代わりに、ナインのMPはゼロになったが。

「あゝ、名水名水っ」と

ナインは一段落付いたとの事で、ミネラルウォーターを飲む。500mlの内200ml程飲む。

MPが100回復した。

名水さえあれば、MPも以外と簡単に回復する物だった。

「もうわよ」

と、そこで水を奪われ、残りを全部飲み干すルーナ。躊躇無く水を飲むルーナは、汗だくである。

ルーナの頬を雫が伝い、それをナインは拭ってやる。

少し照れくさそうに（それでも頬を染めたりはしない）、でも嫌がる素振りを見せないルーナ。

「つ、疲れた」

「お疲れさん」

「……なんであんたは涼しそうな顔してんの」

「生憎、俺は疲れ知らずなんだな」

ルーナの言った通り、ナインは汗一つかいていない。疲労も見られない。

これも『RPG』の補助効果の一つで、肉体的疲労を感じないという、これまた便利な機能である。

「さて、三十分は奴らは動けないからな、その間に魔石探しといきますか」

「……なんでそんなに元気なのよ」

『RPG』のスキルを知らないルーナには、ナインが恨めしく見えてならなかった。

「『呪縛魔法』だと！？ おまけに『魔法反射壁』……。やむを得ん、ここで待ち伏せするぞ」

主任と呼ばれた男はそう言い、部隊に休憩をするように呼びかけた。

主任は『二重螺旋』の残された実験体、ナンバー9の回収に部隊を引き連れて来ていた。

捕獲を取り扱うエキスパート集団だったのだが、まさかこんな事になるとは思っても見なかった。

脱落者こそ出していないが、それでも何名かが負傷していた。三十分間は動けないが、逆に言えば三十分は休めるのだ。

「よー。随分と勝手にやってんな、『二重螺旋』の開発者さん」

「！？」

しかしそれは、一人の少年の声によって妨げられた。

少年は白と黒のコートに銀髪と言う姿で、気配を感じさせる事無く突然上空から現れた。

少年、ムクロはへらへらと笑みを浮かべ、主任に笑いかける。

「まさかこんなに簡単に誘き寄せられるとは思ってなかったぜ？」

「お前……何者だ？」

「ん？ 知りたい？ そうだな、今は、そうだな」

ムクロは少し考え、そうしている間に周りを主任達を取り囲み、銃器を構えた。

そして、ポンと手を打ち、ムクロは笑って答えた。

「お前達の死神、って所か？」

「？？撃て！」

ムクロがそう言い終わるか終わらないか、主任は部隊に発砲許可を出した。

銃声が山に木霊した。

「今、銃声がなかったか？」

「へ？ そんなのあいつらが無駄に発砲してるんじゃないの？」

「……………そうだな」

『照明魔法』で洞窟内を照らしながら、二人は進んでいた。

地図には洞窟の場所しか記されておらず、洞窟内部は手探りの状態だった。しかし、曲がり角こそあれど、分かれ道と言う物がほとんどない洞窟で、二人は特に迷う事無く前へ進んでいた。

滴り落ちてくる水滴が洞窟内に響き渡る。

「ルーナ、そう言えばなんで魔石なんて探してたんだ？ お前は魔法使いだろ。いや、そもそも魔法使いとそれ以外、俺はスキル保持者って呼んでるけど、何が違うんだ？」

「そりゃ、魔力を生身で扱えるか扱えないかでしょ？」

「だけど、スキルは魔力を扱うだろ？」

「魔法使いは体内の魔力？？魔法力と、空気中の魔力？？マナを扱えて、スキル保持者はマナしか扱えないの」

体内の魔力と空気中の魔力。それを魔法使いの間では、魔法力とマナと呼ぶ。

スキルはマナだけを消費するため、どれだけ使おうと使えなくなる事は無い。そのかわり、魔力の質が魔法と比べて低く、魔法の炎とスキルの炎では、魔法の炎の方が強い。

逆に魔法は魔法力だけ、もしくは魔法力とマナの両方を消費し、魔法力が切れれば使えなくなってしまう。その分、体内で練成された魔力であるため、少ない量で大きな力を生み出す。

「……それなら、もしかして魔石って」

「本来なら魔法使いにしか扱えない魔法力を、誰でも扱えるようにしてくれる物ね。……あたしは、それで魔法使いとそれ以外、なんて境界線を取り払いたいの」

「……人類皆平等、ってか？」

「バカにしてない？」

ジト目で睨むルーナに、ナインは曖昧な笑みを浮かべる。

「いや、驚いてるんだ。お前は……優しいな」

「なになに？ 惚れちゃったのかな？」

「そんなじゃないさ。ただ、困った事が有れば言ってくれよ。俺で良ければ尽力しよう」

「……………」

と、何故かルーナは黙ってまじまじとナインを見つめる。

「何だよ、珍獣を見るような目をして」

「……………」 やっぱり、あんたは面白い。あんた護衛に選んで正解だったかな」

「だろうな。そうじゃなきゃ、魔導書も読めず、魔石も見つけられなかっただろ？」

「そうだけど……………それって、あんたの功績じゃないでしょ」

「……………」

「……………」

「そう言えばさ、お前ってやけに日本語うまくないか？ 片言なんて全然喋らないし」

何となく思った、と言うよりも無言で歩くのが嫌なナインはルーナに尋ねる。

実際、その疑問はだいぶ前から思っていた物だった。

「日本人のハーフだからね」

「なるほど。どうりで日本語がうまく、日本人よりの顔立ちの訳か。スタイルの方は、まあ残念だったな」

「思った事が声に出てるわよ？」

ゲシッと蹴りを入れられ、ナインは痛そうにかがみ込んだ。
そして。

「ん？ ルーナ、これってもしかして……………」
「え？」

二人はそれを目にした。

主任の視界は朱に染まっていた。

一瞬だった。

発砲して、発砲した部下は、それで全員事切れた。

発砲、爆ぜる頭、倒れる体。

発砲しなかった部下も、ムクロに切り掛かり、そして??爆ぜた。何が起こったのか、主任には説明が出来なかった。

ただ、圧倒的な暴力で叩きのめされた事しか理解出来なかった。

主任は、立っている事も出来ず崩れ落ちた。

「何だよ、もう終わりか？　おいおい、『二重螺旋』なんて大層な物発明しとしてこの程度かよ？」

「……お前、なぜそれを」

「ああそっか、知らないと思ってたのか？」

ムクロはニヤニヤと笑みを浮かべ、主任の顔を持ち上げる。

憎々しげに睨んでくる主任を、嘲笑うムクロ。

「スキルではなく、特性でもない。そして、実験体は気付かない。

『二重螺旋』はそういう物だろ？　実に巧妙だ。多分、実験にこの国を選ばなければ成功しただろうな」

「……何？」

「相手が悪かったな。せいぜいあの世で後悔しな」

ムクロの能力が、主任を爆発させた。

辺りは血溜まり。骨肉が入り交じった、不快な光景が広がっている。

そこには、人と呼べる物は何一つ無い。

No. 6、ムクロ。

その能力は、二メートル以内の物体の力を自在に操る事。

銃弾は、その力の向きを変えられ、撃った者の頭を撃ち抜く。彼の能力範囲内に入った人間は、圧力、大気圧をゼロにされ爆ぜてしまふ。

そうして生まれる惨状が、彼を『生者の蹂躪』と呼ぶ原因となっている。

ぺろりと舌なめずりをし、ムクロは笑う。

「さて、No. ナイン。あとはお前だけだ」

「魔石……こんなに採れて良いの？」

「良いんじゃない？ 別に無くなるような物でもなかったし」

魔石は、洞窟そのものだった。

二人は落ちていた小石を拾い集め、呪縛魔法の切れる三十分になるうとしていたので、とりあえず帰る事にした。

一度来たのだから、『瞬間移動魔法』を使えばいつでも来れるのだ。

「でも、なんか……拍子抜け」

「何言っただ？ 洞窟から出たら、また襲われ??」

ナインは口を噤み、ルーナの前に立った。
それにルーナは首を傾げるが、前に立つナインがいつもと違うように見え、異常事態だと判断した。

「……ルーナ。目、閉じててくれないか？」

「襲わないのなら、別に良いけど」

「襲わないから」

「あっそう」

言葉だけの約束で簡単に目を閉じてしまうルーナに、一体俺はいつこんな信頼されたのだろう、とナインは思った。
悪戯したくなったが、しかし今はそんな状況ではない。

洞窟から、それは見えた。

《次はお前だ、N O・ナイン！！》

それは、人の血肉で描かれた文字。

人の命を弄んだような、一つの作品。

『生者の蹂躪』とは言えず、『死者の冒瀆』とも言えず、それはさながら。

ただの忠告としか言えなかった。

第三章 魔法使い・8（後書き）

やっぱりスランプ気味。

なんとなく、設定とか気にせずに書ける作品をもう一作書きたくなってくる。

これ以上増やしてどうすんだか……。

感想お待ちしております。

第三章 魔法使い・9

「嘘っ!？」

「……まあ、そうだよな」

夕食後。

ルーナは頭を抱え込み、ナインは苦笑いを浮かべた。場所は洋館内の図書室。二人の前にあるのは、魔石。

正確には、魔石と呼ばれていたもの。それは過去のお話。つまり……。

「なんでただの石ころになってるの!？」

「要するに、場所だった訳だな……」

どうやらあの洞窟だったから、魔石になっていたようである。

二人が洋館に持ち帰った石は、残念ながらただの石ころに変わってしまっていた。

「あ?もう! 無駄足だった!」

「だよな。まあ、世界に出回らない理由はこれだろ」

「うっ……」

「よしよし」

脚を抱え込んで頂垂れるルーナ、その頭を撫でてみたナイン。

「……………。がうつ!」

「痛っ!」

指を噛み付かれたナイン。自業自得である。

「何だよ！ 慰めたつもりだったんだぞ！」

「……………、あたしは疲れた！ 今日さっさと風呂入って寝る！」

「どうぞどうぞ。その方が俺も楽なんで」

ぶんぶんなんて擬音語が聞こえそうな足取りで、ルーナは図書室から出て行った。

ルーナの足音が一階へと向かうのを聞き、ナインは呟いた。

「……………時間がないな。結局、こうなるのか」

ルーナは洋館の池の周りを歩いていた。

お風呂に入ると言ったが、少し散歩がしたくなったのだ。

「……………はあ」

ルーナは、洞窟の前の惨状を思い出し溜息をついた。

血生臭い空気に『浄化魔法』をかけ、粉々になった肉と骨を『落盤魔法』と『土砂魔法』で埋め、ついでにそこら辺に生えていた名も知らぬ花を適当に添えて来た。

自分の所為ではないと解ってはいたが、どこか心苦しい所があった。

『よしよし』

と、何故か先ほどナインに頭を撫でられた感触が甦って来た。
ルーナの所為ではない、そう言わんばかりだった。

「……うつつ。何やってるんだろ、あたし」

なるべく顔に感情出さないようにしていたが、ほんのりと頬が熱くなっているのをルーナは感じていた。

「信用し過ぎ、なのかな。でも、護衛を信用しないのも変だし。あいつだって、別に悪い奴じゃないはずだし」

ナインも、ラギとナギも自分と何も隔てる事無く接してくれる。
魔法使いというだけで差別したり、どこか他人行儀な態度を取る事も無い。

愛葉やリ才達でも、留学生だからという事も有るだろうし、研究第一で付き合いが悪い事もあってここまで打ち解けてはいない。

（何も知らないのに、全てを受け止めてくれる。それが心地いい）

ここは温かい、そうルーナは思った。

ルーナは一人だった。

噴水の周りには、ルーナしか居ない。

今も一人な事には変わらないが、けれど昔の一人とは又違う。

同年代の子供達が外で遊ぶ中、独り家の中で魔法を覚えていたあの頃とは、違うのだと。

あの頃、心を占めていたのは冷たさ。自分と他の子を客観的に見つめた、冷めきった心。

今、心を占めているのは温かさ。弟妹みたいな二人に……よくわからないナインがいる。具体的な事は何も言えない、けれど伝わっ

てくる温かさ。物理的には離れていても、独りじゃないと思える。
一人と独りは、まるで違う。

（あたしも受け止めるべきなんだ。知りたい訳じゃない、ただ、気になるだけ）

ラギとナギの過去。

そして、本当によく解らないナインの事。

ルーナは何かを確かめるように頷く。
と。

空が一瞬だけ歪んだ。

「……これは、結界を誰かが通った？」

ルーナではどうしようもない結界だが、ナインは『転移魔法』で、
ラギとナギに至っては普通に突破出来る。

「……次は、あたしの番ってことか」

洞窟前の惨状が再び目の前を過ったが、ルーナは首を振ってそれを否定する。

「頼りになる護衛がいるから、……大丈夫」

ルーナは呟き、洋館の方へと駆け出した。
そして。

「???ッ!??」

不意にその動きをルーナは止めた。

それは、とても不自然な動作だった。

ルーナにも、それが何なのか解らない。

そして、何かがルーナを包み込んだ。

「ルーナ!」

「……………」

ルーナが首だけ振り返えると、ナインが走り寄って来る所だった。

「ルーナ、まずい。たぶんムクロ……、あいつが来た」

「……………」

ルーナは無言でナインを見つめる。

「俺はあいつを止める。だからルーナは、屋敷に入って???!??」

ナインは言葉を切り、ルーナへと近づけていた脚を逆に遠ざけた。
振り返ったルーナの手には、一本のナイフ。

それは見る人が見れば、魔法の力で創られた物だと解る一品。ナ

イフの周囲を風が巡っていた。

切れ味は、愛葉の使う風の刃と同等だろう。

「……ルーナ？」

ナインはルーナと、その手に握られたナイフを見る。
そして、ハツとなる。

「まさか……『二重螺旋』!？」

ナインは憎々しげにその名を呟いた。

『二重螺旋』

それはスキルでも特性でもなく、一つの呪いである。この呪いにかかった者は、それに気付く事無い。体調の異変など無く、軽い睡眠不足しか予兆は無いのだ。

そして、呪いは発病後、その者の人格を変える。
術者の指定した一つの行動を最優先事項とし、そのためには自らの身を滅ぼしても動く人形と成り果てる呪い。

『二重螺旋』は、その非人道的な効果からナンバーズに狙われた。
そして、ルーナも『二重螺旋』の被験者だった。
奇しくも、9番目の被験者だった。

「……結局、誰も救えなかったのか」

ナインは俯き、自重気味にそう呟いた。

「なら……最後は俺が辛くないよう、一撃でー」

だが、ルーナの一言で、ナインはその考えを捨てさせられた。

「ナインじゃ……無いんでしょ？」

ルーナは、笑みを浮かべてそう言った。

ナインの言葉が、止まった。

「何を言ってるんだルーナ！」

ナインは、ルーナをじっと見つめる。その姿は、まぎれも無くナインのものだ。

『二重螺旋』の影響で頭がおかしくなったのでは、とナインは思った。

「ナインじゃないんでしょ？」

だがルーナの視線は、疑いと言うよりは確信に満ちたものだった。ナインはルーナを見つめ、ルーナは笑みを浮かべてナインを見る。そして。

「……………、へえ。まさか俺の能力を見破る奴がいるなんてな」

不意にナインの体が変化した。

一瞬、ナインの体が分解し、刹那、一人の男の体へと再構築され

る。

黒髪は銀髪へ、制服はコートへ。

数字は、9から6へ。

「俺の名はムクロ。政府特務機関、ナンバーズの六番目だ。んで、お前、何者？ 俺の能力は『六変化』。声紋から指紋、微妙な仕草や癖、脳みそからつま先まで完全に変化しきる。勿論、スキルと特性もだ。さすがにDNAは無理だし、例外も有るがな。だが、よほど親しくない限り、俺の変化は見破れないんだが……な」

ムクロは惜しげも無く自分の能力を曝す。

ムクロにはもう一つ、近づくもの全ての力を操る能力『絶対力場』がある。

こと接近戦において、ムクロを倒す事は不可能に等しいのだ。

「……そう。その能力は完全になりきる。たった一週間の付き合いじゃ、絶対にバレない。第六感も働かないくらいに」

ルーナは淡々とムクロの『六変化』を賞賛する。

「そうだ。……って、もしかして」

ムクロは気付き、ルーナは笑みを浮かべた。

否。

「だがムクロ、例え完全になりきらずとも、お前だってルーナを知ってはいないだろ？」

『模写魔法』

対象の見た目及び一部ステータスを完全にコピーする魔法。声紋、指紋などは写す事が出来ない。親しくとも、対象と付き合いのある人間には簡単にバレてしまうような魔法。

だが、相手に付き合いなど無ければ、完全に騙せる魔法だ。

「ムクロ、悪いがここで諦めてもらっぞ」

ルーナを模写していたナインが、その魔法を解いた。

第三章 魔法使い・9（後書き）

若干予定外に忙しくなっていました。
更新ペースが落ちるかもしれません。ごめんなさい。

第三章 魔法使い・10

「ーッ！？」

ルーナの動きが止まったのは、『二重螺旋』の影響ではなく、ナインの『呪縛魔法』によるものだった。これから起こる戦闘に、ルーナを巻き込みたくなかったからだろう。

不意に何かが自分を包み込む感触があり、それがナインの何らかの魔法だとルーナは気付いた。

それが『模写魔法』の影響だと言う事を、ルーナは知らない。

『模写魔法』もまた、『瞬間移動魔法』や『脱出魔法』と同様に存在自体が認められていない種類の魔法だった。

一分程で呪縛は解け、ルーナは慎重にナインを探した。

そして、ルーナは聞く事になる。

洋館の正面で、ナインとムクロは対峙ーいや、会話していた。

「……『二重螺旋』、どうやら解いたみたいだな。それならお前と争う理由はねーよ。ったく、そんならさっさと言ってくれれば良いのよ」

「ニジュウラセン？」

「あ、知らなかったのか。あの嬢ちゃんに呪いかかってたろ？ お前の『算出眼』なら見えたはずだ。その呪いの名前。人格破壊の呪いだな」

「……なるほど。そんな大層な物なら、ナンバーズが出て来るのも納得出来る」

だが、とナインは険しい顔をしてムクロを睨みつけた。

「何故殺す必要があつた？」

ナインに睨まれ、ムクロは肩を竦める。

「呪いは人格破壊。発病してからじゃ自我も無く、ただ狂った人形となるんだ。それなら、さつさと殺した方が良いだろ。生憎俺にはお前のように魔法は使えないんでな」

「……………」

疑うように睨むナインに、戯けたようにムクロは答える。

「疑うなよ。『二重螺旋』は呪いの発病後、被験者の命よりも指定された行動を優先すんだ。生憎、今回の事件では水際での対処だった。嬢ちゃん以外の八人、それは某国から帰国・入国した人間だが、そいつらは全員既に発病後だった」

「……………」

「逆に考える。一人は救えたんだ。この非人道的な呪いからな」

ムクロは笑い、ナインは黙った。

「それじゃ、ナイン。俺の疑問に答えてくれよ。」

ムクロはナインを見据えて、それを問うた。

「お前は一体どうして護衛なんてやってんだ？ 記憶喪失の、人間嫌いのお前が」

ナイン、『自分を知らない少年』は答える。

「別に俺は人間嫌いじゃない。ただ……人間関係を築くのが苦手なだけだ」

ナインは俯き、自分の手を見つめる。

たった四年の記憶しか刻んでいない、その手を。

「……俺は自分がどの誰で一体何者なのか、その記憶が無い。研究所にいた四年前からしか記憶が無いんだからな。人との付き合い方も覚えていない。嫌われる事が怖いから、なるべく人と付き合わなかった。自分を嫌うのが嫌だから、自分とも向き合わなかった」

ナインはどこか遠くを見つめる。

それは、思い出せない過去、これから歩むだろう未来を見据えているようだった。

「それでも、俺は誰かを守りたいと思った。それがきつと、俺と言う人間なんだ」

ナインは拳を握る。何も解らずとも、ナインはこの手で何人も助けて来たのだ。

何も考えず、何にも縛られず、ナインは行動する。

「俺はただ、この心のままに行動しているだけだ。確かに人付き合いは勝手が分からなくて苦手だが、俺は苦手だからと言って、自分の心を曲げる事はしないんだよ」

ナインは自分の周りに居る人の事を考える。

「俺は確かに、リオの人を小馬鹿にした態度が苦手だ。愛葉のやたらと俺に絡んでくるのも苦手だ。ルーナの行動もよく分からなくて苦手だよ」

だけど、とナインは付け足した。

「俺は苦手や嫌いのままで終わらせたくないんだよ。出来るなら、好きになりたいんだ。特に、こんな俺でも頼ってくれる、必要としてくれる人なんかだったらな」

だから、とナインは自分を言葉で表す。

「たとえ全人類を敵に回しても、守りたいと思った人は守り通す。例え頼まれなかったとしても、俺は目の前で傷つく人を見て見ぬ振りには出来ない。苦手だ嫌いだなんて、その後の話だ」

ナインの台詞に、ムクロはくくくつと笑った。

「全人類を敵に回しても、たった一人の人間を守る？」

ムクロは、その考え方をこう形容した。

(それじゃまるで、××じゃねーかよ)

ムクロは笑みを浮かべて、ナインに忠告する。

「ナイン。お前が思っている程、世界は優しくねーよ」
「……………」

「今回の事件、『二重螺旋』で解つただろ？ この国の進みすぎた技術に、世界は懸念を抱いてんだ。侵略してくるんじゃないか、つてな。バカみたいな話だ。侵略されないために生み出した魔力で、逆に侵略するって考えてんだぜ？」

「技術提供でもすれば良いだろ」

「そうだな。だが、考えても見るよ。その技術で、逆にこの国が攻められたらどうする？ この国が持っている分には侵略なんかには使わねー技術だが、他の国はどうだ？ 土地が痩せていて、国家の転覆が見えている国だったら？ 異教徒殺害を承認している宗教国家はどうだ？」

「……………」

「別に俺は人を殺すのが好きじゃねーよ。悲しいくらいだ。だがな、平和を求めるには誰かが涙流さなきゃなんねーんだよ。それが俺達ナンバーズだ」

「それでも、俺は??？」

「??? ああ、いい。聞き飽きているよ、お前の言いたい事は」

ムクロは面倒そうに手を振ってナインの言葉を遮る。
そして、ふと思いついたように言った。

「……俺とお前は似ているようで、まるで似ていないよな。数字の6と9のように、逆さにすれば同じだが、その中身はまるで違う」
「当たり前だろ。お前の能力があれば、誰とでも同じになれる」

「そうじゃねえよ。俺が言ってるのは、中身、志の問題だ」

ムクロは親指で胸を指し、言葉を続ける。

「国民を守るためには犠牲を出すが、その犠牲は無駄にしない。それが俺達ナンバーズのやり方だ。それに対してお前は、犠牲を出さずに国民も守る、なんて抜かしやがる。似てるようで、まるで似ていないだろ。俺はそういう事を言ってるんだ」

（たとえ全人類を敵に回しても、こいつは誰も犠牲になんてしない
いや、させないような野郎だ。まったく、だから俺は??）

「自分でも詭弁だって解ってるさ」

そんなムクロの考えを遮るように、ナインは呟いた。
その言い方に、ムクロは腹が立った。

「あーそうだ！ 詭弁だな。戯れ言、絵空事だ。夢のまた夢、妄想
でしかねー」

ムクロは、胸に溜まっていた鬱憤を吐き出すように言葉を紡ぐ。

「誰もが笑いあえる世界？ 今じゃ駄目なのかよ？ この国の人間

が笑えれば、それでいいじゃないか。そうじゃない？ その影で誰かが死んだりするのは間違ってる？」

ナインの心中と、自身の思いをムクロはぶつけ合った。

「あーそうだな、だけどそれが世界の真理だろうが！ 犠牲無くしては何も得る事はできねーよ！ お前の言う事は夢でしかねー！ だから！！」

ムクロはそれを口にした。

「俺はそれを叶えてほしいんだよ。夢は叶えるためにあんだから」

「……………」

あっけらかんとしたナインをバカにするように、ムクロは悪戯小僧のような笑みを浮かべ、夜の闇の中に消えて行った。

「…………喰えない奴だ」

ナインは呆れたように溜息をついた。

「…………はあ。きいもちい」

暖かな湯気が満ちているお風呂。

疲労回復・火傷・切り傷に効くという効能の温泉が溢れ出る、檜の湯船に浸かりながらルーナは伸びをする。

「……記憶喪失、か」

ルーナは、ナインとムクロの会話から聞き取った言葉を呟いた。

「……聞いちゃったか」

ムクロが消え去ってしばらくした後、ルーナは隠れる事無くナインの元へと駆け寄った。

後ろめたさなど、微塵も無かった。

「記憶喪失……なの？」

「……んん、そうだな。って言っても、ルーナとは直接関係ないと思うけど。何？ 実は知り合いでした、みたいなの？」

「それは無い」

「だろうな」

もの悲しげに、どこか自嘲気味にナインは笑みを浮かべた。

「先に言っておくと、俺の記憶は何をしても思い出せないんだ。再生魔法だろうがなんだろうがな。だから、気遣いはしなくて結構」
「……そう。辛くはないの？」

ルーナはどうしてそんな言葉が口から出たのか解らなかった。ナ

インも少し驚いたようだった。

「もう慣れたさ。生まれ変わったと思えば良いだけの話だ。それに、俺は今の俺が嫌いじゃないし」

「そつ。あたしも、あんたのそういう所は嫌いじゃない」

「そういう所つて、どういう所だよ」

「……………褒めてやってるんだから、素直に喜べ！」

ビシッとナインの頭にチョップするルーナ。それは、明らかに照れ隠しだった。

「いてて。でも、ありがとうな。こんな俺でも頼ってくれて」

「バカ。あんたは自分を低く評価し過ぎ。あたしは??」

「ん？」

不意にルーナは言葉を切った。何を言うべきなのか解らなくなつたのだ。

「うつうつ！ お風呂入る！」

自分の言いたい事が解らなくなり、ルーナは洋館へと駆け出した。

「……………あたしは、なんて言いたかつたんだろ」

ルーナはぶくぶくと湯に沈みながら、小さく呟いた。

（あゝもう！ なんてあたしがあいつの事心配しなくちゃいけないのよ！ あたしはあいつの護衛じゃないっての）

ばしゃばしゃと湯船に荒波を作りながら、ルーナは思った。

（これも全部、あいつが変な事言うからだ……）

『俺は苦手や嫌いのままで終わらせたくないんだよ。出来るなら、好きになりたいんだ。特に、こんな俺でも頼ってくれる、必要としてくれる人なんかあったらな』

苦手だと言われた時に胸が痛んだ。でも、この台詞を聞いた時には胸が温かくなった。

一体自分は どうして しまった のだろう。

ルーナは頬の火照りが、暖かな湯の影響なのか、それとも、別の何かの影響なのか、解らなかった。

第三章 魔法使い・10（後書き）

次で第三章はおしまいです。

感想・指摘・意見などお待ちしております

第三章 魔法使い・11

コンコン。

「ルーナ、起きてるか？」

「……………」

無言の返事に苦笑いを浮かべるナイン。

ルーナがこの洋館に来てから、一週間が経とうとしていた。さすがにもう慣れたものである。

「んじゃ、先にご飯食べてるぞ」

「……………」

客のプライバシーを守るために防音設計になっている扉。そのため、起きているのかいないのか解らない。けれど起きているのだろ
うな、と経験則でナインは思っていた。

それは、当たっていた。

当たっていたけど、外れていた。

「え？」

「ん」

「いや、…………え？」

目の前に差し出された料理。ぽかんと口を開けたナイン。無表情
でじつと見つめながらそれを差し出すルーナ。

ちなみに彼女の格好は、裸にエプロン??ではなく、普通の格好
にエプロンだった。

斜めに頭に乗っているコック帽が、なんとも可愛らしいものだっ

た。

「……何？ ルーナが作ったの」
「ん」

コクコクと頷くルーナ。どこか小動物のような仕草であった。

「……俺に食べると？」
「ん」

朝は弱いルーナは、先ほどから『ん』としか言っていない。
それだけに、料理の味が心配された。

「……ゴクツ。い、いただきます」
「ん」
「いただきまーす」「いただきます」

普段はラギとナギが料理を作るのだが、今日はどうやらルーナが代わりにやると言ったらしく、二人はウキウキしてるように見えた。
ラギとナギに取って、ルーナは姉のような存在だ。

その姉が？？味はともかく？？料理を作ってくれるのだ。嬉しくないはずが無い。

味はともかく。

「……؟؟ツ！？」「」

ルーナの料理を口に入れた三人は、同じ反応をした。
結果から言えば、ナインが『浄化魔法』を使う事は無く、ちゃんと美味しい料理だった。その評価が理由で、しばらくの間同じ料理しか食卓に並ばなかったという余談もある。

どういった心境の変化か、ルーナが毎日料理を作るようになったことではあるが。

図書室で二人はそれぞれ本を読んでいた。

ルーナは魔導書で、ナインは文庫本だ。

魔石事件以来、二人は引きこもっていた。

「……あんたつてさ、自分が誰だか知りたくないの？」

「別に。もう知ってる？？というと語弊があるな。知っていると言うよりは、そう呼ばれていると言うか、そう言われている名ならあるんだ。確証はないし、俺には信じられないがな」

「へえ、良かったら教えてくれない？」

あくまで平生を装いながら、ルーナはそれを尋ねた。

「魔法使いなんてそんなに数は居ないし、今行方不明の魔法使いとなったらすぐ見つかるか」

本来、魔法使いは国によって厳しく管理されている。

当然と言えば当然、スキルで魔力を扱えると言った所で、魔法使いには及ばないのが普通だ。

魔法使いは一騎当千、と言っても過言ではないのだ。

ルーナが日本に入国出来たのも、『二重螺旋』の実験体になったのが理由である。

そうでなければ、只でさえ魔力に関する技術で一步先に行く日本に、魔法使いなど送りはしない。敵に塩を送るような物である。

「先に言っておくと、国で管理されている魔法使いの誰も行方不明

にはなっていない」

有名人ではない？ とクエスチョンマークを浮かべるルーナ。

（『瞬間移動魔法』なんて規格外の魔法を使えて、有名じゃないってどういう事？）

それに答えるように、ナインは言った。

「俺は?????だと言われている」

ナインのその台詞に、ルーナは固まった。

「よお××。任務は遂行したぜ？」

ムクロは笑みを浮かべ、目の前の仮面の男に語りかける。

その白と黒によって構成された仮面は、輝く希望と染まらない正義を意味する。

「そうか、ご苦労。後の事はワンオーに一任しておこう」

「りょーかい。特別手当でも出してくんねーか？」

「……数日ほど休暇を与えよう。その間に、愛すべき人と会った方がいい。これからは早く、争いの時代を迎えるだろうからな」

至極真面目にそんな事を言う仮面の人物に、くくくつとムクロは忍び笑いを浮かべる。

仮面の人物はどこまでも真面目に、ムクロに問う。

「ムクロ……。名無しの??? いや、《××の模造品》はどうしていた?」

「なんだ、気になってのか?」

「当たり前だろう? 奴は勇者。そして私は??? ××だ」

男が仮面の下で笑みを浮かべたような、そんな錯覚に捕われるムクロ。

「なぐに、いつも通りだ。相変わらず、犠牲も無しに誰かを救うなんて言ってたぜ?」

「……それでいい。奴がそれならば、問題ない」

「くくくつ。けれど、あいつはお前が思っているよりも、面白くないぞ?」

ムクロは笑みを浮かべ、その人物を見る。

「仮面の総理よ。秋山雪日あきやまゆきのひはどうなると思う?」

仮面の人物、現日本総理、秋山雪日は言った。

「何も変わりはない。政治家は犠牲だ。財産だろうとこの身だろうと、骨から血肉まで、それこそ涙であろうと朽ちるまで、この国のために使っただけだ」

秋山雪日。

侵略戦争で戦った、七人の魔法使いの一人。そして、現日本総理。いや、それは総理ではないのかもしれない。

選挙で選ばれてこそ居るが、政治に関してはほぼ全て彼の独裁となっているのが現状だ。

だが、それでもこの国は回っている。

『国民に認められた、選ばれた。それだけが私の財産です。私と言う人間は、認められなくなったその時から、もう存在しないのです。だから私は、この身が朽ちるまでこの国を良くして行きたいと思っています』

彼には財産と呼べる資金的物品が何一つ無い。

彼が総理を辞めたとすれば、彼は早速ホームレス生活を始めるだろう。

自分と言う存在を全て犠牲にして、彼はこの国の頂点に立っている。

汚職、内輪揉め、小学生の学級会ばりの国会、私腹を肥やすために働く政治家。

家も無く、金も無く、国政を一人で切り盛りし、侵略戦争の英雄。彼の支持が下がる事は無かった。

「私は無意味に仮面を被っている訳ではない。仮面は、象徴だ。君たちが求めているのは、私の顔か？ それとも、私の実力か？」
私はそう国民に問うた」

秋山雪日は、仮面の下で笑みを浮かべる。

「私の正体が何であれ、国民に支持されるのであれば問題は無い。そのための、仮面だ」

中身は、誰であろうと関係ない。

例え、『侵略戦争』で戦った秋山雪日で無くなっていたとしても、秋山雪日は誰か解らない。仮面の下は解らない。

例え、中の人間が入れ替わっていたとしても、良い国を創り続けていけば、それは秋山雪日なのだ。

第三章 魔法使い・11（後書き）

とりあえず、第三章は終わりです。

元々書きたかった事が少し、今後の伏線がかなり含まれています。ちなみに、後半部分で『あれ？ この小説ってこんな話だっけ？』みたいな事を思った方、ごめんなさい、こういう話です。

そして追い打ちをかけるようですが、この物語は基本なんでもありデス。

今後の展開で『どうしてこうなった！？』とか思うと思います。具体的には、次回の番外編で。

ちなみに、『こういう話を読みたい！』などの意見がある方は、番外編が終わる前にお願ひします。……あるとは思えないけど。

感想・意見・指摘お待ちしております。

第零章 例えば誰かの昔話

秋山雪日は思う。

この世界は腐っている、と。

秋山雪日は侵略戦争前、北海道知事であった。

仮面を被っていたが、それでも彼は当選した。

北海道の不況を止める、そういうマニフェストを掲げた彼は、付け足すようにこう言った。

「私が当選した暁には、私の私財を衣食住に困らない程度、十万円程残して、それ以外を全額寄付する事もマニフェストに付け足しておこう。私が当選しても良い結果を残せなかった時、再選挙後はその資金をどう使われても構わない。……最後に、私は国民に聞いた
い」

そう言った彼の後ろには、高々と積まれた札束が合った。そして、彼は言う。

『君たちが求めているのは、私の顔か？ それとも、私の実力か？』

侵略戦争後、魔力が満ちた世界の指導者となるため、彼は総理と会談をしていた。

「何かを得るためには何かを犠牲にしなければならない。それがこの世の摂理だ。何かを犠牲にしなければ何も得られない、そうだろう?。」

秋山雪日は仮面を被る。口元から上を全て覆い隠した白と黒の仮面。

国民を前に、彼は思う。

「……なつてやろうじゃないか、犠牲に。それでこの国が良くなるのなら」

犠牲なき幸福など、そんなものは存在しない。何かを失うから、手に入るのだ。

秋山雪日は、第九十九代内閣総理大臣佐藤大和と向かい合う。

それは首相官邸の、とある一部屋での会話。

「秋山君、君は本当にそう思っているのかい？ 君が犠牲になる必要がどこにあるのだい？ なぜ他人のためにそこまで尽くそうと思っう？」

「それが国を統べる人の言葉ですか？ 総理、あなたは一体なんの為に政治家をやっているのですか？」

「愚問だね、秋山君。総理も仕事の一つさ。仕事はなぜするのか分かってるのかい？ 自分の趣味を楽しむためには、どうしたところでお金が必要だ。そのお金を稼ぐためだよ。政治家なんて、そんなものだ」

「……では、あなたは自分の生活を守るために政治家をやっていると？ 所詮政治家もそこのサラリーマンと同じ一つの職業に過ぎない、そう言っているのですか？」

「当たり前だとも。それなら君は何だ、全ての人がやりたい、趣味

と同義の職業に付いていて、一生懸命熱心に仕事をやっていると思
っているのかい？ それは幻想だよ？」

「……まさか。そんなに今の世の中はうまく出来ていませんよ」

「そうだろう？ 政治家とか総理だとか、そんなのどうでも良いの
だよ。高い給料が出ればそれでいいのだ」

「ではもう一度お尋ねしましょう。あなたは、一体何のために政治
家をやっているのですか？」

「言っただろう、秋山君。私は私の生活のために、一つの職業とし
てこの仕事をしているのだよ。君だってそうだろう？」

「……やはり、な。犠牲なき政治に幸せを望む意味は無い」

秋山雪日は、ぽつりと呟いた。それは総理にも、誰にも聞こえな
かった。

秋山雪日は、総理の顔を見て言った。

「私は国民のためにやっているのだよ、大和総理」

「戯れ言だな。それなら秋山君、君は何かね。国民のためならなん
でもするというのかね、だから私財を投資してまで、ここまで這い
上がったと言うのかね？」

「そうです。私は私を犠牲にして、この国を良くしたいのですよ。
何かを犠牲にしなければ何も手に入りません。ですから、大和総理」

秋山雪日は、そして言った。

「あなたには、総理の座を降りてもらいます」

瞬間、佐藤大和は理解した。

秋山雪日が、何をここにしに来たのか。

「ちなみに総理、先ほどの会話は全て全国に流れておりますので。一体どちらに支持が集まるでしょうね？」

「???????！ 秋山君、君は言ったじゃないか！ 国民のためだと。私だって国民だ！ 私が私を助けて何が悪いと言うのだ！ 何が間違っていると言うのだ！」

「間違つてなどいませんよ。ただ、私には理解できないことです」

「国民に認められた。……それ以外に何を求めるのですか？」

「私は分からない。どうしてもあなた達は認められる、選ばれる価値に気付かないのか。なぜそう貪欲に、自らのためだけに生きるのか」

「?????」

「選ばれる価値の分からない者が治める国に、望む明日はありません。さようなら」

秋山雪日の時代がここから始まった。

「貴様が特殊体N.O.・ナインか。我が名はワンオー。N.O.・ワン、モデル名は『犬』だ。貴様にこの世界を教えてやろう」

そう言っ、ワンオーは俺を谷底に突き落とした。

「君がそうか、N.O.・ナインか。僕はイーグル。N.O.・ツー、モデル名は『鷹』だ。人は僕の事を『死者の冒流』と呼ぶ。君に正義はあるかい？」

そう言っ、イーグルは死体を踏みつけた。

「……私の名前はミーナ。N.O.・スリー。モデル名は『猫』です。あなたに常識を教えます」

そう言っ、ミーナは俺に常識を覚えてくれた。

「じゃはじゃは、N.O.・ナインね。うん、あたしはシャーク。N.O.・フォー、モデル名は『鰐』だぜ。この世界は地獄だぜ？」

そう言っ、シャークは俺に地獄を見せてくれた。

「九番目のお兄ちゃん、私はイツカです。N.O.・ファイブ、モデル名は『鬼』です。お兄ちゃんは優しいですか？」

そう言っ、イツカちゃんは俺をひねり上げた。

「ああん？ お前がそうかよ、N.O. ナインか。俺はムクロ、他人は俺を『生者の蹂躪』って呼ぶぜ。N.O. シックス、コード名は『六変化』だ。お前って、正義とか悪とか信じてるのか？」

そう言って、ムクロはざっくり人を殺していた。

「よっと、うにゃ、アンタがN.O. ナイン？ ウチはN.O. セブン、ナナミや。よろしくさん！ コード名は『最良調整』。なあ、ウチと良い事せえへん？」

そう言って、ナナミは俺を連れ回した。

「あなたがN.O. ナイン、ね。私はN.O. エイト、ヤガミと言う。コード名は『超能力』。実に負抜けた人間ですね、あなたは……いや、化物か」

そう言って、ヤガミは悪意と嫌みを俺にぶつけてきた。

ナンバーズは、正義を重んじる。

九人は九人がそれぞれの思う正義を貫いている。

そして、ナインの正義はある事件で碎かれ、組織から捨てられる事になった。

その裏に、『葉桜学園』の事件が関わりある事は、明確だった。

とある会談の後日談。

佐藤大和、元総理は秋山雪日の背中に話しかけた。

「秋山君、どうして私が君を選挙に出られるように計らったか分かるかね？」

「……どういう事ですか？」

去ろうとしていた秋山雪日はぴたりと動きを止めた。

「君は仮面で顔を隠し、秋山雪日と偽名を名乗っている。戸籍上、そんな人物は存在しない。さて、どうしてそんな君が選挙などに出られたのかね？」

「……私が裏に手を回したからですが？　あなただけではなく、色々」

「そうだな、秋山君。だから君は選挙に出られた。君は実に優秀だった。本当に北海道の不況を回復させた。それは越権行為ばかりだったのだが、私は黙っていた。しかし、私が否定してしまえばそれまでだったのだよ？　なぜ私は君を認めたか分かるかい？」

「……必要だったからでは？」

「そう、秋山君、君は必要だった。何がだと思う？」

大和総理はにやりと笑う。

「君は代替可能だということだよ、秋山君。秋山雪日という仮面さえ被っていれば、誰だって君に成り得る。秋山雪日という存在はまだ確定されていない。だから、君は誰でもないが、誰にでもなれるのだよ」

「……貴様！」

「仮面の入れ替わりトリック、君はそれを狙っていたんだろ？ 君がどうしてこんなことをしようと思ったのか知らないが、有効に利用させてもらおう」

大和総理は懷から何かを取り出した。

「ありがとう、秋山君。君の築いた信頼と力は、私が有効活用させてもらうよ」

何かが弾ける音が部屋に響き渡った。

「犬養、これを始末しておけ」

「はい、閣下」

犬養と呼ばれた男は、黒い齒をむき出し、口元を歪めた。

第零章 例えば誰かの昔話（後書き）

タイトルの通り、過去の話でした。

なんとなく、作者が書きたい事が見えてくるかもしれません。

そして、ごめんなさい。

作者の執筆方針は、書きたい物を書きたい時に書く。

と言う訳で、しばらく『例えば名無しの英雄譚』の方を執筆したい
と思います。

これは、タイトルから解る通り、この物語とリンクしております。
リンクしておりますが、それを読んだからと言って、何か変わると
現段階では思えません。

興味の有る方はぜひどうぞ、といった具合です。

感想・意見・指摘など、お待ちしております。

第三間四章 例えば誰かと少女の関係（前書き）

ヒロインは誰なんだろう。

第三間四章 例えば誰かと少女の関係

「……ルーナ。なんか用？」

「別に……」

「じゃあなんで俺の背に寄り掛かって本を読むんだ？」

「……別に。ただそこに背中があつたから」

「重くはないし、さして邪魔でもないけど、どけてくれませんか？」

「なして？」

「……いや、もういいよ」

図書室、二人は背中を合わせて本を読んでいた。

「ん、そうだ」

「何だ？ また魔石探すとか言うなよな？ もうこりこり」

と、ルーナは本から目をそらさずに言った。

「違う。……今日、休みでしょ？」

「ああ、日曜日だな。それで？」

「お休み、あげようと思って」

「休み？」

「護衛のお休み。今日は一日本読んでるから、好きな事していいよ。ここならよほどの事じゃないと襲われないし、ラギとナギとも遊べるし。……天才魔法使いだし。自分の身は自分で守れる」

「……そっか。んじゃ、ちょっくら出かけてくるかな」

自分で天才とか言うのはどうかと思う、とナインは心の中で突っ込んでみた。

そういう自分も、勇者だのなんだの言っていたりするから声には出さない。

「お小遣いあげる」

「……あ、ありがとう」

そう言って一万円をポンと渡すルーナ。
何故だか泣きたくなるナイン。

「お土産よろしく」

「はいはい。何でも良いだろ？」

「あんたが選んでくれた物なら、何でも良い」

「……ん？　じゃあ、行ってきます」

「……。いつてらっしゃい」

何かが気にかかったが、それが何なのか解らないナインだった。

「付き合ってください!」

「……………は?」

ナインはいろんな意味で驚いていた。

いつも通り人気の無い場所へ『転移魔法』を使い、公園に向かう。そして行きがけの駄賃にコーヒーを買い、今日は空いていたブランコに腰掛けコーヒーを飲んでいた時だ。

不意にそう声を掛けられ、振り返ると同時に誰かが腕に抱きついて来た。

そう言って自分の腕に絡み付いて来たのは、リオだった。

そう言ったりオの格好は、いつもと違った。

いつもの学ランの格好ではない。スカート、つまり普通の女子用の制服姿。

一言で言えば、女の子だった。

「……………あゝ、その髪どうしたんだ?　なんか長くなってる」

「ウィッグです」

「なして？」

「似合いませんか？」

そう言つて下からナインの目を覗き込むリオ。
じーっと、真っ直ぐ、大きな瞳で。

ちなみに、リオがナインの腕に絡み付いているので、二人は密着していた。

「いや、似合つてる。……うん、可愛い」

「それなら良いじゃないですか」

「……まあそれはいいけど。それより、付き合つてってどういう事？」

「……あ、そういう意味ではありませんよ。ただ、買い物に付き合つてほしいと言つ意味です」

「買い物？」

「ええ、買い物です」

そういつて含み笑いを浮かべるリオに、ただならぬ嫌な予感があるナイン。

だが、彼には断るだけの度胸が無かった。
ある意味抱きついていて女性を突き放す事は、彼には出来なかった。

「じゃあ行きましょう!」

リオは苦笑いを浮かべるナインの手を取り歩き出す。
そして、ナインは気付かなかった。

「ちょ、ちょっと! な、な、ななな……何アレ!? 誰!？」

遠くから自分を見ていた愛葉に、ナインは気付かなかった。

余談だが、このとき街の気温が一気に上がっていた。

「美味しいですね」

「うん、そうだね」

「あつ、アイスが付いてます。……えい」

リオはナインの頬に付いていたアイスを指で取り、それを舐める。

「……………」

ナインは苦笑いを浮かべるしかなかった。

買い物と言う事で、ショッピングモールへと来た二人。

しばらく買い物をし、荷物持ちのナインに気をつかったのか（といってもナインは疲れ知らずだで、買い物の荷物持ちとしてはかなり優秀で、ナインが今持っているのは服の入った紙袋のみだが）、二人はアイスを買ひ、近くのベンチで仲良く並んで食していた。

「……ただの買い物か？」

「いえ、違いますよ。……その、ルーナとはどうですか？」

「仲が悪い訳じゃないと思うけど、どうして？」

「いえ！ それなら別にそれで良いんですが……」

何か思ふ所が有るのか、リオは顔を口元に手を当てて考え込む。

「……ちよつと昔話をしましょう。私の、昔話」

リオはナインをじつと見つめながら、話し始めた。

「私って女の子っぽく無いじゃないですか。髪型も口調も意識しないと女の子に見えないでしょう？ 男の子っぽい格好をすれば、男の子にしか見えないでしょう？」

「……俺は一目で女の子だと解ったけど？」

「?? 話が先に進まないんで、そこは肯定してくれると助けるんですけど……」

「……ごめん」

「いえ……………嬉しいです」

「うん？　なんか言ったか？」

何も、とりおは首を横に振り、話を続ける。

「私が入学した時は、ちゃんと女の子の格好していたんですよ。その時の制服がコレですね」

そう言ってベンチから立ち上がり、くるりと回ってみせるりお。スカートが波を打ち、長い黒髪がたなびく。

「でも、入学初日に喧嘩を売られたんですよ。男みたいな女だな、って。で、喧嘩を買ったのは良いんですが、その当時の私は、スキルを上手く使えなくて……………」

りおは再びベンチに座り直した。

「そんな時でした。会長が、私を助けてくれたんです。会長のスキルの前では、誰もまともに動けません。それで、会長は『もう大丈夫よ』って優しく手を握ってくれました」

「……………」

「それから私は会長にスキルを認められて副会長になって、会長に変な虫が寄り付かないように男装したんです」

「なるほどね。それが、いつもの格好の訳？」

「そうですね。今は会長がいませんし、あなたは私が女の子だって知ってますから、この格好ですけどね」

「……なあ、その話からすると、もしかしてそのウィッグ付けてる理由って……」

ナインは若干引きつった笑みを浮かべ、リオは満面の笑みで答えた。

「勿論、あなたに変な虫が付かないようにですね」

はははは、とナインは笑い、不意に何かを思いついた。

「あつ、そう言えば……ルーナにも言ったから、言っても良いか。リオの過去も聞けたし、俺も俺の過去を話そう」

リオは首を傾げてナインを見て、ナインはどこ吹く風と言った感じで、遠くを見ながらこう言った。

「俺は四年前に記憶喪失になったんだ。んで、それ以前の記憶が無いんだよね。ナインだけに」

「……はい？」

何を突然言い出すんだ、とリオはナインを凝視したが、ナインは空を見ながら続ける。

「んで、どうにも俺は――らしいんだ」

リオが硬直したのは、言うまでもない。

「な、な、一体誰なのよ。あ、あんなにいちやついて……私、一体何を言ってるの？」

どうしてかナインとリオ（愛葉は気付いていない）を尾行していた愛葉は、ぶつぶつとそんな事を呟いていた。

今二人はベンチでアイスを食べていて、愛葉はそれを遠くから誰かを待っているような態度で見っていた。

「だいたい、あんな奴どうでもいいし、あいつが誰と付き合っている、関係ないし……。確かにカッコいい所もあるけど、基本的に駄目人間だし……」

もやもやとした何かが胸の辺りに溜まり、愛葉はムシヤクシヤしていた。

「ああ、もう！　　なんでか気になる！　　よし、ちょっと話を聞いちゃおう！」

黒嶺学園の規則で外出も制服となっているため、二人に近づけば

バレてしまう。

だが、『空全絶護』は伊達じゃない。

空気に干渉する全てを影響下に置くのが、『空全絶護』の能力。
声とて、例外ではない。

そして、愛葉は聞いた。

「俺は四年前に記憶喪失になったんだ。んで、それ以前の記憶が無
いんだよね。ナインだけに」

「はい？」

思わず、声が漏れてしまった。それで周りから奇異の目を向けら
れ恥ずかしく思うが、それどころではなかった。

次に聞こえて来た内容が、そんな事を吹っ飛ばした。

「んで、どうにも俺は秋山雪日あきやまゆきのひらしいんだ」

愛葉も硬直した。

「ただいまー」

「おかえり」「おかえりなさい」

ルーナとルーナにじゃれていたラギとナギがナインを出迎えた。

「お土産、ケーキ買って来た」

「やった!」「……ごくり」

ナインの持っている袋を見て、ラギとナギがハイタッチをし、ルーナは涎を飲み込んだ。

「とりあえず店にあるの全部買って来たけど、喧嘩するなよ」

「……お小遣い、どうしたの?」

ナインの金の汚さを知るルーナは、聞かずにいられなかった。

「いやいや、俺だけのために使うわけにはいかなかったからさ。ケーキに費やした」

「……はあ」

呆れたとルーナは頭に手を添える。

「つと、忘れる所だった」

そんなルーナを見て、ナインは思い出したように懷に手を入れ、小さな紙袋を出した。

「これ、お土産な」

「へ？」

それをルーナの白い手の上に置き、ナインは着替えるために階段を登り始める。

登りながら、ルーナの顔を見ずにナインは言う。

「俺にはセンスが無いからリオに手伝ってもらったけど、俺が納得して買った物だから。まあ、気に入らなかつたら捨ててくれて結構だ」

ナインが二階へ消えたのを見計らって、ルーナは紙袋を開けた。

中には、蛍火のような光を灯す宝石のペンダントが入っていた。

「……………」

ぎゅっとそれを握りしめ、ナインが消えた方を見るルーナが居た。

第三間四章 例えば誰かと少女の関係（後書き）

ヒロインが誰だか解らなくなった作者です。
目標だった十万語を達成出来ました。

とりあえず、週一更新したいです。

感想お待ちしております（特にヒロインに付いて）。

第四章 陰謀の果て（前書き）

予告です。

ある種ネタバレですので、そういうのが苦手な方はこの話は読まない方が良いでしょう。

第四章 陰謀の果て

「がはっ！」

ナインは倒れ、そこに追い打ちを駆けるように青年はその腹に蹴りを入れる。

ナインのHPが消え、その蹴りはナインを直撃している。

「所詮君は模造品でしかないのだよ！」

「はん！ 巫山戯てんのかてめー」

『不可視力』は黒ずくめを睨みつける。

「黙れ『失敗作品』。出来損ないに止められるとでも？」

『不可視力』は何も言わなかった。代わりに。

「俺達は『失敗作品』だが、出来損ないではない」

『幻想卸し』が不敵な笑みを浮かべて答えた。

「ミラ・ルーナ君。君はこちら側にいるべき人間だ。その模造品から離れなさい」

「悪いけど、あたしは誰の意見も受付ないの。自分の行動は自分の意志でやるわ」

「……ルーナ、逃げろ。こいつは……」

「大丈夫。あたしが守られてばかりなのは癪。それとも、天才魔法少女じゃあんたを守れないって言うつもり？」

瞬間、複雑怪奇な魔法陣が出現した。

「あたしはこれでも怒ってるの。大切な友達を傷つけられてね」

「バカな！ 何故効かない！」

魔力の螺旋が粉々に砕け散った。

「無駄よ。私達には、ありとあらゆる攻撃は効かない」

「僕たちは『最大最低』だから、誰にも勝てないけど負けない」

ラギとナギはにっこりと笑った。

「ミーナ。殲滅だ」

「……………解った」

No．スリー、ミーナは鎌を持ち、某国への侵攻を始める。

「……………ジョーズ？」

「奪われたのなら、奪い返せば良い。壊れたのなら、直せば良い。ただし、欠けた物はもう戻らない」

人喰いジョーズの亡霊は、鎌を創り出し、そこに立ちふさがった。「さつさと行け、ナイン。お前はまだやるべき事が有るだろう？」

「銃撃！？ これは、侵略か！」

「さすがは黒嶺学園の副会長だ。その自動防御は厄介だな。だが、傷つき悶える仲間を守りながら、いつまで戦えるかな？」

軍服に身を包んだ男達が、黒嶺学園の生徒を取り囲む。

倉崎リオは一步も引く事は無い。

「何よコレ……………」

朝井愛葉は目の前の惨状に驚いていた。

血肉が舞い、硝煙と錆びた鉄の匂いが鼻にこびりつく。

そして、日本上空を飛ぶステルスミサイルを彼女は感知していた。

そして、一人の少年がその日、消えた。

第四章 陰謀の果て（後書き）

すみません、しばらく更新出来ないと思います。

賞に応募する小説を執筆するためです。

合間を縫って更新するかもしれませんが、多分しないと思います。
四月くらいまでお休みかもです。

第零ト四章 過去と未来の交差

俺は誰も救えない。ただ、助けるだけだ。
自分を救う事が出来るのは、結局は自分だけ。
まだ、俺は俺自身を救えない。

「ナイン！」

「……ん？ ああ、優理か。どうした？」

もう二度と通る事は無いと思いながらナインが黒嶺学園の廊下を歩いていると、不意に呼び止められた。

赤い髪 of 少女、赤神優理が睨みつけるように立っていた。
肩までの赤い髪を揺らして、優理は怒鳴る。

「どうしたじゃないだろ！ 何やってんだ！」

長身で絶妙なプロポーションとは裏腹に、男勝りの言葉遣いだ。

「不正行為だ。だから停学。意外と軽い処罰で驚いてるよ」

「アホ。約束しただろ……俺と一緒に天下を取るって！」

「ありもしない約束を勝手に作るな。だいたい、天下ってなんだ。
お前一人で十分だろう？」
『戦国夢想』のお前一人でヴァルキュリア

「何言ってるんだ！ 俺一人じゃ無理に決まってる！ 子孫を残さずに太平の世は作れない！」

ナインは優理の言っている意味が分からず、小さく首を傾げる。

「俺じゃなくても、『糸離滅裂』^{オーバーキル}がいるだろ？ 不正行為するような奴と一緒に居る所を見られたら、赤神家としても困ると思うが？」
「……うつ」

「それに、俺はこの結果に満足している。もしも心配してそんな事を言っているんだったら、俺には無用の長物だ」

「だけど、これからどうすんだよ！ 学校停学になったって、お前戻って来る気ないだろ！」

「そうだ。俺は今の学校の方針が嫌いだからな」

ナインの言っている事は、とても勝手な事だ。気に喰わないから学校に来ないという、子供の我が儘だ。

優理の言っている事は、至極マトモだ。優秀な人材を手放す事は出来ない、そう語っている。

「行かせない！ お前をこんな所で失うわけにはいかない！ 停学期間が終わるまで監禁してでも学校に来させる！」

「俺はお前の物じゃない。迷惑にならないよう、勝手に生きさせてもらうだけさ。邪魔するなよ。……というか監禁って本気か？」

「『戦国夢想』に不可能は無い！ やってみせる！」

瞬間、廊下は赤色に包まれた。

『戦国夢想』

能力の効果範囲はおよそ二十メートル。その空間の魔力を自分専用にするスキル。

相手は魔力を使えないが、自分だけは使えるようになる無敵領域。

優理は空気中の魔力を圧縮し何十本もの刀を創り出し、自身の周

りに浮かばせる。

彼女の干渉を受けた魔力は、赤色を帯び、それで作られた刀も同様に赤い。

この空間内において、魔力は彼女の思いのままに象られる。

この空間内の全ては自由自在と言っても過言ではない。まさしく、無双。

『戦国夢想』は伊達じゃない。

「ナイン！ お前の手足を切断しても、止めてみせる！」

言ってる事は病んでいたが。

ナインは辛そうに優理を見て、聞こえないように呟いた。

「だから俺は、この学校が嫌いなんだ」

その言葉を合図に、何十本もの刃がナインに向けて放たれた。

「なっ……！？」

そして、刀は砕け散った。

ナインに触れた瞬間、その刃は砕け散っていた。

このとき二人は知らない事だが、HPは空気中の魔力で作られていなかった。

むしろ空気中の魔力が使われなかった分、HPがデフォルトで強力になっていたのだ。

本来ならば床に落ちたはずの刀が砕けたのはそのためだ。

圧縮された魔力で象られた刀は砕け散って尚、目に見える赤い結晶となっていた。

赤い結晶舞う中で、ナインは言う。

「けどな、俺はお前の事は嫌いじゃないんだよ!」

だから、ナインは叫ぶ。

「だからこれ以上、俺を嫌いにさせるな! 赤神優理!」

本当に砕け散ったのは、どちらの何だったのだろう。

「うつ……」

目の前に迫るのは、『曲線尾』。一定の距離を追尾するレーザーを生み出すスキル保持者。

『曲線尾』の目は血走り、仲間の復讐に燃えていた。都筑遥は泣きたくなっていた。

遥は元々争い事が苦手だった。

痛いのが嫌いだし、傷つける事も怖かった。

けれど、魔力に関しては凄く興味があった。そして、遥は珍しいスキルの持ち主でもあった。

そのスキルから黒嶺学園にスカウトされ、名門と援助の言葉に釣られて入学したのだった。

結果、実力の伴わない珍しいだけのスキル保持者であった遥は孤

立し、個人戦で追いつめられていた。運悪く、遙の入ったクラスは強者が多く、強者同士で徒党を組み弱者の遙は孤立したのだった。そして試験、一人ぼっちの遙は個人戦で、その強者によって虐げられた他クラスの八つ当たりを受けているのだった。

目の前に迫る『曲線尾』がまさにそうだった。

彼のクラスはチーム戦でこっぴどくやられ、復讐心に燃え上がっていた。

クラスの団結力を高めるためのチーム戦、それが別の所での団結力も生んでいた。要らない思いやりというか、仲間がやられて只で引き下がれるかみたいな話だ。

「くっそ、雑魚の分際でちよろちよろと動き回って！」

黒嶺学園の試験では、グラウンドの四隅に柱を置いて結界を張り、その内部に魔力を用いて簡単な住宅街や森、草原、岩場などを作り、そこで戦う事になる。

個人戦ではそれだと広すぎるので、柱を増やして何試合も同時進行させている。

そして遙の試合は森のフィールドとなっていた。変幻自在のレーザーを木に隠れながら必死になって避けていたのだが、体力の無い女子の遙は遂に追いつめられていた。

「せいぜいあの世でクラスメイトを恨むんだな！」

「ひっ……」

あの世って私、殺されるの？ 試験でしょどうしてそんな？？って凄く目が血走ってる！？ 本気だ〜！ 殺されるっ！！ どうしてこんな目に……。

『曲線尾』の指に粒子が集まり、拳程の大きさになる。

結界の外では息を飲む生徒、彼と同じく目が血走った生徒の歓声が遙には聞こえた気がした。

「けははははははっ！！　ここじゃあ誰も手え出せねえ！　クラスの誰もが俺の勇姿に歓声を上げてやがる！　けははははははっ！」

今の台詞で外のクラスメイトも正気に戻り、うわあとか声を漏らしているが、『曲線尾』は気付かない。遙もどん引きして顔が引きつっているが、それも気付かない。

『曲線尾』は両手を掲げて粒子をさらに集め、直径一メートルもの高エネルギー体を創り出す。だがそれは、明らかに試験などの範疇を超えた殺傷能力を秘めていた。

あれに触れれば、間違いなくこんがり焼けてしまうだろう。そして、

「燃えちまえ！」

燃やす気満々、試験と言う事を忘れて『曲線尾』はそれを放つ。目を焼かんとばかりの光と肉を焦がさんとはかりの熱が、遙に襲いかかってきた。

「ひっ……」

遙は悲鳴を上げる事も出来ず、目をきつく閉じて全てが終わるのを待った。

「……………」

だが、いつまで経っても、遙の身を焦がすような熱線はやってこない。

遥が恐る恐る目を開けると、そこには……。

「大丈夫？」

一人の少年が、遥に手を差し伸べていた。
エネルギー体は地面を焦がしていたが、それは少年の目前で跡形も無く消え去っている。

「……………」

遥はあまりの出来事に何も言えず、おずおずとナインの手を取った。

試験のために張られた結界は、並のスキルでは破る事も出来ないのだ。そのため、誰かが助けに入ってくる事などあり得ないと遥は思っていた。それに兵士を育成するこの学校において、規則を破る行為、試験の妨害は退学ものの禁止事項。

遥には信じられなかった。自分を助けてくれる人が居る事が。

それが、ナインと都築遥の出会い。

そして、それっきり、二人が学校で出会う事は無かった。

「……ジョーズ。それは本当の話か？」

「それは勿論、確かな情報だ」

人喰いジョーズの亡霊は、相も変わらず奇天烈な格好をしている。

だが、その口から出た言葉は、真剣そのものだつた。

「君がかつて助けた少女、都築遥は、この四魔戦で黒嶺学園に復讐しようとしている。他でも無い君のためにね。そして、君が現在進行形で護衛しているミラ・ルーナが、最悪の人物に狙われている」

ナインは顔をしかめ、溜息をついた。

「要するに、俺は四魔戦の開かれる九州に行かなきゃ駄目、って事か？」

「それは確定事項だな。生憎、俺と『クリムゾン・ヒーロー血塗られた英雄』は今動けない。仕事が終わりに次第行くが、九州ならば東堂と霧道がいる。お前は魔法使いの護衛とありがたくもない復讐を止めれば良い」

ナインは一際大きな溜息をついた。

「ジョーズは当てにしてなかったが、『血塗られた英雄』も駄目なのか？」

ナインは残念そうに呟き、ジョーズは苦笑を浮かべる。

「あいつは今、とある組織の壊滅とその事後処理に忙しい。何せ、英雄だからな」

「解っているさ。あいつはヒーローだからな」

ナインは今後の嫌な展開のため苦笑いを。

ジョーズはナインの言い回しに苦笑を浮かべた。

そして……。

「へっくしー！」

『クリムゾン・ヒーロー血塗られた英雄』、『勝利の方程式』……緋色勝利はくしゃみをした。

第零ト四章 過去と未来の交差（後書き）

今回はスピノフ的な番外編です。

主人公は……今回の流れ的に解ってしまうと思いますが。

感想・意見・指摘などお待ちしております。

第三間四章 例えば勝利の方程式（前書き）

番外編のプロローグです

第三間四章 例えば勝利の方程式

俺は誰も救わない。俺は誰も救えない。

勝手に救われるだけなのだ。

結局、自分を救う事が出来るのは自分自身。

地下鉄のホーム、俺の視界の隅には一人の女性。

名を知る事も、その目的を知る必要も無い。外見を注視する事すら必要無く、ただ俺はこの姉ちゃんを線路上に突き落とせば良いだけの話だ。

俺の周囲二メートルは、完全に俺の領域。

ベクトルを生み出す事や消す事、四則演算処理や方向の反転が自由な領域。

俺は只、あの姉ちゃんの背後に線路に向かった力を生み出せば良い。足下がふらついて落ちた、そう思われるだけだ。

ジャミングで魔力、スキルの使用不可能になっている公共機関において、それは当然だ。魔法使いが魔法で突き落とすこともない。詠唱や魔法陣が現れ、すぐに足取りが捕まれてしまうからだ。

だが、俺はそれを平然と行なおう。俺やイーグル、ミーナの力は決してスキルではなく、万が一捜査が俺に及んだとしても、国がそれを止めてくれる。

悪く思ふなよ、姉ちゃん。これも、国のためだ。

近づく列車、ここで落とせば確実に死ぬ。

俺はポケットに手を入れたまま、一瞬だけ、力の有効範囲である二メートルにその姉ちゃんを入れる。

瞬間、まるで見えない手に押されたように、その姉ちゃんはふらつき、線路へと落ちた。

任務完了???と、俺はそこから立ち去ろうとし。

俺の視界に紅が混じり、列車は何事も無く通過した。
……何事も無く？

瞬間、俺の領域を超越した拳が飛来、左頬が殴られた。
久方ぶりに殴られた頬はひりひりと痛むが、理解した。
一定の大きさを俺に向かってくる力を無にする領域、それが効かなかった。

考えられるのは、二つ。
全てを無に帰す鎌か、あるいは、俺の力を超越した力。
そして、その鎌を操る『人喰いジヨーズ』が死んだ以上、残されたのは後者の方。

紅？？それは血の色ではなく、お前の髪の色か。

「……よお『血塗られた英雄』」

俺の声は奴には届かない。

俺を殴ったのは、その存在を知らせるためだけ。決して話し合う気など無い。

その力は『勝利の方程式』。

奴には何人たりとも敵わない。この世の物理法則を擦じ曲げて、奴と同じ舞台に立たない限り、奴と相対する事は出来ない。俺の能力であっても、それは変わらない。

圧倒的な強さ。

だが所詮、あいつの力は勝利をもたらすだけだ。
奴は救世主にはなれない。

けれど、あいつはまぎれも無くヒーローだ。

一人の命を奪い、百人の命を救うような正義ではなく、その一人も救ってみせるヒーロだ。

故に奴は、その甘さで血に染まる。

第三間四章 例えば勝利の方程式（後書き）

感想・意見・指摘お待ちしております。

第三間四章 例えば勝利の方程式・1

魔力（魔法使いはマナと呼ぶ方）の証明に当たって、科学技術の産物達はそのエネルギー源を魔力に鞍替えしたかと言われると、実はそうではない。

空気中に存在する魔力も使用すれば消滅する。そして、いつの間にか復活する。どこでも扱える便利なエネルギー源だが、だからといって使用し続けて常に存在する訳ではない。生活に関わる機器は安定して使える事が前提なので、私生活の面では未だに電気を使用した物が主流である。

そのため、世界の文化レベルはあまり進歩しては居ない。移動手段はまだ、陸では自動車や列車、海では船、空では飛行機である（例外として、『瞬間移動』の魔法を行使出来る人間がいるが、スキルとしても魔法としても『瞬間移動』は実現されていない事になっている）。

魔力の証明から四年、大きな変化はスキル、そして『地球防衛軍』ぐらいだろう。

「先輩は悔しくないのですか？ 地球防衛軍に仕事と威厳を取られて」

如月理恵は腰に手を当てて、背もたれにだるく凭れ掛かった自分の先輩を怒鳴った。

対して、怒鳴られた男の方は制帽をくるくると指で回し、やる気なさそうに天を仰いでいた。

「別にそれが欲しくて警官やってる訳じゃないんだから、いいぜそんな事。むしろ感謝したいくらいだぞ、如月後輩。おかげで俺達はこうしてまったり過ごせる訳だ」

「私を先輩と一緒にしないでください。職務怠慢だとは思わないのですか？ これだから、我々警官が税金泥棒と呼ばれるのです」

憤慨する後輩を視界の隅に捕えながら、彼女に先輩と呼ばれた男、緋色勝利は欠伸を噛み殺した。そして一応そのお怒りを気にしているのか、俯きながら頭を掻いていた。

先輩のそんな仕草を見ながら、理恵は頭を捻った。

一体何故、こんな怠惰な男が『クリムゾン・ヒーロー血塗られた英雄』などと呼ばれるのだらう、まさか髪の色だけではないはず、と。

今現在、最も割りにあわない職業とは、お巡りさんである。

地球防衛軍という新組織の設立に伴って、警察官の給料は削減された。というより、吸収された。

一般人がスキルを得る事で生じた問題、それは犯罪の凶悪性が増した事だらう。

自衛のために銃を持つ事が義務づけられている、それと同じような物だ。違いは、それが目に見えないと言う点。

それに対応して出来たのが、『地球防衛軍』。

文字通り、再び侵略戦争のような事件が起きた時に対処するスキル保持者で構成された軍である。しかし基本的な実務は、スキル保持者が起こした犯罪行為の対処である。

警察が行なっていた犯罪の対処は、一般人がスキルを持つ事で危険度が跳ね上がった。犯罪行為を止めに行った警官が逆にやられるという可能性が生まれた。

そこで、犯罪対処に特化した組織として地球防衛軍が生まれ、警

察は犯罪の捜査、自衛隊は災害の支援部隊となった。

その裏には、侵略戦争の犠牲者の大半が軍や警察官などの治安維持に関わった人間で、人員が不足したからだと言う話も有る。

そんな中お巡りさんが残ったのは、見回りと道案内、落とし物の管理などの地球防衛軍がやるには名が落ちるような雑務処理のためであった。楽な仕事に思えるが、実際はそうではなく、常に危険と隣り合わせの職業だ。

見回り、それが理由だ。

街を見回る事で犯罪を抑圧。また犯罪が起こった場合、いち早く駆けつけ地球防衛軍が出て来るまでの時間稼ぎ役、もしくは可能ならば取り押さえる役目にある。そのため、ある程度優秀な能力者であれば、年齢を考慮せずにお巡りさんになれるのである。ただし、安月給で危険なために志望者は絶望的、存続も危うかったが。

お巡りさんと地球防衛軍、どちらが高待遇かを考えれば、一目瞭然だった。

この後輩は何を思っ
て警官になったのだろう、と緋色は内心思っていた。

「仕方ねえな、見回り行くぞ。仕事すれば良いんだろ」

緋色は面倒そうに立ち上がり、血のように真っ赤な髪を振るって派出所を出た。

この人は……、と呟きながら理恵も制帽を被る。理恵の艶の有る黒髪が制帽から少し溢れ、肩にかかる。

文句を言う点を覗けばいい女なのにな、と緋色は制帽を被り直しながら思っていると、

「先輩、嫌らしい目つきで見ないでください。逮捕しますよ」

理恵にギロリと睨みつけられるのだった。

並べば緋色の方が理恵より少し背が高く、年齢も緋色の方が一つか二つ上なのだが、上辺だけの尊敬しか得られていない緋色だった。

「いいか如月後輩。俺達の役目は失われた牙の代わりに、愛くるしい仕草で人々の犯罪意識を静める事だ」

「先輩、言ってる事の意味がまるで解りません。もっと具体的におっしゃってください」

「要するに、悪い事したらやられる！と思わせるのではなく、この人達に迷惑かけたくないから止めよう、と思わせるように振る舞うんだ」

緋色はそう言って、目の前の少女の頭を撫で回していた。

五歳くらいの少女で、脇にカラフルなボールを抱えている。拾った財布を届けてくれたのだった。場所が大通りに面した公園であるため、遊んでいる途中に見つけたのだ推測された。

緋色は、頬が緩みきり今にも涎が垂れそうな表情を浮かべた変態……ではなく、面倒見の良い好青年、という印象を与えるものだった。少女もはにかんだ笑顔を浮かべている。

「財布を届けてくれるなんて偉いな。気をつけて帰るんだよ」
「うんっ！」

とてとてとボールを持って走り去る少女に笑みを浮かべて手を振る緋色を見て、理恵は呟いた。

「……このロリコン」

途端、緋色がギロリと理恵を睨みつけた。

そして流れる動作でダンスでも踊る時のように理恵の片手を取り、ついつと理恵の顎を上げて自分の目と向かい合わせる。一瞬理恵の体が強張るが、どちらも頬の色を変えはしない。

「如月後輩、お前は何か一つ勘違いをしているみたいだな。残念なお知らせだが、俺はロリコンじゃない。その体に教え込ませてやつてもいいんだぜ？ 英雄色を好む、って言うだろ？ まさか、俺が名ばかり英雄だと思ってたんじゃないだろうな」
「……………」

しばしの沈黙の後、緋色は理恵の手を離した。理恵は緋色に背を向け、握られた手首を擦りながら小さく言った。

「……わかりました。先輩が英雄だと言うのを忘れていました。誰でもアリなんですネ」
「……………」
「もう何でも良い」

緋色は溜息を付いて頂垂れ、ふと思い出したように言った。

「如月後輩、お前にお巡りさんの何たるかを教えてやろう」

切り替えが早い人だ、と理恵は思ったが特に突っ込まず、勝手に喋らせる事にした。

下手に文句を言っても、無駄に話が長引くだけである。

「お前が一体何を思ってお巡りさんになったか俺は知らないが、俺の下に付いた以上、俺のルールを貫いてもらう。いいか？」

「……今時上司の命令が絶対というのは納得いきませんが、聞くだけ聞きましょう」

後輩の返事に渋い顔を見せる緋色だが、特に文句は言わず先を続ける。

「一つだけだ。それは??」

プファアー……ン!!!!

甲高いクラクションが緋色の台詞を遮った。

二人はその音がした方向を振り返り、驚いた。

二人から百メートル程先で一人の女の子が、大通りの歩道を走っていた。

五歳くらいの少女……先ほど財布を届けてくれた少女は、慌てたように歩道を駆けていく。歩道を駆けて、車道へと飛び出して行った。

少女の視線の先には、お気に入りのボールしか映っていない。

自分に迫る、トラックの姿は見えていない。

トラックは何があったのか不明であるが、どう考えても大通りを走る速度ではなかった。

大通りには二人の他にも目撃者がいるが、誰一人として少女を止める事が出来なかった。

「????!」

瞬間、理恵は自分のスキル『通信途絶』を発動。

『通信途絶』

無色透明の結界を生み出す能力で、結界内の現象を全て認識させ

ない完全遮断の能力でもある。結界は何重にも重なる事が出来、それによって硬度を上げる事が可能。ただし、結界一つ一つはある程度の攻撃で壊れてしまう。

スキルを最大発動、瞬間的にトラックの前に結界を三枚重ねて張る。

だが、時速100キロオーバーのトラックが多少減速する程度で、完全に止める事は出来なかった。

（距離がありすぎる！！）

スキルは脳から発生する電波で魔力を操作し、何らかの現象を起こす。スキルの範囲、電波の影響範囲は個人によって異なるが、現象を起こす位置は自分から近ければ近い程強くなる。

理恵のスキル『通信途絶』も例に漏れず、本来なら二十メートルが範囲の限界だ。にも関わらず百メートル以上離れた位置に存在するトラックの前に結界を張れたのは、人体の神秘、脳が未だに解明されていないためとしか言えない。火事場の馬鹿力、だろう。

理恵は最善を尽くした。

それでも悔やまれた。目の前で、一人の少女が命を落とす。

それをどうにも出来ない自分が、齒がゆかった。

理恵は目の前に広がるだろう絶望に、自分の体を支えておく事が出来ず崩れ落ちた。

そして。

キイイイイイイイイ！！

トラックが少女の居た位置を大きく通り過ぎ、ブレーキ音を響か

せながら理恵の位置まで来て、そして止まった。

「えっ……………」

理恵は惚けた声が口から漏れた。
音がしなかったのだ。

少女が轢かれる、絶望のエチュードは奏でられなかったのだ。

だが、理恵には確かに見えた。

少女の居た位置に、赤い閃光が走るのを。

「良くやった、如月後輩。お前の覚悟は見せてもらった」

そして、理恵は気付く。

ふわりと、青い制帽が自分の膝へと落ちて来るのを。

それは自分の物ではなく、隣に居た人物の物だと。

そして、その人物が??。

「なに絶望しきった顔をしている、如月後輩。俺の能力は『勝利の方程式』。お前、自分の先輩が誰だと思っている?」

紅蓮の赤髪、不敵な笑み。

そして、小脇に抱えた少女とボール。
そのスキル名は、『勝利の方程式』。

『勝利の方程式』

それは、速さを操る能力。速度 V ベクトルを用いた式で表される
物理現象を操作する能力。

V は勝利のビクトリーでもあり、操るは速度 V を用いた方程式。

そして、約束された勝利の力を持った彼は、こう呼ばれる。

「緋色勝利。『クリムゾン・ヒーロー血塗られた英雄』だぞ？」

第三間四章 例えば勝利の方程式・i（後書き）

久々に書いたので、可笑しな点があるかもしれません。
それも含めた感想・意見・指摘、お待ちしています。

第三間四章 例えば勝利の方程式・2

「よおワンオー。やっぱり、お前の言った通りの結末になっちまったぞ」

ムクロはくくくつと笑いながら、どかりと執務室のソファに座った。

それはとあるビルのとある階にある一室。来客用の机とソファ、それに仕事用のデスクと椅子しか無い質素な部屋だ。大きな窓ガラスから階下を一望出来る事が魅力だろう。

「だろうな。そうであれば仕方ない。奴には自力でどうにかしてもらっただけだ。我々が事件に介入する必要は無い」

ワンオーと呼ばれた男はペラペラと報告書を捲りながら呟く。

茶髪にブラウンの瞳を持った二十代後半の男だ。白と黒の制服で身を包んでいる。

「つつても、今回の事件は絶対相性的にあいつ最悪だろ。不適材不適所の典型的な例だと思うけど？」

「知らん。奴が勝手にやってるだけだ。それでどのような結末を迎えようと、もはや我々には関わりない。……いや、イーグル達には関わるかもしれんがな」

「つつても、イーグル達はもうナンバーズを脱退した訳だし、事実上ナンバーズとは関わりがない訳だが。おいおいワンオー、お前はいつまでこんな写真を持ってんだよ」

そう言っつてムクロは、仕事用デスクの上にあった写真立てを取る。写真は記念撮影の物で、背景に大きな学校、『葉桜学園』と書か

れたプレートが見える。

どうやらその学校の前で写したようだ。写っている人物達は、統一性の無い表情をしていた。

左端にはワンオーが写っている。秋田犬のような茶色の髪に、ブラウンの瞳。右手を顔に当て、呆れた表情を浮かべている。

その隣にはカワセミのような緑色の髪をした二十歳前後の青年。つんつん髪で前髪が長いが、爽やかなイメージを与える人物だ。上の空、といったように空を見上げている。

その隣には、三人の女性。一人は蒼色のショートヘアに、静かで知的な印象を与える整った顔の少女だった。年齢は十七歳程。我関せず、と目を閉じ両手を前で揃えている。

次の一人はバイオレットの髪、董色の瞳の年齢は二十歳前半のくらしいの女性。隣の少女とは打って変わって、騒がしうである。実際、写真でも隣の少女の嫌そうな顔を無視して（気付いていないのか）、絡んでいる。

もう一人は写真の中央におり、ヒマワリのような色の瞳に、黄色と思える程明るい金髪をリボンでまとめている、小学五年生程の少女。破顔一笑でカメラに向かっていているが、その手は隣の女性をつねっている。

その隣に、一匹のネズミがいた。銀色の毛に、黒の瞳。大人しく鎮座しているが、しかしネズミらしくない。

その隣は、白い髪に白い肌、黄色みがかった茶色の瞳をした女性が写っている。年は二十代前後のようで、天真爛漫、一人だけカメ

ラに向かってピースしている。

その隣は、黒の髪に黒の瞳の、眼鏡を掛けた三十歳程の青年。なんだか裏の有りそうな笑みを浮かべ、眼鏡の位置を直している。

そして右端に、ナインが写っている。長い黒髪になっていた。さらに、どういう訳なのか、格好が一人だけ可笑しい。他はナンバーズのコート姿だと言うのに、彼だけはセーラー服。この場合残念というのか、幸運というか、見事に様になっていた。普通に違和感が無い。羞恥心にやられたように、一人項垂れていた。

ナンバーズ。その九人が全員写った、唯一の写真。

この事件以後、三人が脱退し、今ではその所在も掴む気が無い状態だった。

「悪くはなからう。あの頃が一番平和だったのだ」

「……平和、ねえ」

少なくとも、葉桜学園の人間は皆殺しにしただろ？　それで本当に平和か？

ムクロはそれを声に出さずに、心に止めておいた。

「貴様には解らんよ。少なくとも、私に取ってはあの頃が一番だった」

「あつそ。閑話休題。で、『血塗られた英雄』はどうすんだ？」

「だから、奴には自力でどうにかしてもらおう。所詮突き詰めれば誘拐事件だ。簡単だろう、奴にとっては」

黒い犬歯がその口から覗いていた。

「ふざけるな！」

男は呆れるしか無かった。

場所はビルに挟まれた路地。そこはまるで異次元であるように、男と彼が対峙する者しかない。二人の男の呼吸しか聞こえない空間となっていた。

男の手には、オーバーヒートし煙を上げる機関銃。

機関銃の弾丸は、全て当たっていたはずだ。そう、確かに当たったのだ。

しかし、赤青の男は悠然たる態度で男と今も尚対峙している。

警官の制服に、赤い髪。

『血塗られた英雄』、緋色勝利。

「はい、銃刀法違反、公務執行妨害で現行犯逮捕」

「お疲れ様です、先輩」

バリン、と何かが碎ける音がし、街の喧騒が二人の耳にも届くようになる。実は昼日中の戦いだっただの。

男に手錠をかける緋色に、同じく青い制服を着た如月理恵が、形だけの敬礼をしてみせた。

と、ビュツ、と風が吹いた。

たーん、と遠くから音が聞こえ、緋色の頭部付近からぽとりと塊が落ちる。

「そ、狙撃っ！」

という理恵の声が、誰からの反応も返ってこず、虚しく裏路地に響いた。

その路地には、手錠をかけられた男一人しかいなかった。しかしそれも一瞬。

どさりと叩き伏せられたような格好の男が現れ、

「同上の罪で、お前も逮捕だな」

男の背に足を乗せた緋色が現れた。男の手にはライフル銃。炎のような髪をかき上げ、一仕事終わったと言う緋色。

「しゅ、瞬間移動!？」

「只の時空移動だ」

驚いたような男の手からライフル銃を奪い緋色は、何かをした。瞬間、ライフル銃は粉々、塵になるレベルまで碎け散った。

「さて如月後輩、地球防衛軍に連絡だ」

「……………もう来てます」

路地の入り口には、スーツ姿の男達が待機していた。

二人の犯罪者を引き渡して、巡回を兼ねながらのんびりと派出所に戻る二人だった。

「それにしても先輩の能力……反則ですね。ライフルすらも無効化しますか」

「速度を用いた攻撃で俺を殺そうなんて、豆腐の角で頭をぶつけて死ぬより難易度高いぞ」

呆れたような理恵の眩きを緋色は茶化す。
むっ、と睨む理恵。

「誇張にしても言い過ぎじゃないですか？」

「いや、誇張でもなんでもないぞ。ある速度を超えた物質は、俺に触れれば速度0になるからな。銃器で俺を殺そうなんて、不可能なんだよ。まあ、その速度以下の攻撃は避けるしか無いんだがな」

緋色の能力、『勝利の方程式』は速度を扱う。

緋色は身の安全の確保のため、常にある速度を超えた物質の干渉を拒んでいる。お巡りさんと言う仕事である以上、地球防衛軍程ではないが危険と隣り合わせになるためだ。

昨今の犯罪者の大半がスキルを用いるが、銃が犯罪に使われなくなったかと言えば、そういう訳ではないのだ。

「……しかし、なんか最近多いんだよな。まるで俺を試すかのような、突っかって来たような犯罪者が。裏ルートで賞金首になってもなってかな」

「驕りじゃないんですか？」

「……如月後輩、俺は一応有名人だ。裏組織の壊滅とか、結構頻繁にやってんだ。だから目をつけられやすいし、お巡りさんだから舐められてる」

「それでは、地球防衛軍に勤めれば良いのではないですか？」

あのな、と緋色は頭をかく。

「俺は誰かを守るためにこの力を使いたいんだよ。皆を守る、身近なヒーローってのに憧れてんだ」

二ツと緋色は笑みを浮かべてみせた。

「お前は知らないかもしれないが、俺はお前だって助けてんだぞ？
それも、お巡りさんをやっていたからな。それは、地球防衛軍だ
つたら無理だった事だ」

「…………。おっしゃる意味がまるで分かりませんね」

呆れたような、馬鹿にしたような、感心したような、哀愁の籠った、熱意の籠った、感謝の籠った視線を、如月は投げかけた。
それは、見る者が見れば、酷く意地悪な表情だった。

「解らないなら解らないでいい。俺は感謝されたくて助けてる訳じゃないからな」

わしゃわしゃと後輩の頭を撫で回す緋色。
直後、脹ら脛に蹴りが入った。

「こほん。……事件と言えば、最近子供の誘拐事件が多発してます
よね。先輩、何か知ってますか？」

「要求不明で突然返してくる誘拐事件か？ 知らないな。目の前の
事件しか解決しないのがお巡りさんだから」

ふと、緋色は立ち止まり、横の路地に目を凝らした。理恵も一緒
になって路地を覗く。

薄暗い路地の奥で、引っ張られていくように一人の少年が消えた。

「っ！？」「…………噂すればなんとやら。誘拐事件か」

こっそりと路地を進み、少年が消えた角にさしあたる。理恵がい
るか背後を確かめ、緋色は囁く。

「行くぞ、如月後輩。略取誘拐罪の現行犯だ」
「……………はい」

理恵の小さな返事に、緋色は一度後輩を見て、気付いた。
理恵の身体は震えていた。

自分の対処がまずければ先ほどの少年は人質となり、最悪殺されてしまう……………そんな責任感が彼女を押しつぶそうとしていた。

「怖いか、如月後輩。武器もないお前は、いつも通りに後ろで見て
いてくれて結構だぞ」

「……………はい」

珍しく捻くれた事も無く素直な後輩に、不謹慎にも笑みが零れそうになり必死で抑える緋色。
そして、その笑みを皮肉へと変える。

「如月後輩、安心しろ。お前は誰の後輩だ？」

理恵はその馬鹿みたいな台詞に思わず吹き出してしまい、目に浮かんだ涙を拭って、答えた。

「甘い夢を見ているお馬鹿なお巡りさんの、です」

「よし、これが終わったら一杯奢ってもらう。貴様に上司への態度
って奴を教え込んでやる」

「いいですよ。どんと来いです」

気の迷いが晴れた、といった後輩を見て、緋色は正面を向く。
そして、路地の角を曲がろうとして??。

「がはっ!？」

血が口から溢れ出てきた。

何かが、自分の身体から突き出ているのが、見えた。

赤色に染まった銀の刀が、緋色の腹部から突き出ていた。

『勝利の方程式』の例外。

ある速度以下の攻撃。それは、刃物による斬り付けや突き刺し。

それは本来自分で対処出来る部類の攻撃だ。そのため、自動で防御されない。見えていれば、避けられる。

緋色は確かに背後を確かめていた。刃物を持った人間など、誰もいなかった。

いたのは理恵だけで、武装はさせていなかった。

何が起こったのか、緋色には解らない。

ただ、背後の後輩を心配した。

油断していた。武装させておくべきだった??と後悔し。

「ぐはっ」

引き抜かれる刃に、吐血しふらふらと路地の壁を背に崩れ落ちる。その血の色も、歪み無い紅色。

緋色は明滅し始めた視界を上げ、後輩の安否を確かめる。

「き、如月、無事??か」

その声は、途中から落ちて行く。
希望から、絶望へと。

如月理恵が血振りをするのは、三十センチ程の短刀。

『通信途絶』

無色透明の結界を生み出す能力。
結界内の現象を全て認識させない完全遮断の能力。

空間内にある物体は、視認する事は出来ない。
刃物を結界内に入れて持ち歩けば、誰にも知覚出来はしない。
武装はない、裏切りは無い、そう信頼しきった緋色の判断は、甘かった。

「……甘いですよ、先輩」

彼女は責任感で押しつぶされそうだった。

緋色勝利を殺さねば、先ほど誘拐された少年が殺されると知っていたから。

誘拐された少年、彼女の弟。

それは、身代金、肉体目的の誘拐事件ではない。

十分に力を持った一般人に、犯罪の協力を要求する誘拐事件だった。

た。

第三間四章 例えば勝利の方程式・2（後書き）

久々のため、感覚が掴めません。おかしい部分があるかも。

感想・指摘・意見お待ちしております。

あと一話で、一応番外編終了予定。

第三間四章 例えば勝利の方程式・3（前書き）

久々の投稿のため、誤字脱字、おかしい点があるかもしれません。
あらかじめご了承ください。

第三間四章 例えば勝利の方程式・3

壁に背を預け、次第に血だまりと化していく路地に座る緋色。

溢れる紅の雫を止めるべく、必死に傷口を抑える。緋色は『勝利の方程式』で細胞分裂の速度を上げ、傷口を塞ごうとし??、くりふらりと思考が泳いだ。

毒。

そう緋色が理解した時には、もはや緋色の身体は力なく路地に倒れた。壁に背を預けておく事すらも出来ず、血だまりに横たわる。

「く……そ……、冗談??きつい、ぞ」

緋色の視界は次第にぼやけていく。そんな視界に、暗い影がさしかかった。

「あちゃー、やっぱりこうなったのか」

その惨状を見ても楽天的な声を上げる一人の少年が現れた。この結果が予想通り、それでもまだ何らかの展開があると言いたげな軽い声。

声に聞き覚えがあり、その人物の名を緋色は呟いた。

「む、ムクロ……」

「喋んなよ。死ぬぞ?」

ムクロはしゃがみ込み、緋色と顔の高さを合わせ、不敵な笑み浮かべる。

「おっと、勘違いすんなよ。俺はお前の遺言を聞く気はねーし、頼みを聞く気もねーぞ。俺達の関係、忘れたとは言わねーよな」

そう言っ、以前殴られた頬を擦ってみせるムクロ。

「アイツ、如月理恵は何も悪くない。弟想いの良い姉貴で、この誘拐事件の被害者だ。出来れば助けてやりたい。だが、アイツのスキルは危険だ。暗殺のスキルとしちゃ、少々優秀すぎる。何せ、『血塗られた英雄』を殺す事も可能なんだからな」

緋色は血で濡れより赤くなった唇を歪めたが、声は上げなかった。

「だから俺は、アイツを殺そうとした。要人の暗殺を防ぐためだ。結果、それはお前に邪魔されて失敗し、そのお前は今無様に寝ている」

皮肉なもんだな、とムクロは笑った。だが、と話を続ける。

「俺は地球防衛軍、ナンバーズが一人、No.シックス、ムクロだ。ナンバーズの存在意義は??犠牲。より多くの人を救うには、犠牲は付き物だっ、て意味だ」

ムクロは踵を返し、緋色に背を向けた。正義のヒーローに背を向ける事で、背徳を意味するかのよう。

「俺はお前のように、誰も彼もを助けやしない。俺の救いは??死だ」

ムクロは薄暗い路地から、明るい街の方へと歩を進める。ヒーローが薄暗い路地に転がり、人殺しが光溢れる街を闊歩する。

「お前は黙って見てるんだな。俺達は殺すが、その犠牲を無駄にはしない。それが嫌なら、俺を殴っても止めるんだな」

「……………」

緋色は動けない。

「お前はヒーローだが、神様じゃねーんだ。誰をも一人で助けられると思ってるじゃねーよ」

そして、ムクロは去っていた。

「……く、そ、また??? こうなるのか」

緋色は自分の無能さを噛み締めた。

周りがどれほど彼をヒーローと崇めた所で、自らの事を『血塗られた英雄』と鼓舞した所で、緋色は心の奥底では自分を誇れはしない。

『侵略戦争』、彼は英雄となった。

だがそれは、彼がより少ない犠牲でその戦争を終結させたが故にだ。

かの戦争で緋色は、本当に守りたかった者を守る事は出来なかった。

誰もを守りたかった。誰も失いたくなかった。それは敵と呼ばれた存在にも及び、結果、彼は本当に守りたかった者を失った。

もう二度と、あんな思いはしたくない。その思考が緋色を動かす。ばやけていく視界、緋色は力を振り絞り、路地から出ようと腕に力を込める。

だが、毒と出血で意識が朦朧とし、能力が満足に使えない緋色。

それは死期を速める行為でしかなかった。

「……………」

緋色は気付いた。

粉雪のように白い羽が緋色の上に舞い降りてくるのに。

それは、こうとしか形容出来ない物。

??天使の羽。

如月理恵には、一人の弟しか家族がいない。

母親は弟を生んで死んでしまい、父親も交通事故で死んだ。結果、年の離れた弟との二人暮らしとなったのだった。

十歳年の離れている二人だが、仲は良く、国からの支援で問題なく暮らす事が出来た。そして理恵は無事に就職し、弟も何事も無く学校に通っていた。

そんな理恵の元に訪れた不幸。

それが、弟の誘拐だった。

求められたのは身代金ではない。理恵のスキルだ。

理恵のそのスキルがあれば、その筋では最強と呼ばれる存在、『血塗られた英雄』を殺せる。故に理恵の弟は狙われた。優秀なスキルを持ち警官と言う職業の理恵を誑かすのは不可能だったから、未だスキルを持たない非力な弟が。理恵は二択を迫られた。

『血塗られた英雄』、緋色勝利の命か、弟の命かを。
答えは、苦渋の決断だったが、迷えはしなかった。

「言われた通りにしたわ。……だから、弟を」

そう吐き捨て、理恵は緋色を刺した小刀をリーダーの前に投げ捨てた。

港にある倉庫、そこがこの誘拐事件の犯人達のアジトだった。

犯人達は九人程度の少ないメンバーだった。覆面を被り、分厚いグローブを填めた男をリーダーとした、どう見ても表を歩けないようなメンバー構成だ。

覆面の男は落ち着き払って、理恵に言葉をかける。

「まあ落ち着け。弟は返す。君もこんな所を見られたくはないだろう？ ……しかし、見事な手際だった。ぜひとも今後もうちで働いてほしい人材だ」

「巫山戯ないで。早く弟を返して」

覆面男の言葉を一蹴し、理恵はキツと男達を睨みつけた。
やれやれとでも言いたげに、覆面男は肩を竦めた。

「……連れてこい」

覆面男が仲間の一人に命じ、倉庫の奥へと向かって行った。
そして、ぐったりとした弟が理恵の元へ投げられた。

幸いにも気絶しているだけだったが、やせ細り飢餓の状態だった。

「貴様等！」

理恵が動こうとし、瞬間男達が銃器を構えた。

スキルと銃、どちらの方が速いか、それを理恵は理解している。

「……酷い」

「仲間にならぬと言うのなら、殺すしかあるまい？」

怒りで歯を食いしばる理恵に、覆面男は更に絶望を投げかける。

「まさか助けが来るなどと思っては居まい？ 君に助けなど来ないぞ。特に、緋色勝利は絶対にな」

「なっ、何を……」

覆面男は口元を歪める。

「君は緋色勝利を刺した。私は『血塗られた英雄』を刺せと命じたのだから、そうだろう。だが私は、緋色を殺せとは命じなかった。だから君は、緋色を刺したが殺しはしなかった」

理恵は意識せず、ごくりと唾を飲んだ。

それを視界に入れながら、男は語り続ける。

「この短刀で奴の首を掻き切れば、奴は死んだだろう。心臓を一突きしても、奴は死んだ。だが、腹に突き刺した程度では、あの男は死なない。なぜなら奴は、『血塗られた英雄』だ」

『血塗られた英雄』。

それは、『侵略戦争』において、一人でも多くの人を救おうと奔走した彼に与えられた称号。その英雄はその身を血に染めて、戦っ

た。その血が誰のものかなど、語る必要などないだろう。

だからそう、理恵は信じていた。

緋色が死なない事を。

「だが、残念だったな。この短刀には毒を塗っておいた。じわじわと痛みを伴う、精神から破壊する毒がな」

男は理恵が投げた短刀を拾い上げ、その刀身を撫でる。

瞬間、何に反応したのか、銀の短刀は不気味な紫色の刃物へと変化を遂げた。

「スキルにしろ、魔法にしろ、どちらも思考が必要不可欠だ。特に細かい作業、例えば傷の回復などは集中力を有する。逆に言えば、マトモな思考能力がなければ満足にスキルは使えない、という事だ。精神を破壊してしまえば、スキルは使えないと言う事だ」

緋色勝利の恐ろしさは、その能力、『勝利の方程式』にある。

速度を操るのではなく、速度と関係する事象を操る、歪な能力。その能力は、時空すら操作する。

「奴が死のうが生きていようと、私達には最早関係ない。奴のスキル、『勝利の方程式』が封じられればそれで良かった」

覆面の下で男が歪んだ笑みを浮かべたというのが、見えなくても解った。

「ありがとう如月姉弟。君たちのおかげで、『勇者の復讐』は成功する」

覆面男が手を挙げると同時に、理恵達を取り囲んでいた男達が一

斉に銃器を構え、そして??。

「えっ……………」

??瞬間、倉庫の扉がトラックにでも突っ込まれたように吹っ飛んだ。

気付けば、理恵と弟は一人の男に小脇に抱えられている。

「なっ!?!??ッ!?!」

「馬鹿共、止める!」

男達が焦り、引き金を引こうとし、覆面男が止めに入ったが、それは遅かった。

瞬時、悲鳴の重奏が倉庫に響き渡り、引き金を引いた男達が仰向けて転がった。

あまりの速さに、理解が追いつかず、反応が置き去りになった。

男の第一印象は赤。

紅蓮の髪に、炎を宿したような灼眼。

深紅のマントに身を包み、真っ赤なグローブ填めている。

男は血のように赤い唇を歪めた。

「悪いな如月後輩、ヒーローは遅れて来るもんだ」

『血塗られた英雄』 緋色勝利が、不敵な笑みを浮かべた。
理恵の意識は、何故か遠のいた。
それが安堵のためだったのか、疲労のためだったのかは解らない。

「くそっ、何故貴様が生きて??がはっ」

覆面男が踵を返そうとし、その顔面が緋色に捕まれた。
一瞬で覆面男の前まで移動したのだった。

「俺を誰だと思ってやがる? 俺の能力をなんだと思ってる?」

緋色は、寧猛に笑みを作る。

「速度ベクトルを操る? 違うな、全然違う。俺の能力は、そんな一般枠に捕われる力じゃない。俺の能力は、勝利を約束された力?

？『勝利の方程式』だ。理屈じゃないんだよ」

そして、緋色は血に染まった。

街の中心部のある病院は、世界で最も天国に近い病院だ。その意味は二つ程あるのだが、一つはその病院が超高層であると言う点である。

その最上階にある病室、そこは要人のための病室であつた。超高層であるため狙撃されない、変な所で凄いその病室は、二人部屋である。その窓側に寝ているのは如月理恵だつた。

誘拐犯に受けた傷は少なかったものの、大事を取つての入院である。最低な二択を迫られていただけ合つて、精神の方に疲労がたまつていたのか、今は深い眠りにについている。

それを見下ろすように、緋色勝利が立っていた。

「……つたく、つまんねー意地張るからだ。馬鹿が」

誰に言うわけでもなくそう呟くと、緋色は踵を返し、病室を後にしようとした。

「ありがとう」

その背に声がかけれられ、緋色は動きを止めた。

「……寝てると思った」

そして、不敵な笑みを浮かべた。

「これで借り一つだぜ？」

緋色は振り返り、もう片方のベッドで寝ている男に語りかけた。

ベッドで寝ているのは、紅蓮の髪をした男だった。

その男に話しかけた、立っている男も、燃え上がるような赤髪の男だった。

不意に立っていた男の姿が変わった。

銀色の髪を持った青年へと姿が変わり、人懐っこい笑みを浮かべた。

「お前は間違いなくヒーローだ、緋色。俺には立てない場所だ。だから、無理矢理にでもその位置に留まってもらう。……嫌がらせだな」

「ムクロ……」

ムクロは、犠牲を選んだ青年は、人を殺す事を選んだ青年は語る。

「ヒーローってのは、ピンチの時に駆けつけてくれる奴じゃない。

それは白馬の王子様で十分だ。ヒーローは、その行動が他人の心を打つような奴だ。敵を味方に、裏切りを信頼に、ってな。行動の善

悪じゃない。そいつがやる事なら、間違いはないと思わせるような奴だ」

「……俺は仲間が居なけりゃ、何も出来ないぞ」

緋色は、俯き呟いた。

この事件、彼は病室で寝ていただけなのだから。

だが、ムクロは笑った。

「だからこそ、お前は本当にヒーローだよ。ピンチの時なら誰だって協力させちまうんだから」

??この俺をもな、などとムクロは言った。

「なんだよ、今回はお前に殴られるような事はしてないぜ?」

ムクロは皮肉気に笑みを浮かべ、壁に寄り掛かる青年に語りかけた。

「元ナンバーズ、No. ツー、イーグル」

イーグルと呼ばれたのは、白衣に身を包んだ二十歳前後の青年だ。カワセミのような緑色の髪をしているのが特徴的。つんつん髪で前髪が長いが、爽やかなイメージを与える人物だ。

「……今回の件については、僕からは特に言う事はない。ただ？」

と、イーグルの言葉をムクロが遮った。

うんざりだ、とでも言いたげに。

「そいつは聞き飽きてるな、イーグル。人を殺すなって言いたいんだろ？ そうだよな、『死者をも生き返らせる医者』である、お前だもん。《天と光の使い》さん」

「僕は死人を生き返させる事は出来ない。ただ、死んでいなければ助ける事が出来るだけだ。だから？？殺すな」

くくくつとムクロは笑い、大げさな身振り手振りを加えて語った。

「なあイーグル、人は自然と他の生物を殺す生き物だ。だからこそ、宗教はそこを戒律で縛る。そうしなかったら、人は人をも殺し、絶滅の一途をたどるからだ。だが、人って奴は元々、殺人衝動があるんだよ。だから、異教徒なら殺しても良い、戦争だから仕方なく殺し合えるんだ」

「……人は殺し合うべくして生まれた、とでも言いたいのか？」

「じゃねーとオカシイだろ、これほど平和を望む人がいて、どうして世界は平和にならない？ そりゃ、潜在意識として殺害願望があるからじゃねーのか？」

「……理解出来ないな。やはり、僕たちは解り合えないようだ」

笑みを浮かべ、ムクロは歩き出した。

「正義の敵が悪であれば、どれだけ良かったかな」

無表情でイーグルはムクロと反対へと歩き出した。

「正義の敵はいつだって正義だ。それが自分にとっての正義であるか、大勢の正義であるかの違いしかない」

窓から差し込む夕日によって二人の影が床に映っている。

不意に人型であったムクロの影が歪み、奇怪な形へと変化して行った。

「中途半端な悪は、正義の敵にはなれない。正義が正し過ぎて、悪でいることが出来なくなるからだ」

そう言ったムクロの影は、《鬼》の形をしていた。

「また、正義に対抗出来るような絶対悪は、揺るがない悪は、最早それも正義だ。正しいと思えなければ、それを貫き通す事など不可能なのだから」

イーグルの影も形を変え、それは《天使》の形となっていた。

「イーグル、いや、『死者の冒瀆』。俺はお前の敵だ。お前が生き返らせれないくらい、俺は人を殺すぜ」

「ムクロ、いや、『生者の蹂躪』。お前は僕の敵だ。お前が殺さない人間を僕は救い続けよう。??いや、お前が救った人間を、僕は助け続ける」

二人の歪な関係は、歪な世界であつたが故に存在出来た。

第三間四章 例えば勝利の方程式・3（後書き）

感想、評価、意見を頂けると、作者のやる気が出ます。
お手数でなければ、お願いします。

第四章 四魔戦・1

侵略戦争において、七人が侵略者を滅ぼした。

侵略者は昆虫を模した肉体を持ち、プラントと呼ばれる巨大な船により襲来した。最初にそれが襲来したのは日本で、最初にそれを撃退したのも日本であった。そして、その日本を今治めているのは、その七人の一人である。さらに七人の一人である、『死者の冒瀆』も日本にいる。また、その七人に数えられないが、『血塗られた英雄』と呼ばれる存在も日本にいる。

そのため、誰もが薄々感づいている。

たったの七人で侵略者を滅ぼした訳はない、という事を。

侵略戦争において英雄視された存在は、七人だけだ。

名を明かしたのが七人しか居なかった、一般人の大半が地下シエルターに避難し、戦場の様子は戦闘の当事者以外誰一人として知らない、と言っのが理由だ。

七人以外は、平凡な日常を求めた。『英雄視されるために戦った訳ではない、日常を守るために戦ったのだ』と彼らは語り、それぞれの日常に戻って行った。

対して七人は、魔法を使える事を公表し、英雄となった。

それは、秋山雪日ならばこう語るだろう。

『英雄は犠牲だ。英雄は希望を与え、それと共に絶望をも与える存在だ。救えれば英雄は英雄だが、救えなければ場違いな恨みの対象だ。不幸な者に希望の光を見せて、結局不幸になれば、その不幸は絶望となる。英雄とは、救われない存在だ。好き好んで英雄となる事を選べるのは、よほど自分の実力に自信のある奴か、単純な奴だけだろう』

そして、七人の一人、ヴィルヘルム・ハルデンは前者の人間だっ

た。

ヴィルの顔は青ざめていた。

彼がいるのは、彼の知り合いを集めた屋敷のホールの入り口だ。大理石で出来た床はピカピカに磨き上げられ、天井にはシャンデリアが輝いている。まさに金持ちの屋敷、と言わんばかりだった。

だが今彼の目前に広がるのは、目を覆いたくなる赤色と惨殺死体の数々。首、腹、四肢を切られた死体があちこちとホールに転がっている。魔法やスキルでやられたのではなく、鋭利な刃物で身体を切断されていた。

そして、ホールの入り口で呆然と立ち尽くす彼に声をかける男が居た。

「英雄、ヴィルヘルム・ハルデンかね？」

三十代半ばの男で、上等なスーツを纏っている。その格好は、場の雰囲気に合わせていると言えた。無論、それはこの惨状が生み出される前の話である。そして、男がその中心に居なければ。

だが、それ異常に目を引く物がある。

長剣。

時代錯誤としか言いようのない、色とりどりの宝石で飾られた輝く宝剣を持っていた。売ろうとしても売れない逸品だ。勿論、価値の付けられた物ではない、という意味で。

もつとも、今はべつとりと血が付いており、過去に何人もの命を奪ったような、曰く付きの品にしか見えなかったが。

そして男はその顔を隠す事も無く、ヴィルへと顔を向けた。

「お前はっ！」

ヴィルはその男を知っていた。

男は有名人であったが、数年前からその消息は絶たれていた男だ。その背後にまわりつくのは、一つの国家の闇。

その国家の闇の存在は、英雄の一人として知っていた。

男の顔は当時から大きく印象が変わり、当時のきりつとした顔立ちは、無精髭に痩せこけた頬と見る影も無くなっている。男がこの数年、厳しい生活を送って来たのが伺えた。

だが、解らない。

何故自分の元にこの男が来たのか。

けれど、ヴィルはそれを尋ねるだけの冷静な頭脳を持っていなかった。

ホールで死んでいるのは、他でも無い彼の知り合いだ。

「この野郎おおおおおお！」

ヴィルは駆け出していた。手ぶらで、何の装備も無しで。

それは酷く無謀に見えるが、ヴィルは魔法の存在を認めさせた一人だ。

「……………」

突っ込んで来るヴィルを静かに見据え、男は長剣を竹刀でも扱うように軽々と構え、ヴィルと交差した。

交差する瞬間、男の持った長剣が一秒間に八発もの突きを繰り出した。

さながらRPGの剣技、魔力が存在していなければ実現不可能な剣技だろう。

だが、ヴィルはそれを全て見切った上で、攻撃の後の隙を付いて男の顔を鷲掴みにした。そしてそのまま男を地面に叩き付ける。大理石の床に罅が入り、瞬時、粉々に砕かれ男の顔をその瓦礫に埋め込んだ。

ヴィルヘルム・ハルデン。

魔法使いであり、能力者である。その能力は『時空緩和』。

俗にいう体感時間を操作する能力。彼の扱う魔法は、脳内で詠唱する事で発動する。体感速度を緩やかにする事で男の攻撃を避け、それと同時に脳内で魔法を詠唱、肉体を強化していた。

侵略戦争を終わらせた七人の一人、その実力は十分に合った。

だが、緋色勝利という男を知っている者に取っては、その能力は見劣りするものであった。

大理石を砕く程強く頭を叩き付けたのだ、こいつも無事ではないだろう。

ヴィルは油断していた。

俗にいう、やったか？ フラグを立てていた。

ヴィルは、自分の実力に自信を持ちすぎていた。周りが見えなくなる程に。

「駄目だな。所詮英雄、勇者には及ばないな」

その言葉と共に、ヴィルの胸から一本の刃が突き出た。

男が倒れたまま剣を突き出していた。

「がはっ!？」

自分の胸から突き出た剣を一目見て、ヴィルはよろよろと後ずさりをした。対して男は悠々と立ち上がり、ヴィルから剣を引き抜いた。

男は、まるで無傷だった。男の顔には傷一つない。

そこで、ヴィルは気付いた。

これだけの惨状を生み出しておきながら、男が返り血の一つも浴びていない事に。

剣が引き抜かれると同時に、ヴィルは呻き声と共に血を吐き出した。ふらふらとヴィルは崩れ落ち、男は落ち着いた様子でその剣の血振りをする。

「ふ、巫山戯るな! 貴様のような奴が勇者など!」

ヴィルは傷口を必死に押さえ、必死で男に向かって吠える。

血液の流れが緩やかで、とても心臓を突き刺された男には見えなかった。

さすがは七人の英雄の一人だ、と男は感嘆の言葉を述べた。だが、男は笑ってみせる。

「君は何か勘違いしているようだな。勇者とは、なろうと思っただけで存在ではないのだよ? 勇者は、血筋から決まっている。残念ながら、意志の力だけではどうにもならないのだ」

男は憎々しげに、その言葉を吐き出した。

「逆に言えば、なりたくて勇者となっている勇者など、存在しないと言っ事だ」

男は長剣を振り上げ、その狙いをヴィルの頭部へと付ける。
そして、口元を獰猛に歪め、その言葉を呟いた。

「これは《勇者の復讐》だ」

第四章 四魔戦・1（後書き）

感想・指摘・意見・評価などを頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7353o/>

例えば勇者の模造品

2011年8月24日18時24分発行